

コローラン

はず、同胞として其情義を盡くし協力して未信者と抗争し、汝等に逆ふものは神の道の爲に彼等を討て。何れの處に於ても不信者あらば之を殺せ。戦争は神の命なり。神の宗教の外、宗教なきに至るまで戦へ。

との教訓は彼等を激勵し、信者は異教徒と戦ひて勝てば如何なるものを掠奪するも罪せらるゝことなく、不幸にして戦歿するとも神は信者の靈を導きて直に天國に趣かしむべしと信じたり。彼等の信仰は多くの點に於て猶太教基督教と異なることなく、唯だ猶太教徒の如くエルサレムを以て宗教上の中心とせずして代るにメツカを以てし、基督教に對しては三位一體の説を駁して唯一の神を説き、耶蘇神子の説を目して不稽の謬語となしたりといへども、其天國地獄の説を立てて末日審判をいふ如き死生觀に於ては大差あるを見ず。コローランにいふ、

天國と地獄

天國は樂むべし、地獄は怖るべし、善と惡とは必らず報償あり。と、七重の地獄を立て、罪の輕重によりて差等あり其罪惡の甚しきは狂

火炎々の中に投せられ、飲むべき水は火の如く、食すべきは枯燥せる荆棘のみと説き、天國にも亦七重ありて涼風徐ろに來り、綠樹葉濃かにして花の如き美女は其傍に侍し、噴泉は所々に玉を吐くの樂園なりとし、身命を賭して神の爲に盡すもの此境に至るべしと示し、劍かコローランか、コローランを信するものは來て我が同胞たれ、信せざるもの、頭上には劍あるのみと。終に政治的軍團的組織を以て亞刺比亞全土を統一し、更に他の國民に宣傳せんとしたりしが、まだ之を行ふ能はずして紀元六百三十二年六月八日を以て逝きぬ、彼れ死に垂んとして病床に叫びていふ、主よ、猶太人と基督教徒とを亡ぼしたまへ、全亞刺比亞には回々教の外、他の宗教あらしめたまふなかれ。

戦争と天國

と、彼れの後を繼ぎしものをアブベクルといふ、彼れは天國は劍戟相交るの中にあり。

と絶叫して、終に小亞細亞を併呑し、アブベクル以後歴代、此教是を保持して南は埃及を略し、西は歐羅巴に入りて、屢々基督教徒と戦を交へ、

歐羅巴以外に文明なしと思惟せる彼等を驚かし、基督教以外に天啓なしと信じたりし彼等をして歐羅巴以外に文明あり、基督教以外に天啓あるを知らしめ、基督教に酔へる歐羅巴人を覺醒し、彼等の死生觀に一轉機を與ふるに至りぬ。

## 第四章 近世の死生觀

### (一) 宗教改革者の死生觀

使徒彼得が後董として、歐洲信仰の中心たりし羅馬法皇の教會は、中世の全盛期漸く去り文藝復興の曙光、東方文明の紅を伊太利半島に潮せし頃より漸くにして衰運の萌見えそめ、煩瑣神學の頹廢、神秘論の勃興、印刷術の發明、自由討究の精神は、次で來るべき改革の運動をして其立脚の素地たらしめ、終に獨逸森林の偉人マルチン、ルーテル(Martin Luther)を起たしめ、曾ては一國帝王の尊貴をして衰を階前に乞はしめし羅馬法皇をして戰慄せしむる宗教改革の大業を成就せしむるに至れり之もとりルーテルの人格に由るといへども亦實に時代の趨勢が刻々に此偉人を迎へたるに外ならず、まことやランケが云へる如く「宗教改革の時に至る迄、世人は羅馬法皇の權威偉大なりと思ひしとは雖、實は第十五世紀以

降第十六世紀初頭、僧侶の権利著しく、俗界の爲政者に侵畧せられたるありしものにてルーテル以前、既に幾度か法皇の横暴、會僧の腐敗を憤り、改革を稱へたる者決して尠きに非ず。英國のジョン、ウイクリッフ(Wycliffe)、ボヘミアのフツス(Jan Hus)及びフロレンス市のサボナロー(Sabotina)の如き即ち是なり。彼等は運拙くして或は秘かに羅馬教徒の眼を免れ、或は非命の最期を遂げ、殉教の誠に身を捨てしが、其死生の間在りて秋毫も自ら信ずる所を枉げざりし意氣は決してルーテルに劣りたるに非ず。宗教改革の效は之をルーテルに歸すべしと雖ども、其創唱の效と、身命を惜しまざりし沈勇の態度は改革以前の先驅者に於て、明らかに之を見ることを得べし。

ジョン、ド、ウツクリッフ(一三二四?—一三八四)の名の初めて現はれしは一千三百六十年、英國王室と羅馬法王朝との間に起りし貢賦の問題に關し、英國王室の獨立を國會に於て主張せしに始まり、其以前は唯オクスフォード大學の學生たるに過ぎざりき。之に由りてウイクリッフは王

ジョン、  
ウイクリッフ

室の徳とする所となり、母校の神學教授に任じ、次で一千三百七十四年、王室の旨を奉じて、法王朝に使し(和蘭)監督撰擧の法に關して法王の使者と談ずる所ありしが、この行、親しく法王の奢侈壓制、會僧の腐敗墮落を見、深く之を惡むの念を生じ。國に歸るに及んで、終に、法王の反基督<sup>アンチキリスト</sup>なるを宣言し、且つ自説を書して之を世に公にしたりき。法王クレヴォリオ十一世は、ウイクリッフのこの擧を聞いて大に憤り直に之に罪を宣し、十九條の論點を擧げて非難せしが、英國の王室及び國會は深くウイクリッフを庇護し終に刑を加ふるを承認せざりき。一度法王の非を鳴らしたる彼は之に至て益々勇を増し、貪慾の會僧が空談を以て民衆を虚誑するを破らんが爲に、敬虔に福音を宣傳する一社を結び、四方に人を遣はして眞の神の國を來らしめんとし粗衣厲食、毫も他の救恤を蒙らず、屢々街路に起ちて熱烈なる敬神を説き神の種子を地上に播き、基督の教ふる所は悉く聖書に在りて毫も羅馬法王の典型に囚はれし者に非ざるを知らしめんが爲に、彼れは自ら一友と共に羅甸の兩約全書を翻譯し(一三

八二年再たび之を改訂して民衆に頒ち以て來るべき改革の素地を作したりき。然りと雖、ウィクリッフが熱烈の運動は教敵の憤怒をして頗る熾んならしめ。聖晚餐の化體説を排し、メンデルの説を復活するに當りて、終に母校は講師の職を褫ひ、倫敦の宗教會議は其教義著作を目するに異端邪説を以てし(一三八二)、王室、議會の庇護も、一身を托するに足らざるに至り、僅かにルッターウァース村に逃れて牧師の務を爲し、身を終ふる迄、述作を公にして、法王朝に抗し終に聊かも屈する所なかりき。

ウィクリッフの死後、其遺志を継ぎ、彼が精神に勵まされて神の福音を重んじ、教會の惡風を非難するものをロラードの徒といふ、此徒には、學識群を抜くの士多く、數年の間は盛んにウィクリッフと同じく羅馬教會は反基督の首魁にして法皇の權は使徒より繼ぎしものにあらずして、世俗の帝王より其權を得たるものなるを唱へしが、一千四百年新法皇は貶謫せし英國王を復び王位に陞せ、以て異論の徒を焚殺せしめんとせり。

ロラード  
下黨

殉教の血が英國の土を飾りしは實にこのロラードの徒が從容として死に就きしを以て其初めなりとす、ウィクリッフ死後三十年コンスタンス大會議は、新たに其著作中より異端の説四十五ヶ條を數え、命じて彼の死屍を發掘して之を焚し、燼灰を河中に投せしめ、以て殉教者の最後を辱かしめ且つ公けに彼の説を説く者を殺しぬ。さはいへど力ある種子を播きし義憤の調は、何ぞ一朝にして滅し去るべき、改革の日至るに及んで最大の淨化は力ある響に連れて鳴り出で、以て空前の大運動たるに至りぬ。

ウィクリッフが聖書翻譯の成りし年を去る二年ボヘミヤの改革者ヨハネス、フス(Johanes Hus)は初めて呱呱の聲を擧げたりき。彼、幼にして父を失ひ(一三七三年)、母と共に在りて素朴なる田園の生活を送りしが、ブラーグの大學に入るに及んで學業頗る群に超え、年齒三十に足らざる頃、既に早く、其校長として令名を同代の學界に恣にしき。由來ボヘミヤは英國の王室と姻戚の交りあり、且つブラーグの大學はオックスフォード

ヨハネス  
フス

大學と同一科學を教えしを以て、英國に於けるウイクリッフの運動は夙にブライグ大學に聞え、其説に服する者又少からざりしが、これより先、ブライグに二人の富豪ありて頗る教會の虚偽に慚焉たらず、遍ねく民衆に誠の福音を傳へんが爲に自らベツレヘム教會を設け、フッスが大學の校長となりしを機とし彼を聘して其教會の傳道を委ねぬ。こゝに於てフッスは熱烈の信仰を民衆に鼓吹し、心を潜めて聖書を討究し、教會の驕奢、僧徒の腐敗を非難し、且つウイクリッフが説をも研究したりき。されど、フッスは全く英國改革者の説に服したるにはあらずして、尙其教ゆる所は教會の教條に従がひ、聖晚餐の化體説もウイクリッフと同じからざりき。恰かもこの時オックスフォードよりブライグに歸來せし騎士ジエロームと云ふ者、深くウイクリッフの説を信じ、フッスに懲懲するに之に従はんことを以てしたれど、尙彼は其徒らに嬌激にして中庸を失へるを責め、ウイクリッフの徒が、ブライグに來りて、現代法皇會僧の奢侈と、古の基督、使徒の苦楚とを現はせる繪畫を陳列せし行爲を難じ、

民心を動搖せしむるに過ぎじとせり。大學に於けるボヘミヤの人々はフッスの説に賛したれど、獨逸、波蘭の人々は深くウイクリッフの説に左祖し終に事を以てブライグを去り、ライプツヒ大學を設くるに至り、フッスの一派は公に同大學の主權を掌握することを得たりき。此時に至りてフッスが教會廓清の意氣益々昂り、肉薄して其腐敗墮落を責むるより、ブライクの監督スピニコは狀を羅馬法皇の朝に具し、「ボヘミヤ教會に於ける説教を禁じぬ。この報を耳にしたる市民は街路に於て監督を侮辱し、フッスも又自説のウイクリッフと異なるを宣明して法皇の言を聽かず敢然として教壇に立ち法皇の羅馬召喚を斥けたり。議會及王室は法皇とフッスの間に在りて之を調停し、漸やく暫時の小康を得たりしが、一千四百十二年法王ヨハン二十三世、ネーブルス市を攻めんが爲に十字軍を召集し、此軍に従ふ者は謝罪を免すべしとの令は再びフッスをして憤らしめ、終に法王の令を公會に於て火に投せしめたり。此に至つて法皇はフッスを破門し、且つ異端者にしてブライグ市に潜伏する間は同市を破門すべ

きを令したるを以てフッスは王の懇請に由り其生地に戻りしが、其年法皇はコンスタンスに大會議を開き、フッスを喚問して之を罪せんとせりき。フッスが法皇の召に應じてコンスタンスに至るはこれ自ら死地に入るものなり、されど彼れは必らず命を殞すに至るべきを知りたれども、奇しくも身を以て基督の芳躑を踏まんとするもの、何の畏避する所かあらん。深く心に決する所あり、喜んでこの行に登りぬ。豫期の如く彼れは第一次の喚問に於て直ちに幽閉せられ、獄裡に在りて苦楚を嘗むること七ヶ月翌年六月に及んで始めて法廷に引かれ其異端を責め直ちに之を改むべきを命せられぬ。彼れ焉ぞかゝる囑嚇に驚くべき、決然として謂へらく若し我が言にして聖書に適はざる所あらば喜んで此説を捨つべし、法皇、大會議、教會は、それ我を何する者ぞ、聖書の尊嚴の爲には我豈に命を惜むものならんや、と嚴かに會議の提言を斥けたり、同年七月四日會議は彼に死刑を宣告し、僧衣と聖晚餐の杯を手に取らしめて直ちに之を奪ひて曰けるは、「汝聖き道に迷へる者の手より救の杯を奪ふ」とフ

ッスは靜かに、「全能の神は決して救の杯を奪ひ給はず」と答へき。破帽に「異端の首領」と書けるものを被らしめし時、彼は基督は我の爲に荆棘の冠を受け玉へるが故に、我又喜びて、この恥辱を忍ばんと呼はりぬ。會僧は彼の最期を呪咀して「汝の靈魂は惡魔に附すべし」と云へる時、彼は「予は靈魂を基督の聖手に附さんと答へぬ。」

時至りければ彼を刑場に曳き、鐵鎖を以て身を縛せられたれど平然として、傷める色なく、「基督は予が爲に重荷を負ひ給ひし故に予も喜びて主の爲に鐵鎖を負はんと曰ひつゝ、從容として猛火の中に投せられんとせりき。この時法皇の使臣は馬に鞭ちて來り、遽しく彼に告げて曰くこの際、汝異端を捨てんには之を赦さんと。彼、敢然として曰く予に於て、何の異端がある、予は唯基督の福音を宣傳せしのみ、捨つべきものあるとなし」と言未だ竟らざるに猛火四方より起りて彼を焼く、彼はこの大火の裡に在りて今日、汝等は予、ホヘミヤの鷲を焼くとも、この灰燼の中よりして汝等が殺すを得ざる白鳥の生るゝを知らずや」と、祈禱の聲は

黒煙の禍につれて、殉教者の死を神に知らしめんが爲に高く天に沖したりき。嘗つてフッスと友として渝らざりしジエロームはこの時、秘かにコンスタンスに入り、彼を救はんとしたりしかど、力及ばずしてボヘミアに還りしが、途にして捕へられて再びコンスタンスに送られ、獄裡に在ると半年、會議は終に死を宣して、フッスと同じ苛刑に處しぬ、時に一千四百十六年五月三十日フッスと同じく従容自若、喜んで猛火の裡に入りて死しぬ。

フッス以後ルーテルを迎ふる迄、宗教改革の先驅となり、一身を神の祭壇に捧げ、血を以て教會を清めんとせしもの必らずしも尠からず、聖オーガスチンの教を奉ずるヨハン、ブッベルあり、エルフルトの教授にしてマイエン及びオルムスの説教者なるヨハン、ルッフラートあり、共に法皇の専權、教會の暴横を憤りて侃々の辯を費したりしが、共に何等の反響を得ずして死し。其後、かの高名なるトマス、アケンピスの教を受けしツォールのヨハン、エツセルありて、ハイデルベルヒ大學の職を抛

エツセル

ちツォールの山間に退いて、心を著述に潜め、専ら教理的方面より法皇の不法を斥け、愛と正義とを稱導せしかど、法敵迫害の手は終に其著作に及び、湮滅して世に亡はるゝに至れり。ルーテルが所謂若し予にして、改革運動を始むる前、エツセルの著述を読みしならむには、法敵は必ず予を目して其説を祖述する者となさん、誠に予が見はエツセルと一致せりと稱せし者、即ち是なり。

この間にありてフッスと同じく法敵が迫害の爲に悲壯なる最期を遂げ、而も死に至る迄も、自若として自己の信仰を狂けざりし者は實にフロレンス市のフランセスコ、マッテオ、サボナローラ (Francesco Matteo Savonarola) 一四五二—一四九八これなり。彼幼にして双親の希望に従ひ醫たらんとせしも、稍長するに至んで、深く死生の問題に觸れ、自ら救済を全ふせんとするの念休むこと能はず廿三にしてドミニックの寺に入り、神學を修め専ら死生の難關を透徹し、年三十八、病を避けてフロレンス市に至り、民人に基督の教を傳へ、名聲四方に聞えぬ。

マッテオ、サボナローラ

由來フロレンス市は古より自由の權を有せしも、サボナローラが此市に入りし頃はメデチーと云へる富有の商賈、この市を占め、文藝を起し奢侈を極めつゝありしが、其翌年メデチー病篤く、宗教の慰安を得んとて僧を招きしかとも、徒らに自己に陥ふもののみなるを慨き、終にサボナローラを聘して最後の慰籍を得んとせりき。こゝに於て彼メデチーの病牀に望み問ひけるは汝罪を悔改むるか。爾り。汝敵を恕すか。爾り。さらば、汝此市の自由を復するの心なりや。メデチー家門の衰へんことを慮り黙して答へず、サボナローラ又黙して去りぬ。メデチー死して其子位に即きしかど暗昧にして事理を辨せざりければサボナローラは市人を勵ましめて獨立を徳徳して效を奏し、弊竇を矯め、教を布き、基督の眞の福音を宣傳し、惡風と驕奢とを戒めて、教會の墮落をば救はんとせりき。サボナローラが市民覺醒の事業、頗る見るべきものあるを聞きし法皇アレキサンデル六世は、大に狼狽し大監督の職を與ふるを名として其傳道を阻止せんとせしも、サボナローラの斥くる所となり終に其傳道を禁止するの令

を下しぬ。さばれ熱血迸る所豈一片の禁令を以て之を阻止するを得べき、舌端火の如き説教は法令を燒盡せずんば休まず、彼は尙其傳道を續けしが、無端、彼を嫉む者の爲に妨げられ終に獄に下され拷問に附し、火刑に處すべきを宣告せられぬ。法敵に執へられし彼は獄裡にありて靜かに詩篇五十、五十一兩篇の註釋を作り、毫も死の襲ひ來るを知らざる者の如く、一千四百九十八年、小兒の如き微笑を湛えつゝ、身をば十字架に死せし、基督の手に歸しぬ。

ジョン、ウイクリフ死せしより百年、ヨハンフツスが火刑に就きし後七十年、不遇なる改革者の後を受けて、千古の大業を成就せしマルチン、ルーテルが世に出でしは一千四百八十三年十一月十日、獨逸ザクセン州アイスレーベンと云へる僻地にして、父はハンス、母はマルガレットと呼べる鐵夫なりき。ルーテルが云へる如く、彼が祖先は朴訥なる獨逸の農民にして貧窶と忍耐とに苦しめられつゝ、而も獨逸森林の中に育くまれし剛健康潔の民人なりしなり。



貧困の爲にアイズレーベンよりマンズフェルトに移りしマルチンが一家は父母が嚴格に失する家庭と、鞭苔、苦痛、恐怖を教ゆる地獄の如き學校とに其幼年時代を過せし、半五歳にして初めてマグデブルヒに游學しぬ。マルチンは此地にありて乏しき學費を補はんが爲に同窓打つれて市中の家の門に起ち幼き歌を謠いては些少の恵を受けたりしが、焉ぞ知らん、喪家の狗の如き當年群童の唱歌の中、後年天下を震撼すべき霹靂をば癡したるを。

翌年マグデブルヒを去りてアイゼナハに移り、前の如く歌を賣りて學資を得つゝありしが、無端も土地の富者の救ふところとなりて其補助を蒙むり、専ら羅馬教會の教條を教えられ、浸禮を受け、こゝに在ること四年、嘗て、改革者ヨハン、ルッフライトの教授たりしエルフルト大學に入りぬ。ルータール一生の煩悶、慰安及び信仰は恐らくこの大學にありし時の事ならずんばあらず。

ルータールの煩悶

同代、古典學復興の餘勢は疎豪なるマルチンをして羅匈希臘の古文學

に親しましめしが、就中彼に偉大なる影響を與へしは入學後二年初めて大學附屬の圖書館に於て發見せし羅匈文の聖書にして、渴する者の清泉を得たるが如く欣喜の情に堪えず新たなる眞智識を此に求め、これより漸やく枯淡煩瑣なるスコラの學風に嫌たらず、且つ死生問題の難關に達着して冥想沈思に耽ると共に、靈魂の歸着に心を勞するに至りき。かゝりければ學位を獲たる後、醫を以て身を立てしめんとする双親の希望も、彼が精神的革命には敵すべくもあざりき。宗教上の儀式を嚴守し、祈禱禮拜を怠たらざる日夕の行爲も未だ其良心を満足せしむるに足らず。如何にせば罪過を脱れて神と一致し生死の大問題を解決するを得べきかを苦慮するの情、日夜其念頭を去らず我が手は如何に之を洗ふとも、終に清淨ならず、罪惡の觀念は常に心靈を掩ひ、良心は常に疑惑の爲に缺陷を感じ、加ふるに、身に重き疾病あり、死の手は刻々として多感なるルータールが胸を壓しぬ。されどかゝる煩悶は未だ何等の解決をも將來せざりき。

ルーテルが煩悶の時代にありて起りし事象は、一として死生の問題ならざるはなかりき。一日歸省の途、腰に佩ける短刀を以て過て負傷せしが、同行の友の醫を伴ひ歸るうち、多量の出血を自ら抑へつゝある間にも、死の問題は轟然として襲ひ來り、恐怖の情抑ふるに由なく、天を仰いで聖母の加護を乞ひしことあり。或は一友の暴死せしに怖れて、殆ど自失せんとせしことあり、造次顛肺、彼はこの問題の爲に恐怖し、戦慄しつゝありしなり。

恰かも一千五百〇五年七月二日聖母祭日の節、故郷マンヌン・キルドに歸省し、エルフトの近傍、ストッテルハイム村に赴ける折、劇しき雷雨に逢ひ、暫時樹木の下に避けんとせし時しも、電光一閃耳を貫いて雷霆は落ちかゝりぬ。恐怖、戦慄のあまり、マルチンは助け給へ聖アンナ、我は僧とならん」と叫びたりき。

ルーテル一世の運命はこの一語を以て一轉機とし双親の留むるを斥け終に七月十七日の夜エルギリウスが詩と、プローマスの戯曲を抱き孤影

孱然として獨りアウガステン派の寺に入りぬ、年實に二十一。

ルーテル當時の寺院生活は素朴枯淡にして何等の生彩なき、祈禱、斷食、誦經、乞食等の修道に過ぎざりしを以て、眞個の求道者なりしルーテルの眞摯の煩悶は又急に之を解決すると能はざりしなり。後年ルーテル曰けるは

「予は嘗て、良心の淨化、平和を求めんが爲に身を苦しめしと、殆んど身を殺すばかりなりき。されど四方盡く暗黒にして終に平和の光を認むるを得ざりき。

予、寺に在りて試練にあふ時は、予亡びぬと叫び、諸々の法を以て良心の聲を滅せんとせりき。或日、予、高僧の前に立ちて、懺悔せしかど何等の慰安もなく、憂悶して身を地に抛ちて自らの短慮、我慢なるを罵りしことありき。

或は獨り一室に閉籠りて數日煩悶して出で來らざることありしが潛かに窺へば憂悶氣絶して床上に仆れおろしことあり。或は教會の大禮中、

抑え難き悲愁に沈み、其場に跪きて騒擾せしことあり、あらゆる試練と煩悶とに身を苦しめ、尙生死の難關を透徹すること能はざりき。然れども神はこの敬虔なる煩悶の青年僧を捨て玉はざりけん。ザクセ  
ン州オーガスタンの監督、ヨハン、スタウピッツを遣はして暗黒の中に一道の光明を認めしめぬ。スタウピッツは同代有数の神學の大家にして、羅馬教會の教條にも盲從せず、唯實踐を身に行はんことを勧めし人にして、教會巡檢の途次、エルフルトの教會に來り、ルーテルを見て、有爲の青年が煩悶に沈めるを憐れみ、席を同じふして之と談りぬ。  
スタウピッツがルーテルに説ける事は、唯神を愛し正義を慕ふこそ救の道にして、苦行に由りて復活を望むは非なり。神を愛する神を愛し奉るは是唯一の復活の道なるなり。基督は罪惡を犯せる者を救ひ玉ふ教主なり。基督を離れて救の道なく、神は基督に由りて顯はるゝが故に、我曹が罪は基督の故に淨まれるなり。何の罪か恐るゝに足らんや。而して神は卿を忠實の下僕たらしめんが爲に諸々の試練を下し玉ふなりと、親

切なる訓誡と共に一卷の聖書を與へたりければ積年の煩悶を抱きしルーテルの胸には曙の鐘聲、長夜の暗黒を驅逐して、光明嶺に滑り入るが如く、欣喜の情油然而として枯れたる心田に沃ぎ、勇氣勃然として禁ずる能はざるものありき。これより孜々として聖書を讀み、益々煩悶の情を去り、パウロが所謂義人は信仰に由て生くるを得、初めて慰安の境に至るを得たりしなり。

ルーテルがウイテンベルヒ大學の教授として一千五百〇九年の初冬、其市に移りしは、ルーテルを光明界に導きしスタウピッツが推薦に由りしものにして、宗教改革の大業、又實に同大學の保護者ザクセン選侯の外護に由らずんば終に先驅者の徹を履みたりしやも知るべからざるなり。實にルーテルが一生は煩悶と健闘との連続にして、常に惡魔の試練、法敵の迫害とに遇ひ、一生寧日なくして死の床に下り行きしなり。かゝりければ一生の事蹟は一として其精神の修養に資せざるはなし。一千五百十一年事を以て羅馬に入りし時は「聖き羅馬よ、吾汝を祝す」と叫びて泣

を垂れしも、スカラ、サンタの階段を跪伏して昇り罪の贖ひを得んとせしかど、中途にして良心の苛責に堪えず、「義人は信仰に生く」といへる天來の聲を聞きて之を下れる如き。而して羅馬法皇朝の僧徒の腐敗墮落せし醜行を見、地獄の上に立てられたる市は羅馬なりと叫びて早く已に改革の萌芽を得て還りしが如き。一として心中苦悶の影ならざるはなかりき。

一度ウイテンベルヒを去りしルーターは一千五百年再び此市に歸りて神學博士として大學の講座を有し傍ら副監督に任せられて常に各所の教會に説教し、修道、苦行を斥け、唯信仰によりて救はるゝものなるを説きしかど尙羅馬教會の教條を排せず、ヨハン、フッスの如きを目して異端なりと信せしが如し。

## 宗教改革

法皇ルイ第十世、聖彼得寺の土木に資せんが爲に、トマス、アクイナスの神學に基きて、北方蠻族の間に行はるゝ赦罪券を發し、永遠の刑罰を免れ現世の滅罪を以て死後淨罪界の苦艱を免れんと欲する者は、金を

以て聖堂建設の資に供し以て未來淨罪界の脱出と教會の鴻恩とを報せざるべからずとなし、使を四方に遣し、甘言を以て民衆を虚誑するに至つて、罎中の虎は一吼して九十五ヶ條の揭示を草し、一千五百十七年十月三十日、諸聖の祭日、會堂の紀念日を以て之をウイテンベルヒ城内會堂の戸に掲げて、赦罪券の悪影響を痛論し、會議を開いて、人々の意見を聞かんことを求めぬ。ウイテンベルヒ大學の教授は悉くルーターの意を賛したれども、大衆はルーターの求に應せず會議を開くこと能はざりき。ルーター一度旗を翻へしてより賛否の説、所在に論争の焰を擧げ、續いてルーター三回の上書となり、漸次に激越痛憤の調を加へ、第三回の上書の如きは諷刺冷罵、法皇をして終に完膚なからしめき。其間屢々法皇の使者と會見したりけれど自ら正理と信ずる事を取消さんよりは寧ろ靜かに死に就かんとするルーターに對しては、威嚇も慰撫も何の効かあらん、終にライプツヒの會議となり。「公明正大なる神の審判を待たんが爲に、ルーターは敢然として著書を公にし法皇の非基督なるを攻撃し、

一千五百二十年十二月十日朝、法王の破門狀と羅馬教の書とをウイテシヘルヒ市のエステル門外に焚きて暗に羅馬教の葬式に擬したりき。何人の憤怒よりも、神の憤怒を恐るゝルイテルは今や公然として獨逸國民の爲に法皇に抗しザールムスに開かるゝ會議に列せんが爲に、ザクセン王の勅使と共に其途に上り、路フランクフルトに至り、同志の彼を警しめて、ヨハン、フッスの徹を履まざらしめんとするや、彼徐ろに口を開いてフッスは焚刑に處せられしも、眞理は彼と共に焚かれざりしに非ずやと答え、又假令惡魔の數、ザールムス全都の瓦の如く多しと雖ども、予は彼地に至らんと云へるは、同じく人口に増灸せる話柄ありとす。ルイテルの一行彼地に達し、數千の群衆を縫ひて旅舎に至り、車を下る時彼曰へらく「神我と偕に在さん」と。ザールムス會議に於けるルイテルの剛勇、及びワルトブルヒ城中の幽窓に靜かに聖經の翻譯を遂げ、再び出でて、改革の大業を成せし一生の勇奮は、史家が争ふて傳ふる所にして、今は之を贊するの要なきに似たり。

り。傳ふる所に由れば、ワルトブルヒ城中の一室には、ルイテルが惡魔に抛ちし墨痕、今に於て淋漓として當年の試練を語ると稱す。

晩年に於けるルイテルの生涯は他の改革者が非命の最後を遂げしに比して頗る多幸のものと言はざるを得ず、プロテスタントは其生時に於て盛大の域に達し、一二、心を傷ましむる事ありしと雖ども和樂なる家庭に靜平の生活を爲すを得たりしなり。然れども正大なる彼が心は未だ之を以て満足せるものに非ず、民衆が敬神の念漸やく癡れ、廉潔の情又頽るゝを見るや、老は我を襲はんとす、我は永き命を受けたり。希くは幸福のうち此生を畢らん、地上最良の時代は過ぎて今や禍の時至らんとすと云ひ、死の漸やく來らんとするを憶ひては、其友ヨナースにむかひて「世に罪と死のなからましかば、此世は實に樂園の満足をば我等に與ふべきに」と歎きしが、千五百四十六年二月十八日、旅行して生地アイスレーベンに至りて病革まり、「我心靈をば汝の御手に納れ玉へ、この肉體を離るゝとも、我永久に神と偕とあらむ」と祈り、約翰傳第三章第十六節の語

ルイテルの死

「神は其獨子を賜ふほどに世の人を愛し玉へり、こはすべて彼を信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり」とあるを反覆しつゝ、尙羅旬語を以て「父よ汝の手に我が心靈を托す、其は汝は我を贖ひし主の眞神なればなり」と謂ひつゝ、六十三歳の老改革者は、神の前に立ちて法皇と共に最後の審判を受けんが爲に、苦戦煩悶の生涯を終りぬ。

かくて近世文明の曉鐘は永してに其最後の響を收めたりき。

## (二) 學界革新家の死生觀

藝術は永く人生は短かし、短かき人生を永久眞理の祭壇に捧げて一身の安危を顧みず、教會の壓迫の下に殫れし者何ぞ限らん、先きに述べたる宗教改革の徒は教會の内部にありて覺醒の鐘聲を挙げし者にして、今此に傳ふる學者は唯一眞理の發現の爲に外部より教會の非眞を鳴らしたる者なり。彼等は時に利あらずして不遇落魄の生涯を送りたれども、眞理の光明は何者をも射透さずしては止まじ、見よ百代の後に至りて迫害

を蒙らしめし者の名は僅かに當代不遇者の大名に附隨してのみ傳へらるるには非ずや。彼等が眞理を信するの力は、やがて死生の巷に獨立して特行するの氣概を生せしめたりしなり。

教會は頑迷にも古來の傳説を維持して之れを批判するを許さず、少しく違ふものあれば直に之れが排斥を企つ、かゝる教會の傳説を打破し、初めて我遊星の眞運動を發見したるは、ニコラッス、コペルニカスにして、之に次で、ジョオルダノ、ブルノ。ガリレオ、ガリレイあり、理學の權威を以て法皇の權に抗し、以て現代文明の素地をば成立したりき。

ニコラッス、コペルニカス(Nikolaus Copernicus)は一千四百七十三年二月十九日プロシヤのトルンに生れ、幼にして父を喪ひ母と共に叔父ブツェル、ローデの下に薫育せられしが、一千四百九十一年より四年の間グラスゴ―大學に在りて數學を修め、二十三歳にしてポログナに遊び、ドミニク僧、マリア、ノヴァルラに就きて天文を學びぬ。これよりして益々天文、醫學を修め、一千四百九十九年博士の學位を得、翌年羅馬に入り

コペルニカス

レシオモンテと交り、帷を垂れて教學を講じ時ありては教會の聖職に従ひ貧民の民に醫藥を頒ち或は教會の僧徒の特權を守らんが爲にチエートン騎士の暴横を抑へ、悪貨鑄造を防がんが爲にグロドノ侯に使して之を辯じ、傍ら心を潜めて天象の研究を進め、古來天文の學說より一の系統と歸納せんと欲し埃及の地球中心說、アポロニアス、ニセタス、ヘラクライトース等の學說が悉く地球を中心としたるに嫌たらず、我太陽系統の組織運動に關して別に一個の學說を立てんが爲に一千五百〇七年より一千五百三十年に涉りて天體運動の一大著を完成したりき。然れども當代の事情、到底之を公にすることを許さざるを知り、且つ危難の身に及ばんを慮りて深く匣底に秘して人に示さざりしが、一千五百四十五年終に志を決して稿本を弟子のレチカスに附しニウレンベルヒ市に於て之を公刊せしめぬ。而して此著は羅馬法皇パウル三世に獻書し、且つ自己が抱懐せる志を序して云ひけらく「予は三十年來、此說を信じたりしが世の物議を恐れ、久しく公にせざりしも、是實に卑怯なる行爲なりし、神は

吾人に理性を與へ玉へり、此理性に由りて眞理を發見し以て世に公にす、是神に對する義務なり、思ふに世の識者は此著を呪咀する事なかるべし、聖なる神は禍の口より我を救ひ玉ふなるべし。」と、堂々として眞理の前に敵なきを信じ禍の身に及ばんことを思はざりき。

この著の世に出でんとする時コヘルニカスは病んで已に危く記憶全く盡し理解の力盡き、死する前數時、刊行の書を手に残れ稍之を解せしが如かりしが、安じて死の床に臥して終に再び起たず、従つて迫害の手に遇はざりしかど、後代ケプレルの法則として世に現はるゝ未來を知らずして死しぬ。時に一千五百四十五年五月二十四日、年七十なりき。

コヘルニカスの生涯を以て靜平なる海に譬ればシオルダノ、ブルノ(Jordano Bruno)の一生は、贅牙たる山嶽の攀ぢ難きにも比すべきか。

文藝復興時代の精神を飽まで呼吸し、典型の打破と自説の鼓吹とに何者をも恐れざりしブルノは一千五百四十八年ノラ近傍の地に生れたりしが其幼時は文献の徴すべきなく多く世に知られず。されど十五歳にして

シオルダノブルノ

ネーブル市のドミニック派の寺に入り、ノアの洪水に關する論文を草せしを以て見れば決して尋常一様の才ならざりしならん。果然教會の壓制はこの才人を容れず、秘かに寺を逃れ出で、放浪の生活に入り各市を漂ひ歩きしも、教會の追求は終に羅馬に入るを許さずゼノアに止まるを禁じぬ、こゝに於て彼れは一千五百七十九年リオン、モントリルを経て巴黎に逃れ來りぬ。彼が一代を指導する學説はこの漂泊の間に醗酵し來れるものにして、教會の傳説、教條的哲學の濼を去り、神聖なる宇宙を見るものが爲に眼を刮かんとするの決心を固めたりしなり。此時に當りてコペルニカスの發見は新しき光明を此才人に與へ、ベーコン、テレシウスと同じくアリストテレスの學説を排し、自ら眞の實在に當面し獨創の見地を以て眞理を發見せんとせりき。彼の巴黎に入るや、大學は之を聘して天文を講せしめ、此間自ら書を著して其哲學的見地を公にしたり。思へらく、眞理とは世界萬物の中に横はる「調和」と「實在」となり。謹慎は眞理の力を整へ、自由と必然とを認識するものにして、知識は超感覺の狀態

在調和と實

を云ひ、人間にありては事物の眞を究むる理性なり、この知識よりして人間の善を目的とする律法を出す。而して事物普遍の判斷は之を人間の行爲より判斷すべき者にして必らずしも教會の教條を信ずると信せざるとに由らざるなり。

抑も萬物の「調和」は宇宙を總轄し、萬物は之に由て生ず、一にして全、始なり、中なり、終なり、宇宙の實在なり原理なり、これ即ち神なり。この力よりして世界成り、自然の律法出で、其必然は即ち自由にして、世界の萬物は悉くこれこの力の顯現に外ならず。故に宇宙は生ける宇宙にして無限の生物的體系に外ならず。この宇宙の目的とする所は、漸次に調和して以て完全に其形を實現するにあるなり。此調和個々の物象に現はるれば、其個々の物象は自から一個自存の小宇宙、元素と名くるを得るなり、此元素は其數無限に極りなし。而して人間の靈魂は又元素の事物にして、神聖なるものと、外界容觀との中間に位し、神聖なる生命の一部たるなり、従つて靈魂は不死永久の生命を有し、客觀中に潜める



神聖なる調和を看取するの-high能力あるなり。  
 プルノが哲學說に由れば、猶太、基督の福音は、古代希臘の神話と何の異なる所もなく奇跡、攝理祈禱は笑ふべき瑣事にして、自由は必然と同じく、善惡は人間の行爲に由て定まるものとなすなり。かゝる哲學が現世の快樂を無視する成形的宗教に對して大なる打撃なりしは元より言を俟たず。これよりしてプルノは再び難を避けて四方を漂ふのやむなきに至りぬ。

一千五百八十六年又パリを追はれてマルブルヒ、ウイイテンベルヒ等に客となり、一千五百八十八年にはブレীগに至り、一千五百九十一年にはフランクフルトに移り、此間に在りて尙法皇の權を恐れず、友人の諫止を斥け常に書を著はして哲學說を公にせしがツウリツヒより事を構へてヴェニスに招かれ終に宗教裁判の偵吏の乗する所となり囚へられて一千五百九十三年羅馬に送られ、獄に繋がるゝと前後七年、一千六百〇年二月九日、空しく迫害の火刑に死しぬ。學者にして如是悲惨の最期を遂

げし者は甚だ稀なり。

ガリレオ、カリレイ(Galileo Galilei)一五六四—一六四二はピサの産にして、家は元フロレンスの名門なりき、父は文藝音樂の道に達せし人なりしが、ガリレオが幼時は甚だ幸福ならず、貧窶の間に人となりしが如し、十九にしてピサの大學に入りしが多く古代の學問に心を向けず専ら自己の獨創を擅にせりき、眞理討究の精神は早く此時代より萌しをめしなり。かのピサのカンポ、サント寺院にある吊燈籠の揺曳するを見て、運動原則の暗示を得、振子の發明を爲し或は一千五百八十六年フロレンスに飯へり、水秤を發明して伊太利全國に名を擧げしが如き、後年運動の法則を以て近代科學の先驅をなせし前徴を示したりき。其後ピサ大學の數學教授に擧げられしより漸やく其才華現はれ、アリストテレースが物質落下の法則を破りピサの高塔に於ける實驗は殆んど市民を驚殺せしめしが、普通の市民は之を通じたりしに關らず、教權的學說を信ずる學者輩の嫉む所となり、ピサ大學を追はれてバツア市に至りぬ、有名なる望遠鏡は

實にここに於て發明せられしなり。

近代に於ける天文學其他科學の發達は其端をガリレオが望遠鏡顯微鏡發明におくべき者にして、たとへ、コペルニカス其他の天才を以てするも、事實の上に之を證明すべき使命は實にガリレオの肩上に懸り月面、金星、木星、星雲は初めて眞の狀態をば吾人に現はしたりしなり。されど一千六百十一年ガリレオ羅馬に入り貴族、僧官が歡迎に酬ひんが爲にクイリナル邸上に望遠鏡を据えて天體の運行を觀察せしむるや、時の無學なる反對者は、是れコペルニカスが理論に由るものありとし、教會の免許を経ずして之を擴むるの不合理なるを責め、反基督の行爲なりと罵りぬ。ガリレオが其當時、タスカニー侯に贈りし書翰に由れば、

「我信する所によれば、聖經の目的は人類救済に必要な記録を與へしものにして、人智を超越せしものなり。我は彼等と同一の神を信するの必要なし、神は我等に感覺、言語、理性を與へたり、故に吾人は之を不用に付すべきに非ず、……自然問題の討究には聖經の權威に由ら

ず、感覺的經驗、必然的證明を以てせざるべからず。其故は聖經と自然とは神聖なる語を以て近接すべければなり。……眞偽は人間の力にては定むるを得ず、唯自然の有りの儘に由るのみ」と。

一千五百十六年法王バウル五世はガリレオを召してコペルニカスの如き地動説を教ゆるを禁じ、「太陽の不動、中心説は聖經の旨に反し哲學上の誤謬なるのみならず、少くとも信仰上の誤なり」と云ひて固く之を禁じ、然れども、ガリレオが眞理を信するの力は、フロレンス歸來後益々固く、十六年の苦心を以て地動天體に關する各種の論證を集め、羅馬に至りて免許を得、フロレンス市の教主の出版許可を得んとせりき。されどフロレンス市の教主は先の反對説に懲りて之を許さず、漸やく檢察官の許可に由りて之を發布したりき。ガリレオの著一度世に出づるや、彼を敵視する輩は、機至れりとして法皇ウルバノ八世に訴え、宗教裁判を行はんことを求め、終に彼をして羅馬に至らしめき。獄に投せらるゝ事四閱月、禁止を願みずして教會の虚偽なりと決定せし太陽中心説及び地動説を公

にし、聖經の説に反したるを以て、永く教會の獄に下し、三年間は毎週一回七悔の聖歌を唱へ、以て罪の贖を爲すべしとの宣告を受けたり。拷問の苦に堪えずして此判決に服して之に自署せしガリレオは、靜かに老の膝を擧げて、傍にありし友に囁いて曰く地球は今現に動きつゝありと。幾千の自署も懺悔も焉んぞ地球の運行を止しむることを得べきぞ。

アルセトリに歸るを許されしガリレオはこゝにある事二年、再び老軀を以て運動論を著せしが之が出版に當るものなく、和蘭に於て公刊せしは數年の後なりき。ガリレオ晩年に於ける身心の苦痛はこの時よりして漸やく繁きを加へ、アルセトリに移りし年最愛の娘を失ひ、後二年にして、全く失明するの非運に遭ひぬ。英國の文豪ミルトンが失明せしガリレオを其牢獄に訪ひしはこの幽閉の間なりしなり。一千六百四十三年六月二十二日、投獄の命に接せしより、一千六百四十二年一月八日七十八歳にして獄中に死する迄、幽閉に内にあるもの殆んど二十年、身に鐵鎖あり、眼光明を見ず禍の日、禍の口に生れ落ち、危難、幽寂の間に

在りけれど心眼は高く九天に入りて、莊嚴なる天體の運行をば觀じたりけらし。

### (三) 英雄の死生觀

既に教界并に學界に於ける偉人が死生觀を一瞥したり、勢ひ干戈の巷に馳驅せる英雄が死生觀を見ざるべからず。予は此に布衣にして帝王の尊貴を刑し、身自ら護國官の樞要に上りたるオリバー、クロンツェル(Oliver Cromwell) 米合衆國獨立の大事業を遂げたるジョージ、ワシントン(George Washington)空手歐洲を席卷して皇帝の位に上り、事、一たび蹉跎して身は孤島の島守となり果してナポレオン(Napoleon)トラファルガーの海戦にナポレオン大帝の艦楫を轟沈し、身も亦洋上の泡と消えたるネルソン(Nelson)を擧げん、彼等は傳記が人口に膾炙す、予は僅に其終焉の狀を叙して以て死生に對する感想を示さんとす。

クロンツェルは英國清教徒の典型と目せらる、教度なる宗教家なり、

されば彼が死生に對するの感想も亦全く此敬神の心より溢れしものにならず。

一千六百五十八年九月二日、クロンウエルは馬に乗じて戶外に出て、誤つて落ち、馬を御するは政府を御するよりも難しとの諧謔を弄せしが翌朝に至りて熱甚だ昂く、牀上に悶々し夫人をして「ポロのピロビ人に贈れる書」を讀ましむ。夫人は命に従ひてこの書を読みて第四章に至り「我は我に力を與ふるキリストによりて諸のことを成し得るなり」とあるを聞きて、曰く「其一節によりて我は生命を救はれしことあり……あゝ、聖なるポロよ、汝は主の惡に酬ひしが故にかくて言ふを得たり——余は……と稍沈黙を續けしが、「ポロのキリストはやがて又我キリストにてまします。」と語りぬ。この時に當り、クロンウエルが家族は病革れる偉人の牀邊に集り、一世の名残を惜しみ、聲を放つて哭する者さへありしに彼れは靜かに家族を戒しめて、「この無益なる浮世を愛すること勿れ、我汝輩に告ぐ、この世を愛惜す

るは善き事には非ざるぞ」

と告げて、口には常に祈禱の聲を絶たず、「主は知り玉はん、我にして若し生きんと欲する心わらば、そは御旨を現はさんが爲なり」と深く覺悟する所ありしが如かりき。されど死は喜ぶべきとにわらず、彼れクロンウエルも尙生ける上帝の手中に落つるは恐るべきかなと獨語したりと傳ふ。クロンウエルの病篤きを聞きて來れる牧師が其牀に近づける時、彼はこれに問ひけらく、一度上帝の恵を受けし者も又永久に盡くる時あるか「牧師は否、恵を受けし者は死する期なし」と答ふるを聞きて「さらば心安き哉、我は一度、神の選民となれるを確く信ず、故に死することなけん」と先きの恐怖はこゝに慰められて深く安んずるが如き氣色を顯はしぬ。

漸やく臨終の期近づくに迫んで、この清教徒なる護國官は最後の祈禱を捧げ我は憐れなる者なれど、汝の恵によりて眞理を受け、價無き者なれど、汝我を選んで善を爲すの器とし、我が同胞に爲さしめ玉へり、我が同胞は我力をば信するに過ぎ、或者は又我死を喜ぶなるべし。されど

主よ、希くば主の助をば萬民に與へ玉へ、持久の念と判断の心とを與へ玉へ。萬民の力によりて、エス、キリストの名を地上に榮えしめ玉へ。主の選び玉ひし器を信する者をして獨り主に憑らしめ玉へ、地上の蟲を足下に踏み躪らんとして心逸る者を許し玉へ。若し御旨に適はば、我に一生の安穩を與へ玉へ。」

この夜は風雨頗る激しく、屋を倒し、樹を摧きしが、翌三日は、グムバル、ウ・アルセスター戦捷の記念日にして四民歡樂の節なれば軍隊は喇叭囀々の聲を擧げ、歡呼して共和政體の萬歳を祝する程、一個敬虔の清教徒は戦痕猩々英國の土を去りて永久攝理の手中に落ちぬ。

クロンウエルの最期は靜平なりき、されど尙ほ多少の煩悶なき能はざりき、彼のワシントンに至ては大河の海に朝するが如く實に悠々たるものなりし、一千七百九十三年七月彼れ第二回の大統領の任滿ち效成り名遂げてマウント、ベルノンの山莊に歸臥し、同九十八年一度佛國との隙を生じて副總督の職につきしも葛藤程なく解けて、再たび一個の自由な

ワシントン

る平民として故山に在りぬ。

翌一千七百九十九年十二月十三日の朝は、雪の爲に散策に出づと能はざりしも夕ぐれは天晴れたれば獨り河畔の植樹を検して飯りしが其夜半二時、嚴寒の爲に身を壞ひけん、苦痛の聲を以て夫人を醒ましして看護せしめたりき、翌朝秘書レーヤの至れる頃は苦悶益々甚しく、咽喉より血を出し、語るさへ苦しき様に見え。アレキサンドより迎へし醫クライツクも其苦痛を減すること能はざりき。

終日の苦痛は午後に至りて一層を加へしが、午後四時、夫人をして居室より遺書二通を持來らしめ、一通を夫人に與え、一通は之を燃き捨てたり。呼吸益々困難を感じ來りし時、ワシントンは入り來れる醫クライツクに告げて曰く、「醫師よ、苦悶の中に余は死すべし、然れど、予は死を恐るゝ者に非ず、初めて此病を獲し時より余は死を覺悟せり……されど呼吸は甚だ困難なり。」默然として脈を診しつゝ、ありしクライツクは悲愁の情に堪えずして、爐邊に去りて力なき體を椅子に下しぬ。

夕、五時、靜かに牀邊に在る人々を見て余は今死の近づけるを知る、  
 卿等の看護は誠に謝するの辭なし、されど決して愛ふること勿れ、余を  
 して靜かに死せしめよ、余が最期は迫れりと是れ終焉の辭なりき。

死の影漸やう近づく儘に、呼吸は稍安けらく、靜かに秘書レーヤーの  
 手を握りて其脈を検するもの、如かりしが、容貌は突爾として變じ來れ  
 り、レーヤーの聲に驚ろきて醫の入來れる時、建國の將軍は、レーヤー  
 の脈を検せし手を落せしが、醫師が、老將軍の手を握りし時は已に渾身  
 の脈搏は其末稍より衰へし瞬間なりき。實に眠れる如き平靜なる臨終を  
 以て、この自由の人は死せしなり。

① ワシントンの晩年の靜平なるを見て翻てナポレオンの晩年に臨めば一  
 は霞たなびく春の山の如く、他は千仞骨立せる冬の山にも似たり、一千  
 八百十五年六月、ワテラローの一戦に捲土重來の勢を失ひし那翁は青雲  
 を失脚せし龍の如く六月二十一日、旗を卷て巴黎に飯り翌日帝位を辭し、  
 瀟かに米國に逃れて、再び機を捉へんと欲せしが終に其志を遂げず、

降を英艦ベンロファンに乞ひ、英國に護送せられ艦中に在りて列國會議  
 の決議を俟つこと二ヶ月、八月四日に至り、ノーザンパラント號に附  
 され、大西洋上の一孤島セント、ヘレナに流竄の身を寄せしは同年十月  
 十五日、海霧昏く孤島を罩めし夕なりき。

セント、ヘレナの孤島は瘴癘の氣深く、一年の中九ヶ月は全島風雨に  
 濕ひ、三ヶ月は二至點内の炎熱身を燬くばかりなるさへあるに、那翁が  
 プリアルより徙り住みしロングウッドの地は海拔二千尺に超え、日夜風  
 伯の襲ふこと夥しく、印度商會が設けし那翁の居は、窓を隔て、第五十  
 五大隊の營に臨み、眼を樂しましむる者としては、居の傍に手ら植えし柳  
 絮の潮風に亂るゝと、靜かに、古書に對して古人を友とするのみに過ぎ  
 ず、出づる時は戌兵前後を替め、苟しくも土人、從者、戌兵と親しむを  
 禁せられ、書信の往復、騎馬の散策は思ふに任せず、况んや近海を航す  
 る船舶は風雨激しき時を除きて此に泊するを禁せられしをや。かゝりけ  
 れば、一度は隻手を以て全歐洲を震撼せしめし英雄も痛憤遺恨の情骨に

徹したりけん、この地質に人を殺す、英國テムス河畔の民は大氣を以て、余を殺さんと欲するならん、彼等に非ずんばかゝる無情の行爲を爲すの人民なしと憤りたりき。英國より派遣せられしハドソン、ロー、彼れを待つこと又頗る薄く、幾度か経費の削減を迫り、葡萄酒の量を節せしめ、終には食物の制限をも附するに至りたれば、彼れは從者を慰めんが爲に其食器を賣りて之に充つる止むなきに至りぬ。歐洲帝國の榮華を一身に聚めし、大皇帝は、かゝる屈辱を忍びて其晩年を送りしなり。

英國政府は余を酷遇して以て自殺せしめんと欲す、されど、厚遇は余を自殺せしむべけれど、薄遇は自殺を誘ふの所以に非ず」とは彼が侍醫オメーラに語りし所にして、漸やく人注の恐み難きと人心の向背と思ひ、嘗つては戰陣の間、靜かに人生の大事を默想するの隙なかりしものが今は稍かゝる問題を冥想するに至れるなり。一日病牀に臥して侍醫が散歩の必要なるを説き、若し散歩を試みずんば病魔の襲ふ所とならんと云へるを聞き、「其こそ絶好なり、唯一日も早く病魔の襲はんことを望

ましけれ」と嘆じ、宗教の尊嚴、宗祖の偉大なる人格をも尊ぶに至れり。

然れどもナポレオンの宗教的感想に至りては傳へらるること甚だ多からず、唯侍醫オメーラの語る所に由れば那翁は世界に偉大なるものは耶穌あるのみ、シーザルは死し、千萬の大軍を叱咤せし者の名は空しけれど、基督の名は數千年の後に至りて十字軍の大業を爲さしめたり、基督は神なり、神は死せず、我終に神に及ばすと謂ひ、自ら信する宗教に關しては我は諸有宗教を信す、曾て世に在る時、ナンサスの僧正と羅馬法王の爭論とを聽きしこと屢々なれども、深く之を聞くの閑なかりき。思ふに最も古き宗教こそ善けれと語りしに過ぎざりき、されど人生の晩年、失意落魄の境にありては靜かに生命の歸趨に心を勞したりけらし、臨終に至りては全く篤信の誠をば現はしぬ。

終ハドソン、ローが干渉は日を経るに及んで益々激しく、侍醫オメーラ、將軍ラカーセ及びグルーコーを斥け、苦肉の策を劃しては、この英雄を苦しめたりしが故に、那翁は僅かに故舊より贈られし書を涉獵して自ら

懣め、ホーメルに當年の激戦を忍び、シーザーに英雄の魂を弔ひ、コル  
 ネーユ、ラシーヌを樂しみしが、就中、アンドロマツクの書中アスチア  
 ナと父に相擁するの章を讀み、遙かに太子の上を思ひ、「我も又我子と相  
 見て、泣て之を抱かん、あゝされど、今はそれも能はざるなり」と愛憐  
 追慕の情に堪えずして涙を垂れきといふ。

一千八百二十一年、四月に入りて病漸やく重く其月、替星天の一角に  
 顯はれしよりシーザルが死徴と同じきを見て自ら死期の近づきしを覺り、  
 其月十五日再たび起つこと能はざるを知り、遺言を書きぬ。「我公教の中  
 に生れ、生を享くること五十餘年、今公教の中に死す、我愛する所は佛  
 蘭西にあり希くば死後、遺骨をセース河畔に埋めよ」と。越えて二日病稍  
 怠たりしを見て、侍者は彼れを懣籍するに病の癒ゆべきを以てせしに、  
 彼れは莞爾として曰へらく我今病稍怠たれるを知れり、しかも是れ死す  
 べき疾なり、癒ゆべからず、予にして死せば、卿等は歐洲に還ることを  
 得、故舊の面を見るなるべし、予も又シヤンゼリゼリに至り、我幕下の諸

將クレーベ、デセイ、ベシエー、デュロー、ネー、ムラー、マツセナ、  
 ベルチエー等に會せん、さらば彼等は再たび余の知遇を蒙らんが爲に、  
 忠節を抽すべきぞ。或は古將、シビオ、ハンニバル、シーザル、フレデ  
 リック等の英雄と邂逅して古今の戦を語らんか、下界に在る者は、かゝ  
 る英傑の會合を見て、周章喫驚するなるべし」と意氣頗る軒昂なりき。こ  
 の時病室に入り來れる英國の外科醫アーノルドを見て英國の措置頗る信  
 を缺けるを攻め、我死して英國に我を殺すの汚名を残さんと語り、痛憤  
 の調、人の腑肺を衝くが如きものありき。

二十日に至りて那翁は將軍モントローンを招きて聖祭を行はしめしが、  
 是より先、三月十七日、宰相ヘスクの遣はせし僧正ピギヤリーを枕邊に  
 招きて懺悔し、聖晚餐を受けんとせしも胃潰瘍の爲に嘔吐して受くると  
 を得ざりしを以て。この日、隣室に祭壇を立てしめて祈れり。那翁はモ  
 ントロン將軍に告げて曰く、「我は已に職務を遂げて今死せんとす、大  
 將よ、卿も又我の如く死せよ、我は伊太利亞の民なれば、早くより公教



を信ずべかりしなれども帝位、富貴、功名に誘惑せられて静かに、人生の歸趣を思ふ能はざりき。されど心裡常に信仰の志あり、朝夕華鯨の音どよもし来るを耳にし、或は僧尼の姿を見て心は神を思ふこと屢々なりき。今我静かに上帝を讃めん。大將希くは我の爲に祭壇を立て、祭を行へ、思ふに上帝は我病を癒すを欲し玉はざるべし、然れども我祈らざるべからずと。傍に在りて之を聞きし英醫アントマルモーは、英雄の胸中を忖度して竊かに冷笑を漂はすを見るや、ナポレオンは眼を怒らして叱して曰く庸醫は藥を雜ふれば事足れり、我は我靈魂の不朽を信ず、汝輩の知る所に非ず。

五月一日に至りて病頗る革り、牀上に起つと能はず、死期は益々近づけり、那翁は四日の中に我死せんと言ひ、徐ろに死の至るを俟つ。

五日天色暗慘として黒風白雨、潮沫を飛しつゝこの孤島に打寄せ、那翁が手ら植えし柳樹は枝摧け、根、裂け、ほと／＼ありし姿さへも止めざるに至る。夕五時半、臨終の牀にある絶代の英雄は、幽かに唇を動か

して「我子……佛蘭西……佛蘭西……」と云ふが如し。嵐の夕残を止めたる波濤は絶海の端に、落日の壯觀を彩り、日今や暮れんとする午後六時、彼翁は静かに手を舉げて胸に聖十字を按し、「將軍……軍隊……」と呟やぐが如くにしてこの風雲兒が雄魂は天に驅りぬ。

那翁逝去の報一度出づるや、英國の戍兵は督監官ローの命をも用ゐず争ひ來つてこの偉人が屍の前に最後の敬禮を捧げたりき。牀上に安んずること二日、八日に至りて解體して香油を以て屍を拭ひ、四重の棺に納め、覆ふに近衛輕騎隊の戎衣を以てし、全島の人民悉く列を爲して棺車を墳墓に送る、地は曾て帝が暑を避けし所にして、帝の唇に觸れし清泉傍に送り、柳樹影暗きバンジエラニオムなり。弔砲を放つと十二發、殷々たる遺響は潮疊りする大西洋の沖にきえぬ。絶海の孤島久しくこの嬌兒の骨を胸に秘めしがルイ、フィリップの朝に至り、初めて佛國に骨を迎え、セイヌ河の畔なる、那翁夢魂の地に埋めぬ。

如上の三人者は皆な病辭の上に逝きたり、獨りネルソンの死は鐵火相

交るの中にありて悲壯、群を絶す、トラファルガーの海戦に、彼れは寡を以て衆に當り、必死の覺悟を以て全艦隊に令していふ、「英國は卿等の各其義務を果さんことを望む」と、彼れは雷に部下をして其義務を果さしめたるのみならず、提督ネルソン自身も亦身を犠牲に供して其義務を果したり。

ネルソン年少の時外戚の家に客となりしが一日家を出で、近郊を散歩し日暮れて還らず、家人は杞憂して之を尋ね求めしに、飄然として歸り來れるネルソンは人々の驚いて汝恐ろしからざりしやと問へるに答へて、我は未だ恐怖の如何たる者なるかを知らず、恐ろしきとは何ぞやと云へる小話は遍ねく人口に膾炙せるものにして、この一話はネルソンが一生を貫ける精神なりき、彼には恐怖なかりき、社會をも敵をも、將又味方をも恐るゝ所なかりしなり、従つて其私的生涯には稍誹難を招くが如きことなかりしには非ざれども、豪毅放膽、身を輕んじて祖國に報じたる偉蹟は、今に至りて英國海軍の守護神たるの光榮を失はず。

提督の警告は傳へられたり、全艦歡呼の聲を擧げて提督が警告を身に體して佛西聯合の艦隊を漸次に屏息せしめしが、ネルソンが紳士的の行動はこの豫期せられし勝利に際し、英國の人道的行爲を表せんが爲に、敵艦「レダウテール」が主砲の發火息み艦旗を徹したるを見て破壊せられしものなるを想像し、之に對して發砲を禁ずること二回なりき。焉ぞ知らんや、發砲を禁せし其艦の後尾檣頭砲は十五ヤードを隔て、艦板に立つネルソンが左肩を深く射抜きしなり。提督は先きに死せし秘書の血未だ乾かざる橋上に仆れ臥しぬ。ネルソンの傍數歩の點に起ちし艦長ハーディーは、顧みてネルソンの體を引起さんとしつゝあるを見し時、提督は艦長に對して「ハーディー、敵は遂に我を仆したり」ハーディー「否然らず」ネルソン「然り、我背柱は貫通せられたり。艦員は提督を扶けて下甲板に下らんと欲すれども、梯子は既に壞け去りて未だ之を補はず、暫らく甲板に之を安んず、提督は己が負傷の報艦隊の士氣を沮喪せしむること大ならんことを慮り、徐ろに懷より手巾を出して自ら面を掩ひぬ。

艦中の病室は今傷者に満ち、苦悶呻吟の聲盛んに起る。提督の傷は致命傷なり。然れども艦中之を知る者は艦長と醫員のみ、ネルソンは自ら其出血と苦痛とによりて思へらく我死すべしと、傍にある醫を顧み、去つて他の輕傷者の手當を爲せ、余が負傷は人間の療養を以ては何の効もなからん。一時々檸檬水を喫して堪え難き渴を醫し、紙を以て扇かしめて、燉くが如き熱を忘れんと欲するのみ。されど、苦痛は刻々として増し、戦況を憂ふること甚しく、ゾイクトリアの艦上敵艦を破碎して歡呼の聲起る毎に、垂死の提督の面上には名状し難き歡喜の波を湛ふ、提督は臨終の床に在りて、ハーデーが身を憂へつゝありしが一時十分を経てハーデーは再びネルソンが側に來り、黙して其手を握り黯然としてこの森嚴悲愁の光景を眺むれば、涙関子として偉人の手に落ちぬ。ネルソンは具さに戦況を問ひ、我軍の勝利を聞きて云へらく、「ハーデーよ、我は已に死者なり、命迫れり、萬事全く終らん。我傍へ寄れ、希くば我が髪と我所有品をハミルトン嬢に與へよ」と、ハーデーは勇氣を沮喪せしめ

さらんが爲に生命の安全なるを告ぐれば、あゝ否、そは有り得べからぬ事なり、我背柱は貫通せられたり、醫員は卿にかく告げしならん。艦長はこの悲痛なる状を見るに堪えず、再び握手して、甲板に行きぬ。

この時に當りて胸部以下の感覺は全く失はれ、ネルソンは醫員をして之を診せしめて曰く「卿は我の死するを知るべし。我之を知る、何物か我胸に昇り來るが如し」と靜かに手を左側に安きぬ。醫ベツチーは何れか最も苦しきやと訊ねしに答へて「其苦痛寧ろ死するに如かずと思ふ人も尙と聲低く、今少し生きんことを希ふものなるぞ!」あゝ何等痛切の一語ぞや。

かゝる苦痛の間にありてネルソンは尙「投錨」の令を下しつゝありしが、再びハーデーの來れる時低聲に告げて曰く「我屍を水中に葬ること勿れハミルトン嬢の事を頼む、ハーデー我に接吻せよ。」艦長は即ち躡いて其頬に接吻すれば、ネルソンは「今我満足せり、神に感謝し奉る、我は義務を盡せり!」ハーデーが再び接吻せし時、提督は其何人なるかを知らざりしが、其名を聞くに及んで「神は卿を祝福して玉ふべし、ハーデー

よ。  
 ネルソンは右脇に其體を變じ、我は早や臨終に問もなかるべければ、上陸せしむることなく此艦内にて瞑目せしめくれよと云へる時、死の影は漸やく近づき來りぬ。側に立てる従軍僧に向ひ、

「博士よ、我は大罪人にては非ざりき」と暫時沈黙を續けしが、「我は祖國に遺物としてハミルトン嬢と我娘ホレーシアを残すことを忘るゝ勿れ」聲は漸やく聞取り難かりしが、

「神に感謝し奉る、我は我義務を盡せり」と繰返しつつ、英軍勝利の瞬間に永久の眠りに入りぬ。

一千八百〇五年十月十九日午後四時を過ぐる三十分、傷を負ひしより三時半の後なりき。

(四) 文豪の死生観

鐵火場裡の英雄を見たる眼は更に轉じて五寸の毛管に人生を描寫し、

シェイクスピア

身は書窓の中にありて靜かに人情の機微を洞察せる文豪の死生観を見ざるべからず。文豪として抑も何人をか算する、吾人は第一に指を英國の文豪シェイクスピア(Wm. Shakespeare)を屈せざるを得ず、彼れは獨り英國の文豪なるのみならず、又實に世界の文豪なり、彼れの想は深く、彼れの見は高く、彼の眼は微に入り細を穿つ、彼れは文界の神なり、彼れの謳ふ所は他の群小詩人其の歌ふ所、其の著す所、僅かに自家の閱歷感想に出でざるが如きものとは甚だ其撰を異にし人世の現象、人情の委曲、悉く一代の述作にこめられ、夫自らを以て小宇宙、小世界を成してこゝに笑あり、こゝに涙あり、複雑せる人世の味を嘗めしめ、苦樂相雜はる法相の分離し難き心核を表はす。彼れは實に林樾千古の秘密を罩むる孤峰の上に一碧泓たる水を湛ゆる湖に似たり、湖心に映せる山岳の姿を以て湖の心を知ると難く、白雲の徂徠を以て其深さを測るは謬れり。沙翁が人生に對する感想は隨處に知るべけれども之を捕へ來つて直にこの自然の翁が深き心を付度せば恐らくは誤まれるを免れじ、古來幾度か沙翁シェイクスピア一代

の閱歷を尋ねて以て翁が自然人世に對する想を知らんと欲せしものが徒らに勞せし所以又實にこゝに存す。

處女作「ギナス、アドニス」よりはじめて三十有七篇の戯曲、悉く人生の縮寫ならぬはなければ、悲哀、歡樂、交も人情の機微に觸れ、沈痛悲壯の調、數奇の人世を描き生死の避け難きを歎きたれども、沙翁が性格として、哀しんで傷らざる中庸の素質は至る所に現はれたり。沙翁同代の士が目して以て「温雅なる沙翁」(Gentle Shakespere)と名けしが如く、聰慧なれども雅醇、哀傷の涙の裡に微笑を含み、死生の免れ難きを知りて希望の求むべきを忘れざりしなり。沙翁一代の著作を類別して之を見るに第一期(一五九〇—一五九五)は故郷を去りて倫敦に出て後來梨園に立つべき希望の光明を渴望せし時期なれば唯輕妙なる文辭を屬して將來の素地を作りしに過ぎず。漸やく世故の閱歷を経、人情の機微を捉へんとせし第二期(一五九五—一六〇〇)は多く材を史上に得、雄揮勁拔の史劇をものしぬ。第三期(一六〇一—一六〇八)に至るに及んでは沙翁が人生に對する面目は

奕々として其光明を放ちそめぬ。この間にありて沙翁は一身の不幸苦楚具さに至り、愛兒と家父とを失ひ、朋友に對して又快からざるの事を生じ、深く人生の苦味を嘗めしが爲めに、優美、嫺雅なりし戀愛の戯曲は一轉して人生の暗黒面、邪惡なる人情の機微、事物の底に横はる何物かを知らんと努めぬ。沙翁が生死に對する概念は稍この期の作物に於て見るを得べし。かの有名なる悲劇は多くこの期に於て公にせられしものにして沈痛激越なる調を以て徹底せる態度東西を我等が前に横ふ。然りと雖ども沙翁が死生に對する感想はかの希臘の哲人が笑ふて鳩毒の杯を舉げ、或は自ら指頭を以て咽喉を壓し、超然として身をば死の手に委ぬるが如きとは頗る其態度を異にし、畢竟して、生死に對しては一團の疑雲の聚れる凡俗の風を脱せざるなり。かのハムレット(Hamlet)が

「定め難きは生死の分別、無情なる運命の資道具を心にちつと耐ゆるが立派か、海と狂ふ反閃苦惱を刃を以て終る時如何に。死とは何を眠るに過ぎず、眠つたばかりで心の惱み、其外肉に伴ふ様々の煩累を取去る

ハムレット

とは、げに願ふてもなき大往生、あゝ死とは眠、眠りて大方夢や見む。おゝそこにこそ惑はあれ、此肉體といふ殻を脱棄てた後、其死てふ眠の中に如何なる夢を見るぞと思へば誰しも暫時躊躇ぐ道理、長生の恥を忍ぶも唯是故、小刀一つで我から極樂が作れるなら誰か浮世の嘲罵鞭撻(中略)を忍ぶべき、死後には何か知らず、さる恐ろしきものあり、常世の國へ旅立ちしもの還た例あらざれば様子分らず、心も挫け、知らぬ處へ逃げ行きてそんな難儀に遇ふよりも現在の苦難を忍ぶ氣にもなる、さらば誰が生命といふ重荷を負ふて疲れた道に呻吟うぞ、我等が良心の一顧で怯懦となり思案の首を低るれば、折角の決心も青菜に鹽、大計畫もがらりと變り、行はれずに残るが習ひといひ。

「歴山大王は死して葬られて土と化し、土は終に土なれば砂に混じて酒樽の孔を塞ぎ、カイゼルは風を防ぐ壁土となり、世界を畏服せし豪傑もやがてはかゝる様となる英傑も死の鎌を避くるを得ざれば、紅顔も、死神の一打を免るゝ可からず、一當然なる道理の下に一様にこの世より拂ひ

去らるゝの危運は情として悲歎哀傷に値ひせずや、密雲四集して解決を得たるが如く得ざるが如きものこれ人情の自然極致に非ずして何ぞ。然りと雖ども生死もこれ宿命の命する所、魂のみは不死不朽のものとするればどうせ、裸形で生れし人間の、天死すればとて浮世の物に何の未練を存せんや。静かに眠りの床に就いて永久の夢に天上の快樂を受け、人間の受くべき宿命を黙して静かに受くるを以て譽とするの安心の境地を存せざるべからず。

ゴロナのロウレンス聖人が、ジュリエットの死を悲しめる親に對して、

宿命の避け難きと來世の享福とを説いて曰く、  
 静まれ、恥ぞ、愁傷は愁傷を以ては癒すを得ず、此美しき乙女は卿一人の有に非ず、天も持主の一人なりしが、今は天の獨占に皈したり、これを誠に乙女の幸福、死後は卿が持主たる資格は減すれど天の資格は永劫なり。卿が此迄願ひし所は娘御が出世にわらずや娘御が昇進は卿が希望の頂上であつたらう、今娘は人界を脱し雲井遙かに昇進し天

上せしを悲むか、子を受する情もさることながら、其幸福を見て狂氣の如く嘆かるゝは、誠、子を受する道に非ず……結婚して直に死する者こそ眞の幸福者なるを知り玉へ。

沙翁が主觀を發露せしと云ふソネット〔Sonnet〕又此間の消息を傳て歌ふらく、世をば諫めの鐘の聲響く時、邪惡にみつる腹もちて、邪しまの世を逃れたる、我が身の上を嘆かされ。卿この句を誦する時、詠せし我を思はされ。

忘らるゝことをば望め愛人の、悲み傷む姿をば見るに堪えじな。

我が骨の泥に塗れて朽つる時、この詩ながめて我名をば、口占むことをばやめよ、汝が愛を、我が命と共に抛て。

魂去りし我が身の上を嘆かひの涙の玉を世には示すな。

## 『死の勝利』

「汚れし肉體の奥宮に在す魂よ、何が故に四方の壁を美しく飾りつゝ、しかも其中にありて嘆き悲しみ、死に苦しむぞや。東の間の時を飾

るに何ぞかくは費すとの多き、其放逸の後繼なる虫に喰はせんとてか、これぞ汝が肉體の終末なるか。(中略)かくて汝は死に養はれ、死は人に養はる、さばれ、一度死したるもの、終に再び死することあらじ。

## 『魂と肉體』

沙翁が一代に於て最も悲痛なりし時にありても、彼れは悲しむを知らざるに非ざれども、しかも哀しんで傷らざることを忘れざりき。「死神の庖厨の永久なる穴藏には珍味堆く重れる」を知ると共に、「木の下に詩の音、靜かに鳥の囀るを聴き小羊の群れの青を踏む」春日行樂の世を楽しむを忘れざりしなり。誠にこの天才はテエヌが言へる如く、常識の發達せし人にして、莊園の間に園藝を楽しみ、水の涼々たるを聴きて自然の暗示を思ひつゝ、晩年を楽しまんとするきわの士なりしなり。知るべし、其所謂、梨園の煩累を逃れ、アボン河畔の生地、靜かに天命を楽しみつゝ、壁孔を塞がんが爲に安んじて土の胸に還り行きしものなるを。

文藝復興期の後を受けて、飽まで人生の表裏を洞觀し人情の機微に觸

れしは沙翁にして、之に次で英國文壇の桂冠を新ならしめし者をミルトン(Milton)となす。ミルトンは敬虔の信仰を以て神を恐れ、身を持するを寧ろ酷烈に失したりし清教徒にして其一生の閱歷は沙翁の甚だ静平なりしに反し、或時は崢嶸、或時は榮達、得意と失意との間に身を置き、一度は王政覆滅の勢に乗じてクロンウエルが秘書の職を獲、宇内に盛名を馳せ、文名殆んど敵をして氣死せしむるの概ありしも、クロンウエルの死後、王政復古の時に際しては、昨の榮達は轉じて落魄となり、再び官海に舟を舳するを能はざりしのみか、家庭太だ圓満を缺き、加之、これより先詩人四十四歳、久しく疾みたりし眼は殆んど盲せんとせりき。一千六百六十年三月チャールス二世、佛國より來りて王位を踏みしより、身を退き靜かに大作「失樂園」(Paradise Lost)をものし、心眼の未だ盲せずして詩神の寵遇去らざるものなるを明にせり。

ミルトンが一生を思ふに、嘗つては風雲に乗じて志を伸べしより、晩年二女を侶として退隱したる迄、唯これ謹嚴にして敬虔なる一生なりき。

晩年の作「サムソン、アゴニステス」(Samson Agonistes)の主人公、サムソンが失明したる後も、毅然たる信仰と不拔の精神とを持し、神を恐れ、教を敬まひたりし典型は實に徹頭徹尾詩人の面影にして剛毅沈着の徳を遺憾なく現はせしものなりとす。従つて一代の述作も智識の認めざる快樂を以てせず、一語一句悉く詩人の自覺に觸れ、咽嗟の感動を以て詩神を驅使したると終になかりき。况んや大作「失樂園」の如きは、殆んど二十五年間の勞作より成り、其間煩雜なる事務の間にありて幾度か結搆を廻らし主意を尋ね、彫心縷骨してこの一大理想詩は成りぬ。「失樂園」の後を追ふて、主耶蘇の勝利を詠せしもの「復樂園」(Paradise Regained)又晩年の事業なりしは言ふまでもなし。旨詩人ジョン・ミルトンが理想は恐らくは一代の心血を注ぎたりしこの二篇の中に籠れるものと見て大差なからんか。

失意時代に於けるミルトンが心的状態は漲ぎて「失樂園」「復樂園」及「サムソン、アゴニステス」の三篇に攝まる、而して此三篇の中心思想は實に敬虔なる清教思想にして、清教思想の權化、自らこれ此三篇なり。ミルトン



「失樂園」

が生死に關する觀念又自ら神を恐れ天を敬ふ基督教徒のそれと何の異なる所  
かあらんや。敬虔なる基督教の死生觀は假りに一大叙事詩の姿をかりて現  
出したるに過ぎず。基督教の死生觀はやがてミルトンが死生觀たるなり。  
原始の神エホバ神、天の寶位に坐し、諸の天使、神の寶坐を繞りて之  
を奉仕せしが、主位の天使サタン(英にセータン)神、神がキリストを寶位  
の右に坐せしめしを震怒し、神に對して反逆を發しぬ。されどいかでか  
稜威けき神の力に抗することを得べき、天の霹靂この不敬の天使をうち、  
惡魔となつて其眷屬と共に地心の坑深く陥り火焰の海の唯中、苦悶呻吟  
して晝夜其身を悶ゆ、不死の體を受けたるを以て、死するも得せず、大  
逆罪を以て生くることも能はず、懊惱の聲地獄を搖がす、失樂園は即ち  
この火焰の海、呻吟の聲、硫黃の氣を以て破題となす。  
サタンは忿恨骨に徹し、神の苛責を憤るの情に堪えず、次位の惡魔ベ  
エルバブを喚び議して以て天の神に其恨を報ひ、聊か自ら慰むる所あら  
んとす、ベエルバブ又之に贊し、天國を墮落せし衆魔を集め、復仇の策

を議せんとし、自ら地心火焰の海を出で、海岸の乾ける土の上に登り、  
地獄を震撼せしむべき大音聲を以て部下の眷屬、惡鬼を呼喚す。假睡の  
夢破れがちなりし幾千萬の惡鬼はサタンが喚聲に醒め、我もくと火の  
海の畔にこそは集りたれ。偶像として祀られし諸の惡神、狼褻のベリア  
ル、<sup>①</sup>殘忍のモロック、希臘奔竄のシヨウブ、シユビター、サタンが復仇  
の議を聞きて、之に贊する者モロックあり、暫らく忍んで時機の至るを  
俟たんとする者ベリアルあり、マムモンは金鑛を掘りて地獄サタンの官  
殿を粉飾して天の榮光に競はんとす、ベエルバブこゝに於て一策を献じ  
て云へらく、神は頃日新たに世界を創造し、新人をこゝに住ましむ、我  
等は宜しくこの新人を誑かして樂園を逐ひ、代つて之れに住するをよし  
とせずやと。衆魔聲を舉げてこれを妙策なりとし、樂園偵察の任を主魔  
サタンに屬し歡呼して散す。

殘忍、狼褻、愛錢、不敬、悉くこれ人生の邪惡にして神に負かんとす  
る人間の惡魔に非ずして何ぞ、されどミルトン思へらく惡強ければ、神

の善愈々現はると。

サタンは樂園偵察の任を受けて、危険なる地獄の路を歩して地獄關門の地に至る。この門を守る者、一は半人半蛇の女性「罪」、一は粹惡の惡鬼「死」なり。サタンが關門を出でんと欲するを見し「死」は之を妨げて格闘して相搏つ、「罪」はサタンと「死」の鬭争を止めて、其素性を問へば、焉ぞ知らん「罪」はサタンの側腹より生れし分身にして、「死」は「罪」とサタンとの間に生れし子ならんとは。

「罪」と「死」とは共に實に主魔サタンの子たりしなり。

こゝに於てサタンは容易く地獄關門を出ずることを得たり。外は渾沌たる暗黒の夜、困苦ほとゝ口にすべからず。翼を鼓して遙かに天堂の光明界を望み、終に新世界の端に飛翔し入る。

樂園夢圓らかに人間の始祖アダム、エヴは、清淨の快樂に耽り、天使ガブリエルはサタンが地獄脱出の報を得て、焰の劔嚴かに樂園を守る。サタンはこの清淨の國に潛み入り、始祖が生命の樹果の談を耳にし、身

を蛇に變じて生命の樹の下にかくれエヴの來るを待つ。

我等人間の始祖に死すべき味の菓を嘗めしめしは實にこのサタンの業なりき、この菓を嘗めし始祖は、裸形の恥つべきを覺り、樂園の地を履むことを得ず、終にブリエルか焰の刃に逐れて、この清淨の樂園を失ひ死すべき命運の身をエデン園外の世界に放たるゝに至れるなり。「失樂園」の一篇はこゝに終る。

「失樂園」の結構は即ち、神と魔、善と惡、暗黒と光明、樂園と地獄、罪と無垢、而して不死と死との戰鬭なり、我等人類は惡魔の呪咀によりて、邪惡、暗黒、罪惡を獲、樂園を失ひ、而して死の苦しみを受く、然れども、始祖は天國を逐はれ、惡魔は勝を制したるが如けれど其子孫は新約の救世主耶蘇の降誕によりて、惡魔は永久の獄に縛がれ、諸神は逐はれ、罪と死とは去り、樂園と不死とは永久の救済によりて復せらるゝなり。げに救世主降誕の鐘聲は、我等人類が永遠の沈淪を救ひ、永久の樂園に至るの祝鐘となりき。舊約の「失樂園」は新約によりて贖はれし「復樂園」とな

りき。永久の生命は唯救世主によりて得らる。

中世にダンテありて詩趣横溢の三界歴遊をものし、今ミルトンは勁拔崇高の筆致を以て、善惡の闘争、神の勝利を賛す。風格異りと雖ども、内存款虔の信仰溢れてこの大篇を作したりしは共に一なり。

基督教の傳へらるゝ所、必ず其書を見ざるものなきはジョン、パンヤンが「天路歷程」なり。外國語に譯せらるゝ已に一百有餘に上り、常に新らしき興趣と神會とを讀者に與ふ。熱誠、剛毅、謹嚴、節制を以て其美德とせし英國清教徒が精神的作物の、律語として現はれしものをミルトンの「失樂園」とせば、散文として現はれしものは實にパンヤンが「天路歷程」にしてこの二者は殆んど相反せる對角の上にあるが如し、ミルトンは同代稀有の學者なりしに反しパンヤンは僅かに字を書き、讀むことを習ひしに過ぎず、一は臺閣の上にありて時めきしなれど、他は貧困なる一鑄掛匠なりき。然れども今に至りて不朽の譽を有するは抑も何の故ぞ。其はこの一篇は實に敬虔なる著者が苦悶史、精神的變遷史なればなり。

パンヤン

即ちパンヤンが嘗て抱持せる信仰脆く破れて安心立命の地を失ひ、靈性の苦悶、癡愚、妄想に久しく心を苦しめられしものが一朝驟然として改宗し、上帝の寵遇を蒙るに至りし歷程を平明簡淨の筆に寫して一篇の物語を成したればなり。パンヤンはやがて讀者の爲に苦悶し、懊惱し、終に再び安心立命の境に至る、讀む者をして第二の我の得脱を思はしむればなり。

史の傳ふる所によれば、パンヤンは幼時より深き教育は受けざりしかど、天性正直にして敬神の念深く、しかも多情多感にして絶大の想像力を有し。光明、暗黒、罪惡、謙徳、悲哀、歡樂、天堂、地獄の幻影は常に彼が前後を去ることなかりき。

されば、妻を拉れて漂泊の鑄掛匠となり、貧婁の身を以て業を追ひつゝありし間も、常にかゝる幻影を見、或時は、空中に現はれし基督が「汝罪を捨て、天に行かむとするか、或は罪を抱いて地獄に沈まんとするか」との雷音を聽きて苛責の身に迫るを覺え、或は地獄の猛火と暗黒と、永

久の鐵鎖の音を聞くと、一日、一週、一年に越え、自ら責むると甚しければ、終には墮獄の苦しみを生じ、悪魔の背責を感じ、又或時は天國の逍遙と天使の來迎を感じ、得意の時も失意に沈み、反悶苦惱の極、終には大悪魔たらんことを欲したることさへありき。細は皺み、眼は凹み、夜は安眠を得ずして悪夢に襲はれ、金頭の悪魔を見るかとすれば、十字架の基督を見、人生の不安、死の恐怖、罪惡の幻影、歸趨の地は長く閉さて、悪鬼の迫害は益々急なり。

一度、懺悔して浸禮教會に於て改宗するに至りても、尙苦悶を脱すること能はず、神の敬愛は轉じて僧物の崇拜となり、極端の敬虔より素行は修まりたれど、尙時々不敬の念心中に萌すを逃がれず、天來の雷音己が罪業を叱するを耳にすること屢々なりき。王政復古して前朝の異教徒を罰するに當り洗禮教會の長者として執へられしパンヤンが汪溢、放縱の想像、燃ゆるが如き敬神の念、死の恐怖はベットフォードの獄中十二年間の楚囚となるに及んで、終にこゝに絶好の文辭を作り出すに至れり。

「天路歷程」

パンヤンが獄裡にありて親しみし書は殉教の書及聖書にしてこの二の父母によりて「天路歷程」の子は生れたるなり。

「天路歷程」一篇の梗概はクリスチャンといへる一市民が罪業多き世を解脱せんが爲に天國を指して旅し行く描ける物語にして幾多の艱難苦楚を嘗め竟に救済の門に入る心的徑路の譬喩なること皆人の知る所にして今之を贅するの要なからんか。

パンヤン思へらく。人生の暗黒なる谷に陥らんとして悚然たりしもの幾度か、余は夢にこの谷の右、いと深き濼あるを見たり、この濼は古より幾多の盲者和率ゐて陥り終に死せし處にして、其谷の左、泥沼の底を無み、一度陥る時は善人も足の立途あることなし。この間の路甚だ狭く、濼を避けんと欲すれば沼に陥り、沼を逃れんとすれば、濼に足を失す、尙行けば路は暗黒のあやもなく、一步々々に其何處なるかを知らず。谷の中央、路に接して地獄の坑は口を開いて陥る者を俟てり、火焰迸り出で、音響耳を聳す、若し一步を誤れば、泥濘か、濼か、將、地獄か。

進退谷まつて天を仰いで神に祈る。かゝる困厄の間には、善行も、祈禱も、正義も何の力がある。唯神寵のみ獨り正し、神はこれを基督の神聖に托せしめて初めて救済の大業を全ふせしむべし。

吾等が不死の生命は神の恩寵に由りて永久の城に入るに非ざれば、終に獲るに由なく、靈は鬼の手に附されて永却の否定に至るべし。

「天路歷程」一篇の主旨蓋し是に外ならず。

基督教的人世観が勁拔雄渾の律語として現はれば「失樂園」となり、樸素激越の散文として權化すれば「天路歷程」一篇の譬喩談となる。

白日基督を見しこの詩人は禁獄の間僅かなる手工を勵み、教友の醜金と共に妻子に送りて之が口を糊せしめ、赦されて後、敬神の念前に倍し常に倫敦とベットフォードの間を往來して教を布き、千六百八十八年、倫敦に於て死しぬ。

最後に吾人は異色ある一文豪を觀察せざるべからず、オルフカンゲ、フォン、ゲーテ(Wolfgang von Goethe)これなり、吾人は十九世紀の學界に新

らしき光明を與へたる進化論の初頭に於てこの學説に暗示を寄與せし大名の中に、我詩人ゲーテの名あるを忘るべからず。

近代植物學に於ける主要なる思想及骨節學に於て、背推骨の白骨は骨格の單位なるを想像し、頭骨は畢竟して最も上部に位する一個の變形白骨に外ならずとなして植物は節より節へと延び、終に花と種子とにて終り。繸虫、蜈蚣は節々ありて頭にて終り。人間及高等動物は白骨の連結より成り、力は其頭に集中すと思ひしが如くゲーテが一生は之を貫いて一個の思索家なり、其偉力を頭に集中せしめたる哲學者なり。徒らに情熱の狂ふに任せて知の制裁と偉力とを忘れたるものに非ざりき。詩人として第一流の地歩を占むると共に科學者、哲學者として又決して専門學藝の士と遠く相下らざるの地位を有したるなり。彼は知を追ふて飽くを知らざりし篤學の人なりき。

然りと雖どもゲーテは知の爲に情を捨て、頭の爲に心臓を重んぜざりし人に非ず、否、其情熱の力は殆んど其知其意志をも顧みざらんとする

こと屢々なりき。處女作若きエルテルの哀は實に知をも意志をも燃かんとする情熱の火なりしなり。この書一度發市せらるゝや、歐洲の天地には一道の熱氣澎湃として青春男女の胸裡に起り、薄倖失戀のエルテルが行爲を倣ねて、自殺せんとする者踵を接し、厭世の念は暴風、壓迫時代の一旋風たるの觀あり、而して「エルテル」は青春のゲーテが閱歷の記録なりき。

沙翁を以て唯一の客觀詩人とせばゲーテは唯一の主觀詩人なり。ゲーテが閱歷、思想はやがて一代の述作にして、思想の變遷は自ら又述作の上に之を見ることを得べし。

多情多感にして人生の不如意と、飽くことなき真理追求の念とは、戀愛となり、厭世となり、而して自殺の飛首となりぬ。自傳とも稱すべき「詩歌と真理」中にゲーテはかゝる心的状態を名けて怪想的鬱愛症となし、生命の倦怠と名けたり。若し詩人にして真理を翹望するの知力的努力を缺きたらんには其友イエルサレムと同じく道ならぬ戀に沈みて終に自殺

し果てしやも未だ知るべからざるなり。されど詩人には真理を翹望するの心あり、燃ゆるが如き自尊心あり、怪想的鬱愛症の間にありて僅かに事なきを得たりしなり。自殺は世故の閱歷なき青春の士に對して誠に靜平なる境を得べき好方便なり、ゲーテは實に種々の自殺の方法を究め其何れを擇ばんかをさへ研究したりしなり、曰へらく「種々の武器を聚め其中より濶刃の短劍を選び、夜々褥の邊に之を置き、燈火を滅せんと欲する時、其銳鋒を我胸の中に一寸、又一寸、直に衝き込まんかとせしこと幾度ぞ、されど予は之を遂行せざりき、さては自ら失笑を禁ずること能はず、終にはかゝる怪想的鬱愛を拂拭して活きんことを決心したり。されど予が楽しんで自殺せんと欲して、思索し夢想し感せしことは殆んど是詩的努力なりと思ひしが爲にして、かゝる見地より、各種の感想を蒐集せんとすること約二年、自殺的精神の内に彷徨しつゝありき。

ゲーテは自殺の方法をば汎く史上と、四圍の事實とに索めたり、而して之を歸納したる結論は曰く自殺は終に精神の偉大、自由を求むべき道

に非ず自殺者は之を求めて終に失ひし者に過ぎずと、ゲーテは自殺すべく、餘りに聰明なりき。

友人エルサレムの自殺は千七百七十二年の春にして、「エルテル」が發市は越えて二年、同七十四年。生きんことを決心せしゲーテは一千七百八十六年南歐伊太利亞に遊び、撒攪の縁深き地を歴めぐり、古代文化の精華を咀嚼して、同八十八年故國に返る、詩人一代の心的變化はこの旅中に起り、鬱憂の性情は一變して眞理討究のファウスト博士を孕みワイマールに於ける温籍なる一詩人を現はしぬ。

「ファウスト」(Faust) 一篇はゲーテが眞理討究の心的歴史にして、思想變遷の過程は遺憾なくこの一詩に現はる、一面より見ればゲーテが死生感念の思想史といふを得べし、今姑らく予をして「ファウスト」の動機と其中心精神を談らしめよ。

ファウストの中心に潜む勢力は人間の世をして心臓情に還向せしめんとする内在的勢力なり。諸々の桎梏を脱して本然の情に還らめんとする

の努力なり。人間は諸々の事象の俘囚にして、其性質として、或は眼に見ると得ざるの力、或は感情、或は社會的關係の爲に囚へられヘーゲルが所謂人間の歴史は自由恢復の過程に過ぎざるものと成り終る、古來この桎梏を破壊せんと欲せしものにソークラテースあり、耶蘇あり、共にこの努力の爲に非命の最期を爲しぬ。ファウスト(ゲーテ)が生れし時代は中世の後を受け一切の科學も宗教も哲學も悉く立法府と教會との制縛の間に在りて二者の萬能を信じ人間の自由と權威とを認識せず、典型に生れ、典型に育ち、典型に死し、而して典型に葬らる、何人か起て以てこの桎梏を破るの努力に従はざるべからず。果然として博士ファウストあり、日耳曼の個人性自由の尊重、自重の精神を以て、羅馬の立法に抗し、猶太、希臘、羅馬の典型的衝動を打破するの木鐸となり、日耳曼の精神を以て人間の自由を恢復するの運動を爲すに至りぬ。靈魂を束縛せる教會の打破は所謂ニュートンの思想、神學哲學の領域にして、發しては、心的の宗教改革となり、肉體を束縛せる立法の打破はイタリヤ思想

の勃發にして、醫學、法理の學、新道德の制定となり、發しては文藝復興の精華となりぬ。この兩者の思想を一にして、運動の當面に立ちたる者は博士ファウストなり。而して彼は耶蘇、ソークラテースの如く又非命の最期を遂げき。

ファウストが運動は人間が眞理を證明せんとする至情の顯現にして、やがてこれ肉體と精神の調和、生と死との葛藤、血と肉とを有し塵に座して而かも高き祖先の位置に登らんとする肉靈の衝突也、我等は生命の源を究めんが爲に生命の泉を翹望しつゝあるなり。人間の靈魂は其靈の源泉(Urgel)に理性を齎らし、之を超越せんと欲して努力を爲す、而して此生命の源泉を得たる時人間最高の満足は得らるゝなり、即ち是れ至神秘の根本眞理なると共にやがて是至宗教の根底には非ずや。ファウストの一生は此眞理理想に臻らんとする努力の歴史なり。然れ共理想は畢竟して理想なるとを知らざるべからず、ファウストの一生はヨブの如く悪魔の犠牲に供せられたり、されど最終の勝利は死に由りて贖はれき。

「ファウスト」曲

「ファウスト」曲の主人公ヨハン、ファウスト博士 (Johann Faust) は第十六世紀頃にありし學者にして知力上無限の満足を求め、終には魔法を學びて最終の眞理を得んとせしも力追はず悪魔の誘惑によりて滅ぼされし人なるがゲーテ以前材を之に執りて詩曲をものせしもの多く、無限の理想に思を寄せて之を得ざりし象徴となりぬ。ゲーテが曲に現はれしファウスト博士は即ち詩人自己の分身なり。一曲の破題は天帝ファウストが邁進の精神に富み、何事にも満足せざれども其目的にして善ならんか一度は敗るゝとも終には正道に還るべしと謂へるに反し、悪魔は我之を墮落せしめんとて天帝と賭を試むる「天上の曲」を以て始まる。博士は書齋の裡にありて獨語して云へらく「噫、我宇宙の眞理を究めんが爲に哲學、法律、醫學、神學に全力を盡くして學びたれど終に何の得る所かある」如かず、魔神に一身を捧げて不可解の眞理を證明せんにはと、口に咒文を唱ふれば、室の一隅に火焰起り、「地精」(エリク)として現す。博士は恐怖の念に打たれ、床上に仆るれば地精は博士の爲すなきを嘲りて去る。ファウストは地精



の去りしを覺り己が海志を恥ぢ、毒を仰いで將に自殺せんとすれば、時に東天明らかに復活祭第一日の夜は明けて、童男童女の歌聲は耶蘇イエスは甦イタれり」とあるに、翻然として志を轉じ、弟子を伴ひて市中を歩む。天帝と賭を試みし悪魔メフィストフェレス (Mephistopheles) 龍犬に身を變じて博士に從がひ其家に来り、博士の咒文に其姿を現じてファウストの志を聴き「よし、然らば、我終生汝に仕へん、されど我が汝に對する行爲、汝の意に適し、汝之に満足したる時は我、汝の魂を奪ふべし」と、博士は悪魔の言に從がひ共にライプチッヒの酒肆アウエルバッツハ、ケルレルに至りて酒を酌む。されど博士はかゝることを以て満足するものに非ず、甚だ喜びざるの色あり。悪魔は再び「ヘンキエツヘー」に博士を拉し、老年の悲愁を脱せしめんが爲に魔藥を與ふれば、白髮の老博士は忽然として青春の血燃ゆるが如き年少華奢の風流兒と變じ、共に出で、市に戀を求め、處女マルガレット (Margaret) を誘惑して肉慾を恣にする。

マルガレ  
ットの悲

清淨無垢のマルガレット (Margaret) は悪魔の誘惑の爲に墮落して肉慾の

對象となり、終に子殺の大罪を犯して獄に投せられしが、獄裡に在りて懺悔の念を生じ、身を殺して罪を贖はんが爲に、死す。正に臨終の時に及んで天上の聲ありて「汝救はれたり」と云へるを耳にし、安らげく天に昇り此世に残せる戀人ファウストを呼ぶ、青春の博士は天上の聲ハイインリヒーハイインリヒー」と己を呼ぶを聞きて懺悔の念心に萌したれども、意志未だ強固ならず、再び、悪魔の手に身を委ねたりて第一篇二十四齣ここに終る。即ちこれゲーテ青年の煩悶の幻影にして一度は肉慾に耽りたれ共理想、眞理に向はんと欲するの精神は戀人の喚聲を以ても死するを得ず、宜しく再び悪魔の手に由りて眞理討究の途に上らんとす。

第二篇はヘレナ (Helena) の曲にして其着想頗る復雜、深遠の理想を寓したるものと稱す。ファウストは、不可知の郷にありて大苦痛を受け、漸やく天地山川 (自然) の精靈に慰藉せられて回復し、悪魔と共に某獨逸王國に赴き其政廷の財政の窮乏を濟ひしが、王廷に於て博士は魔法を用て香を焼き、煙中よりして希臘の美男パリス及び其戀人ヘレナを現出せしむ。

ヘレナは即ち希臘の理想なり。幻影のヘレナ眠れるパリスに近づかんとすれば、パリス醒めて其姿を隠し、一人の武士忽として現はれ、理想のヘレナを奪はんとす。ファウストは我焼ける香の幻影なるを忘れ、之を遮らんと欲して武士に近づけば、魔法忽ち破れ、爆然たる聲と共に術中の人悉く消え、博士は悶絶して仆れ臥す。

ヘレナを失ひし博士は悪魔と共に、造人術を發明せし學者ワグネルを訪ひ、其人工ホムニクルスの人に誘はれて希臘に至り、ヘレナの所在を尋ねて地下に在ることを知り、地界の主ヘルセフォネに乞ふて、ヘレナに遇ひ、相共に地上に出づ、いま希臘はトロイの戦争に勝ち、メネラウス王ヘレナを拉して凱旋せんと欲す、ヘレナは久しく異郷に在り、故國に入らば殺されんとするを知り、恐怖の情に堪えざりしが、恰もよし、この時北方の王軍を率ゐて希臘を衝き以てヘレナを救ふべしといふ、焉ぞ知らんや、北方の王は是れファウストなりしなり。こゝに於てヘレナはファウストと婚し、二子を生む、これ即ちクラシックと、ロマンチックとの合致を象

徴す。されどこの調和は久しからず、生める子は天し、ヘレナは死し、遺愛の衣、美と、愛との理想は雲と變じ、ファウストを乗せて遠く北に飛ぶと思へば、忽然として是一場の大夢、理想は又も去り、現實は舊の如く残れり。ファウストは再び敗れたり。

こゝに於てファウストは稍理想の追ふべからざるに思ひ至り、悪魔より海畔荒蕪の地を得て、開墾を試み、以て地上に自己の意志を築かんとす。博士が缺點は意志の薄きにあり、今其意志を勵まして耜を握り、心を潜めて開墾の業に従ふ、されど悪魔は其眷屬を率ゐて來り博士が開墾せし跡を破壊して休まず。従ふて墾けば従ふて壞つ。終に何等の効果をも見るを得ず、かくて大なる村落を造るを得ば余は満足すべかりけれど、一箇の部落をだも成すことを得ず、終に死の手に身を委ぬるの時となりぬ。されどファウストは死する迄其業を廢せざりき、即ち何等の安心をも満足をも將又解決をも得るとなくして死したるなり。悪魔は犠牲となりしファウストが屍をば地獄に齎らし行かんとする時、天使、聖母マリア、

戀人マルガレットが靈遙かに天より降臨して悪魔と戦かひて其屍を納め、終に天國に往生するを得たり。

肉慾を求めて敗れ、古代の理想を追ふて敗れ、而して地上に自己の村落を築かんと欲して敗れたるファウスト(ゲーテは唯死によつてのみ濟はれたり。及び難き理想を追ひしゲーテが風姿は勞隴としてこの一篇の曲中に現はるゝを見ずや、ゲーテは最後迄満足せず、眞理を一身に體得せんとして死する迄努力したりしなり。見よ、ワイマルの詩人は、無二の友シルレルの訃を耳にして、人世の晩年を閲せずして死せし友を羨やみしには非ずや、臨終の窓の光明を遮ざるを止めて「もつと明くせよ」(Meh' ist)と云へる一語は、死するを悔ゆる深刻なる終焉の辭には非るか。

ゲーテが一生はカールスフェルトが所謂夏日の如く、烈日天に朝して其勢恰かも天軍の四方を征服し盡し振旅凱旋したる後英雄是の如にして、崇拜せられんが爲に死するの概ありて存す。靜かに、日没西方の天を望めば、暮雲搖曳して、落日を靜かなる幕に掩ひ、日の臨終永劫の聲と融合する

を耳にすれば、人生の意味釋然として胸に音訪ふを覺ゆるに非ずや。ゲーテは生ける間は終に満足せざりき、理想は未來にあり、之を捕捉すべからず、然れども「死は永遠が時劫と共に來る來迎なり」、一切は死を以て満足せらる、理想はこゝに於て獲らる、ファウストは死せり、然れども其靈は永遠の來迎に由りて、永久に天國に於て救濟せられしあり。

「あゝ我曹は生命の源を知らんが爲に、生命の水を求むるなり」。

### (五) 近世哲學の死生觀

教會の奴隸となりて一意其信條を庇護せんとしてたりし中世哲學は佛人デカルト(Descartes)出るに及びて其根底より疑ひ初められたり。彼れの哲學は疑ひを以て出發點とし從來懷抱せし諸種の思想を打破し了りて其基礎より改造するを目的としたるが故に中世に於ては萬人等しく正しと認めたることも、彼れの眼中には疑ひを以て掩はれ、明瞭に且つ判然と思惟せらるゝものにあらずんば之れを承認することを拒み、疑ひに疑ひて

デカルト

終に一の疑ふべからざるものあるを認むるに至れり。疑ふべからざるものとは何ぞ。我思ふ故に我あり (Cogito ergo sum) 我れに思ふといふ働きのあは疑ふべからず、而して既に之を思ふ、其我あるや明瞭且つ判然たりと、かくて其思索を進めて我既に在り、而して我をして存在せしめたるものは我自身にあらす、我をして存在せしめたる第一原因は完全無缺の神ならざるべからず、此神を第一原因として心と物とを分ち心は意識するものにして物は廣袤を有するものなり、此二は其任を異にして互に獨立するものとし此物心二元を以て第二義の實體とし、其生物を論ずるに當りても其肉體を説くには全く廣袤を有する物體とし其動作生長等は皆な機械的物理的作用を認め之れを生氣として物質界に屬せしめ、非物質界に屬するものを精神といひこれを以て意識の用あるものとしたるが故に下等動物の如きは一種の自動機械に過ぎず、其食を求むるも其痛苦を感ずるも意識ありて爲すものにあらすと思考し、人類に至ても其身體は一種の機械に外ならずして之れを動かす所のものに動物精氣 (Spiritus animalis) といふ物質中最も精緻なるものにてこは血液が心臟によりて温められ腦によりて冷されて成り神經に保たれて全身を廻る機械的狀態なりとし、別に精神なるものあり、こは全く物質と異りたるものなれど、能く此機械を動かすの力を有す、即ち物質と精神とを腦に於ける松果腺に於て接觸す、此松果腺こそ精神の座位なれとしたりと、精神其者は廣袤を有するものにあらざるが故に、機械の破壊即ち身體の死に於ても滅するものにあらすと思惟したるが如し。

デカルトの哲學は不備の點頗る多かるべしといへども、吾人の身體を機械的に觀察して從來の迷妄を破り新しき哲學の素地を成したるに於て其功没すべからざるものあり。デカルトの二元論に次ぎてスピノザ (Spinoza) あり、物心二元を渾融して汎神的一元論を立つ、其素行も亦塵界を超絶して仙者の風あり。

近世哲學は全く基督教の羈絆を脱し、自由に眞理を討究したるが故に、光彩陸離、大に見るべきものあり、そは既に本文に於て一瞥したれば

今は之れを略することゝし、こゝには其性行のいと面白きスピノーザを紹介すべし。スピノーザは名をベネデックス又はバルフと呼び、西暦千六百三十二年を以て和蘭陀のアムステルダムに生れたる猶太人なり。由來猶太人は神に對して敬虔の情を有したりしが、スピノーザ長じて諸種の學術を研究するに従ひ、此信仰に疑惑を抱き、從來の基督教徒の所信とも異なるの見解を有し、天使の存在を否定し、靈魂は身體の生氣と別物にあらざれば不滅するべきものにあらずとなしたれば、終に猶太教の會堂に招喚して之れを詰問し、若し其説を改めずむば刑罰に付せんと脅迫したれど、所刑何の恐るゝ所かあらむ、吾は我が信ずる所をいふのみとて頑として應せざれど、猶太教の法教師等は成る可く事を穩便に濟さんことを欲し、且つ頗る彼れが才學を惜みければ、スピノーザにして若し表面のみにも猶太教徒たることを諾せば、一年に一千フロリンの金を與ふべしといひしも、彼れ豈に黄金の爲めに節を曲ぐる者ならむや。尙ほ持して變せず、飽くまで自説を骨張す、此

に於て保守思想に驅られたる教徒は大に憤激し、彼を目して猶太教の神聖を害する惡魔とし、終に之れを途上に要撃するものあるに至りぬ。しかも彼れ之れを覺りて身をかわけしが故に七首は僅に外套を貫くに止りて、彼れを害するに至らざりし、教徒の憤激此くの如きを以て法教師等も亦之れを寛恕する能はず終に一千六百五十六年七月二十三日を以て放逐の宣告を與へ、彼れをして神の撰民たるイスラエルの民族より除去し、一願ふ主よ彼れを永劫宥し給はざらむとを詛ひ、猶太人に告げては何人も言語に於て文通に於て斷じて彼れと交る勿れ、何人も彼れに恩惠を施すこと勿れ、又何人も彼れと同じ屋根の下に立つこと勿れ、六尺以内彼れに近づくこと勿れ、何人も亦彼れの著書を読むことなかれといひ、彼れを其社會より放逐せり、當時猶太人は歐洲の各民族より排斥せられ、僅に此和蘭陀の地に安住するを得たるのみ、今彼れ此地に於て此民族に放逐せらるゝ其の困苦實に想見すべし。外には行くべきの處なく、内には彼れを害せんとする刺客のあり、

嗚呼此の天涯の孤客、抑も奈何して世を渡るべき、彼れはアムステルダムに近き所に寓し、眼鏡を磨きて生活の資に供し、専ら心を哲理の研究に潛め、後、リンスブルグに移り、又フオールブルグに移り、ハーグに住し、流離困頓、或る時は下宿屋の主婦に罵られ、或る時は畜工の二階を賃し、財貧にいて道いよゝ高く、其著一び出るや、思想界の爲めに大恐慌を起し神學者連は之れを罵りて終に和蘭陀政府をして發賣を禁せしむるものあるに至りしも、哲學者間に其高風を慕ふものも亦少からず、彼れの後の大哲學者と云はれたるライブニッツも亦彼を訪ふて其説に傾聴したりといふ、かくて彼れは千六百七十七年、其寓居に於て淋しき眠に就きたりといへども、其説は今尙ほ想界の大勢力たり。彼れの哲學は近世哲學の始祖と云はれたるデカルトの説を繼承して別に一生面を開き、デカルトが延長を以て物の本質とし、意識を以て心の本質とし、此二者は互に獨立して關係するものにあらずと爲したる二元論に反して一元論を唱へ、物心の二者は共に唯一絶

對(神)の屬性に外ならずといひて汎神觀を主張し、人も亦此唯一絶對者の一現象に外ならざれば其一作一動も神の發現にして其以外に動作するの自由を有せずとし、吾人の知識の不完全なるを以て差別相に執着して平等一如の體を觀せざるにありとし、差別見を打破して此一如の本體を靜觀して其本性を全ふすべきを説き、靜觀主義を示しぬ。彼れは此くの如く人を以て本體の一現象とせるが故に其本體に於ては不生不滅なれども、其現象たる個人に於ては生あり滅あるを免れずといひ、身體と精神とは並立するものにて、身體存せざれば精神存する能はず、精神存せざれば身體存する能はず、共にこれ同一本體の兩面たりといひぬ。其説高遠實に近世哲學の一異彩たり。(増補死生觀)

以上吾人の瞥見したるデカルト并にスピノザの學説は近世哲學の一思潮にして名けて唯理派といふもの之れなり、此唯理派に對して經驗派と名くべきものあり、自然科学に於ける實驗の必要を唱道して起ちたるものにして英國のベーコン(Bacon)實に之れが祖なり。ベーコンも亦中世學

術の弊竇を革新せんとし先づ先入主となれる四個の偶像(idea)を打破せんと企てたり。一を劇場の偶像といひ、古來よりの傳説に迷ふて事の真相を誤るを責め、二を市場の偶像といひ、交際場裡に現れたる皮相の智識、主として言語に迷ひ書籍に囚はれて實物を看取する能はざるを詰り、三を洞窟の偶像といひて自己の性癖の爲に独自の偏見に迷ふて他を顧るなく、爲に公正なる觀察を缺くの弊を破らざるべからずとし、四を人類の偶像といひ、人は萬事を觀察するに自己を本位とし終に自然界をも自己の如く目的を有するものゝ如くに感ずるも亦除かざるべからざるの弊竇なりとし觀察と實驗を重んじ自然界の研究を以て哲學の要義とし次でホッブス(Hobbes)出で宇宙現象を以て凡て必然的機械的の制約の下に起りし物體の現象に外ならずとし、ロック(Locke)繼で起り、從來の哲學者が吾人が稟賦の觀念を以て神より受けしものなりとするに反し、吾人の心は白紙の如く全く無一物なりとし、諸種の觀念は日常の經驗によりて書かれたる此紙上の文字なりと説き、吾人の經驗なるものは物自體にわらず

ホッブス  
ロック

して其物に存する性質のみ、物自體に就ては何等のことも云ふ能はされば、吾人は精神の本體の何なるかを知る能はず、又靈魂の如何なるものなるやを斷言し難し、之れ等を以て神に出でたりといふの外、知るべからず、考ふる能はずとしたり、ロックの哲學精通博大なりといへども、經驗に重きを置くの結果、經驗以外に屬する死生の問題に就ては多く語る所なかりしを遺憾とす。

ロックと同時代に出で、唯理的に宇宙を觀察し、ロックと趣を異にする哲學を組織せるものをライブニッツ(Leibnitz)とす。ライブニッツは一面ロックの機械觀に反對すると共に他面に於てはスピノザの汎神觀に反抗して多元説を出し、物理上の原子と異にして毫も廣袤を有せざる精神的原子を以て宇宙の本體とし、之れをモナド(Monad)と呼び、萬物は皆な此モナドの結合によりて大成せられたるものなりと説く、此モナドは圓滿なる大宇宙の鏡ともいふべきものにて凡ての存在を含み、相互に類似せる各モナドは各自其の性を發展して最低度より最高度に向ひ絶えず連續し

ライブニ  
ツツ

て活動するものなれば、一面は相類似すれども其發展の度より見れば二物相同じといふものなし、此相類似相異なるモナドが集合せる中に一のモナドの想念する所、他に比して大に明瞭なる時は、其モナドと他とは其趣を異にし其明瞭なるものは靈魂にして他は相寄りて此靈魂を宿すの身體を成す、此趣を異にせる二方面のモナドの集合を生物と名く、されば靈魂には之を宿す身體の伴はれざるなく、身體を成すモナドの變遷するが如く、靈魂も亦之れに伴ひて變遷し行くものなれば、生といへども、そが初めにあらず、生前より存在したるモナドの生長にして、死といへども、そが終にあらず、其身體を成せるモナドの減退に外ならず、モナドの増減は吾人が生存中に於ても行はれたるものにして、生といひ死といふは其増減の程度の大なるものゝみと。

ライブニッツの死生觀は最も明白なり、彼れは心的多元の説を以て此理を悉さんとしたるなり。ロック以後の經驗學派にはバークレー(Berkeley)一六八五—一七五三あり、世に實在するものは神といふ無限の心と神に

よりて造られたる有限の心とのみ、一切の外界は吾人の感覺に基きて心に思ひ浮ぶる觀念のみ、觀念以外に物なしといふ唯心論を唱へ、次でヒューム(Hume)あり、觀念は一度心に與へられたる印象の再現せられたるものに過ぎざれば心的内容の淵源は印象の外なしと説きてこゝに一段落を告げ、唯理派經驗派の哲學は他面に於て勃興し來れる科學と相合し以て第十八世紀の啓蒙時代に入れり、此時代に於ける死生觀も亦時代の色彩を帯びて寧ろ經驗以外のこととして放抛せられて偶々之れをいふものもあるも信仰的の事は少くして凡て機械的物質的原始的なるものなりき、されば佛蘭西のヴォルテール(Voltaire)は靈魂の不滅を信するは社會一般の安寧の間に必要なりと思考し、ヘルダッシュュアス(Helvetius)は志士仁人が從容死に就くを以て自己が快樂を覺ゆるが爲めなりといひ、ホルバツハ(Holbach)は未來の生命といふ如きは迷妄信すべからざることなるのみならず、又實に現世の生活上有害なるものと云はざるべからずといひ、ディデロー(Diderot)は物質既に不滅なり、されば生命及び精神も不滅なるべし



ボネの  
細身説

と考へ、死生の觀察に就ては精緻なるものを見ず、僅にシャルル、ボネ(Charle Bonnet)あり、吾人の身體と精神とを分離すべからざるものと説き、身體なき精神なく、精神なき身體なし、此二者は結合して存在するものなれば、吾人の死後といへども此二者の分離することなし、然るに吾人の身體には現在見る如き複雑なるもの、外に細密にして精微なるエーテル質の身體あるべし、此靈身は死と共に潰敗するものなるも、此細身のみは靈魂に付き纏ひて離るゝことなし、此細身あるを以ての故には現世に於ては諸種の経験を記憶に存して忘ることなく、來世に於ては更に身體を造るの種子となる、と説くの一異彩を放てるあるのみ。

### (六) カント及び其以後の概観

近世哲學の潮流は自ら二個の方向に走り、一はデカルト以後スピノザ、ライブニッツを経て進める唯理派にして他はベーコン以後ロツク、バアクレー、ヒュームに進める經驗派なり、一は獨斷の弊に陥り易く、他は

カント

懷疑の巷にさまよふ、此二大系統を打して一九として近世哲學に一生面を開けるものをイムマヌエル、カント(Immanuel Kant)とす、カントは一千七百二十四年を以て獨逸に生る、家頗る貧にして學費に乏しかりしかども、苦學の志深く、一千七百四十年、其生地なるケニヒスベルヒの大學に入り、半ば自ら給して哲學數學神學等を學び、卒業後、二三富豪の教師となり、一千七百五十五年の冬より生地の大に教鞭を執り、孜々倦むことなくして研鑽に心を盡くし、生涯獨身を以て一千七百九十六年老衰を以て其職を辭し一千八百〇四年を以て逝きぬ。性頗る温厚にして信義を重んじ頗る君子人の風ありしといふ。

カントの哲學は幽玄高妙、直に智識其者の成立に入りて吾人經驗の起源を論明し、吾人の智識あるものは形式(Form)と素材(Stoff)との二要素より成立し、其形式は元來心性に具有する先天性のものにして、其素材は經驗によりて與へられたる後天性のものなり、此經驗によりて與へられたる素材に秩序を與へ統一を與へて真正の知識となすものは先天性の形

式によるとし、純粹理性批判に於ては經驗によりて與へられ、之れを統一し綜合して下したる自然科学に於ける幾多の法則を認容したるが故に、彼の靈魂并に未來の問題に關しては其存在を断定し難しとし、靈魂の存在する如く思ふは吾人の意識に統一作用あるが故に外ならざれど、其者を以て直に實體ありと斷すべからず、さればとて又無しとも斷すべからず、全く經驗を超越し、知識の達する能はざる問題とせり。彼は斯く這般の問題を認識以外に放抛したりといへども、其實踐理性批判に於て、此に新しき説明法を取りたり。

カントは知的理性の外に行的理性を説き、吾人が意志には先天的に具はれる法則ありとし、此世界及び此世界以外に於ても何等の制限を付することなくして善と呼び得べきものあるを考ふる能はず唯だそれあるは善意のみ。と云ひ又、

我が行爲が同時に萬人普通の行爲の法則たり得る如くに行ふべし。

と教へて其必然的普遍的なる法則を心内に求めて無上大法 (Der Kategorische Imperative) と云ひ此先天内容の理性の聲によりて吾人の行爲をして道德に背くなからしめざるべからず、されど吾人には理性の外に情欲の如き感性ありて常に之れに背馳せんとす、この背馳を防ぎて全く道德法の外に出でざる境涯に至るは吾人の理想なれども、現世に於ては到底其域に達する能はず、殊に此道德に進みつゝあるもの、空しく志を齎らして夭折せんか其志望は無意義に了らざるべからず、かくの如く現世に於て充實する能はずとせば此道德上の要求は無意義のものたらざるべからず、吾人は現世を以て萬事休するものとせずして來世に於ても其修練を繼續し得らるゝものと思惟せずんば道德其者の根底を失ふべしとし、こゝに知る、理性に於て證明し得べからずといたる未來の存在をも道德上の要求として肯定するに至れるを、

カントの哲學幽に入り支を闢く、如上の所説を以て之を知ることを頗る難かるべければ左にタムソンが「死後生活の證明」の一書に引用せるカント

の未來觀を抄出して、更に其弊癘を窺はしめん。肉體の死は吾人心意の感覺的使用の終局ならんかなれども、然も其の智力的使用は實に肉體死滅の時を以て始源となすべきなり。肉體は肉慾及び物質的知覺には缺くべからざる要素なりと雖ども、決して吾人が思索の原因に非ざるのみか、之を制限するの狀態にあり、時としては純粹なる精神的生命の障礙とも名くるを得べし。予は之を、何れの日、何れの處に起る可きかは明言するを得ざれども、思ふに、未來世に於て、人間の靈魂は、地上の生命に反し、他世界の生命ある者と不斷の交渉をなし、人間の靈魂其生物に働くと共に、普通の人格的自覺を有せざる這回生物の印象をば又己に受くるの日あるべきは、之を證するを得べし。

現世の事物、未來世に於ける事物の狀態境遇の如くに變じ、而して其推論、唯、論理的に排列せらるゝに止まらずして、眞實普通の認識事物に由りて設立せられたらんには、甚だ慶賀祝福するに値ひす。

哲學は、種々の愚かしき疑問を検して、之と調和することを辭せず。其進路に當りて偶然に邂逅せし某事象を疑ふものには非ざれども、尙世の漫罵を憚かり、其事象を信するを取てせず。約言すれば、これあるが爲に哲學は事物を輕信するの譏を免れ、世俗的迷信に關係ありと云へる疑を蒙らざるあり。學者の特權をのみ主張する自稱識者は、何事にても學識者の解釋し得る事物は無學無識の者にも解決し得べきものとし、同一標準の上より之を嘲罵す。靈魂譚が、秘密の間にては常に語り傳へられ信せらるるに反し公然の間には無殘と唾棄せらるゝ所以のもの即ちこれなり。科學を専攻する各大學に於て、此種の問題を研究の對象とせざる所以は、其科の學者が、既に十分の討究を爲して、其無價値、虚偽なるを知悉し盡せるが故には非ずして、所謂、其分科の規定として、かゝる疑問の討究を制限しおるが爲に非ずや。秘かに靈魂譚を信する者も公然には一の形式的疑惑を以て之に對す。予が見解に由れば、予は人間の靈魂が現世に來去するの道をも知らざ

れども、然も世上に流布する、這箇の説話に全く眞理なしと斷言する者に非ず。時としては甚だ奇怪の事多く、其委曲は疑はしきものあれども、尙大部分の上に於ては之を信するものなりとす。

カントは實に近世哲學に一區劃を與へし精通博大のものなりしと雖も、尙ほ幾多の缺陷あり不備あるを免れざりし、其死生觀に於ても知的理性に於て示さるゝ所と行的理性に於て示さるゝ所とは何故に斯く相反せるかは未だ分明なりと云ふ可らず、是等の不備缺陷を補はんとして終に特殊の立脚地を開けるものをフイヒテ(Fichte)一七六二—一八一四の哲學とす。彼れはカントが自然界に於ける法則は畢竟他より我に與へられたるものにあらずして我が心に於て造り上げたるものなりとなせるに出發して一切外界は我を離れて存在するものにあらず、されど此我なるものは個人的具體的の我にあらずして萬人に普汎なる超個人的絕對我に外ならず、此絕對我こそ理性といふべきものにして、こは靜止せるものにあらずして一の活動なり、此活動あつて萬物皆な我より生ずと見たるが故に彼れ

フイヒテ

グシエリン

が此絕對我に於て不生不滅を言ひ得たるなり、フイヒテより出で、別に新見地を出せるものをシエリング(Schelling)一七七五—一八五四とす、シエリングの哲學は種々の時期を経て變遷せり、最初はフイヒテと同見地に立ちしが、後にはフイヒテが萬物の根本を我に求めたるに反して之れを自然に求め、自然の精粹を集めて出でたるものを精神なりとしたりしが、更に進んで精神と物質とは全く同一不二なることを説き、最後には神秘説となりて神なるものゝ中に凡ての存在は含まれたりといふに至れり、此シエリングと同時に出で、哲學の大組織をなせるものをヘーゲルとす、ヘーゲル以後の哲學に就ては結論第一章に於て紹介すべきを以て、こゝに本論第一篇の筆を擱き、眼を轉じて東洋諸邦に於ける死生觀を一瞥せんとす。

## 第貳篇 東洋に於ける死生観の變遷

## 第一章 印度の死生観

## (一) 印度古代の死生観

死生は人生の一大事實なれば世界各國孰れの國民といへども、之れに向つて多大の注意を拂はざるはなけれど、其最も精細なる考察を凝らせるものを印度國民に過ぎたるはなし、三大宗教は此に爛熳の花を開き、六派哲學は各々陸離たる光彩を放ち、紀元前二千年の昔に於て早くも五河地方に於て文明の萌芽を發き世界最古の經典と稱せらるゝ韋陀 (Veda) を有す、韋陀に四あり、其最も古きものを理具韋陀といひ、諸神讚嘆の歌詩を集む、二をヤジュールといひ、主として供饗に關するもの、三をサーマといひ神酒供養に關するもの、四をアタルバといひ最も新しきものとす、印度人は其最古の理具を以て無始以來のもの又は少くとも紀元

韋陀

死生観

前五千年のものなりと信すれども、歐洲の學者は諸種の材料によりて紀元前千四百年頃に成れるならんと推論せり、いづれにするも最古のものたるや疑を容れず、吾人はこれら韋陀の傳ふる所によりて印度古代民族の死生に關する觀察を窺ふことを得べし、韋陀の傳ふる所によれば印度人は他の原始民族と同じく自然の物象を崇拜し、天には光神ツヤラス、天神グルナ、日神ヴィシユヌ等あり、中空には雨神インドラ、風雨神マルツ等あり、下界には火神アグニ酒神ソマ、地神ブリチギー等ありとし、死に關してはヤマ (Yama) なる神ありとす、初めは没日の義なりしが、日の没するは人の死に比すべきこと以て終に死後と關聯せしめ、死後の世界を支配する神として立るに至りぬ、此ヤマ (通常夜摩又焰魔と書す) は往古未だ悲哀病苦なき世に於て人中の王者たりしが罪病漸く繁くして死を伴ひ來るに及び、老いたるヤマは先づ其從者と共に此世を退きて他界に逝き、こゝに無窮の壽命を得て死者を治むるの王者たるに至れり、王の初めて此道を發見するや、他をも亦導くの案内者なかるべからずとて四

眼廣鼻にして奇臭を帯びたる二匹の狗を人界に遣はし死人の此道を行く者を守護嚮導せしむと傳ふ。

さばれ、此時代の印度人は他の民族の如く死を以て恐るべき者とせずして却て祖先と共に楽しく暮し得べき者と考へ其死屍に對して謳ふ歌にも行け、行け、我等が古の祖先が歩みし古の路を、彼處には供物にて觀樂せる二人の王夜摩と婆樓那を見ん、最高の天上にて祖先と共に居れ、夜摩と共に居れ、汝が供したる供物と共に居れ、總て世の恥と惡とを蟬脱して汝の家郷に還れ、身體を得て(彼世へ)輝ける衣を着けよ(印度宗の教史)とありて頗る樂天的に之れを思考し、葬儀としては主として火葬を用ひ、火神アグニの靈化によりて身體の汚穢より心靈を分離せしめて祖先の居る所に赴かしむるものとし、眼は日に、呼吸は風に、四肢は土水草木に行くべきものと信じたりしが如し。

死後の觀念

ナチケタスの神話

來れるに従ひ、宗教其他の儀式も、哲學上の思索も發達し來りて、曾ては單純に想ひたりし來世のことも、今は多少の恐怖之れに伴ひ、終に後世に大發達を遂ぐべき生死輪廻の思想を胚胎し、來世の運命は現世の行為に於て定るものとし、韋陀の哲學的方面を思索したる奧義書即ちウパニシャッド(Upanishads)に於ては精緻なる考察行はれて生死解脱の方法をも究むるに至れり、ヤジニール韋陀の奧義書たるブリハダーランヤカには一段の神話を陳べていふ、

勇猛精進にして敬虔の念に富めるナチケタス、死神ヤマに祈りて、

我、人の死に就きて疑あり、或は彼ありといひ、或は彼なしといふ、吾、今、汝の答を聞かん。

と、死神此秘密を語るを欲せざるも、彼れの篤信を嘉して、

吾は汝の欲する凡ての事を成就せしめん、金銀財寶を請へ、吾は之れを與へん、全世界に王たらんを願へ、吾、汝をして之れを遂げしめん、人界に於て得難き何物にても求めよ、吾は汝の爲めに之れを

得させん、美人麗姫も求むるまゝよ、されど、死に闘しては問ふことを止めよ。

と、ナチケタスは断然之れを斥けていふ、

是等のものには唯だ五根の力を損するのみ、諸行は無常なり、人命は過ぎ易し、我はこれらのものを欲せず。

と、死神大に感じて終に其秘密を語り智によりて梵を知り以て不死を獲べきをいひぬ。

梵(Brahman)は宇宙開發の根源にして世界は之れより分れ出でたり、分れ出でたる世界は差別の世界なり害悪の世界なり苦痛の世界なり虚妄の世界なり、されど吾人の精神の中にも宇宙の根源たりし最上精神(梵)の伏在するあり只差別の迷想之れを蠢感したるのみ、此迷想を去りて梵と一致する時、こゝに不死を得べしとするはウパニシャッドの哲學的考察なり。此哲學的考察に基礎を置きて宗教的に印度國民に教化を與へんとしたるものを波羅門教とす、波羅門教は印度國民の中に自然に發達したる宗

波羅門教

教思想なりといへども、其一種の宗教としての成形を有するに至れるはマヌ(manu)法典成立の時代なりとす、此法典は紀元前四五百年代に於て完成せるものにして在來の習慣によりて社會秩序の保持を計りたるものにして名は法典なりといへども、實は宗教道徳政治法律に亘るの規則なり、之れより先き印度には四性の別成立して、其最も高貴なるものを僧侶即ち波羅門族(Brahmana)とし、次ぎに位するものは政治上の實權者にして兼て武士たる刹帝利族(Kshatriya)とし一般人民即ち農工商に従事するものを毘舍族(Vaisya)とし、劣等民族を首陀羅(Sudra)と呼び、前三者は宗教によりて死後第二の生を得べけれど、首陀羅族に至りては之れあることなしとし、中にも波羅門族は神の口より生れ出でたる最も尊貴のものにして現世に於ける神の代理者なるとして他の種族を壓して頗る威權を擅にせり、法典の成立と共に此權威は確認せられ、波羅門の宗教は益々其力を振ふに至れり、さて此波羅門教の成形するに及びて、嘗て其萌芽を出せし生死輪廻の思想は漸く其花を開くに至り法典には、

生死輪廻

身口意より起る業は其善惡の果を生ず、人に上中下の區別あるは行爲の結果なり。

とありて現世に於ける四性の區別も亦過去に於ける行爲の應報にして、人の精神に喜、憂、闇の三徳あり、此三徳に應じて未來の果を引き、喜を有するものは天に達し、憂を有するものは人、闇を有するものは永く畜生に沈むとし且つ意業は之れを意に受け、口業は之れを口に受け、身業は之れを身に受けざるべからずとせるが故に、死後も亦其果を受けんが爲めに其身體を生せざるべからず、かくて生ずるが故に死し、死するが故に生じ、輪廻生死盡くることなしとし、其輪廻の範圍は上は梵天より下は昆虫に及べり、今姉崎氏著印度宗教史の圖表する所によれば、

- 上 梵天、造化神、自在天等
- 高等—神位 中 聖人、諸天、信者等
- (喜徳)
- 下 仙人、波羅門等

輪廻の範圍

上 健陀婆、天女等

中等—人位 中 王者、刹帝利等

(憂徳)

下 從者、博徒、競争者等

上 俳優、巨鳥、羅刹等

下等 中 象、首陀羅、虎、猪等

(闇徳)

下 無生物、魚、蛇、昆虫等

尙ほ此外に死神ヤマの下に地獄(Naraka)なるものありて罪の輕重に由りて其場所も亦異り、マヌ法典に數ふる所廿一ありといふ、かくの如く生死輪廻の思想は一面に刑罰的性質を帯びて凡俗教化に偉大の力を有するに至れり。

是等の宗教的教化と相對して起れる印度哲學は同じく根底をウパニシヤツドに置き皆な精到なる考察に入り派を樹て流を分ち佛典に算する所によれば其數九十五に達し、中には、順世外道と目せらるゝものゝ如き

順世外道



は世界は吾人の知覺し得べき地水火風の四大の外一物あることなし、といふ物質主義現世主義を執り未來の存在を否定して現世の快樂を目的とし全然波羅門教に反對したるものありしといへども多くは生死輪廻の説を採用したり。

## (二) 勝數二論の死生觀

ウパニシャットの考察を根底として異を樹て派を分つ印度哲學其數最も多しと雖も、其主要なるものを擧ぐれば彌曼沙派(Mīmāṃsā)章陀論派(Nyāya)因明論派(Nyāya)勝論派(Vaiśeṣika)數論派(Sāṃkhya)瑜珈派(Yoga)の六大哲學に歸す、第一の彌曼沙派と第二の章陀論派とは共に章陀の教説を正統に繼承したりと目せらるゝものにして、ミーマンサーは思惟の義、蓋し章陀の教義を思惟するを以てかく名けられたるならんか、此派は章陀の眞理は口より口に傳誦せられたるものなれば聲は常住不滅なり、聲は神聖なりと執する者にして佛典の謂ふ所の聲論外道これなり。章陀論派は

六大哲學

ウパニシャットの精粹を發揮したるものにして、宇宙精神たる梵の外には一つの實在あるとなしといひて同じく章陀の經典に其根底を有せりと雖も、前者は主として實際上の儀式を正統に解釋するを目的とするものにしてジャイミニを開祖とし後者は哲學的思想を繼承し之れを正統に解するを目的とするものにしてバーダラーヤナを開祖とす。彌曼沙即ち聲論外道が聲は常住なりといふに對して聲は無常なりと唱道して推理の方式を以て分析的に研究せんとしたるものを因明派即ち尼夜耶哲學と稱す、是等は生死の問題に關してはウパニシャットを繼承したるが故にこゝに解説するの要なしといへども、此因明派に對して其論理の大本に入り大に世界を説明せんとしたる勝論、并に他の方面より宇宙の開發人生の歸趣を論明せんとしたる數論の二派は其生死の觀察に於て少しく趣を異にするものあり。

勝論派即ち吠世史迦哲學は加那陀の創唱したる所にして宇宙を分析して六句とし、第一を實句といふ、實とは事情境遇に變化せらるゝことな

勝論の六句義

くして一切物の主となるとなすものにして、之を九に分ちて、  
地、水、火、風、空、時、方、我、意、

とす、此實體の事情を造る所のものを第二の徳句とし、之を十七に分つ、  
色、味、香、觸、數、量、別性、合性、離性、彼性、此性、覺、樂、  
苦、欲、瞋、勤、

此實體を動かすものを第三の業句とし、之れに五あり、

取、捨、屈、伸、行、

これなりと、宇宙の本體、これ實、其本體の具有する性質現象これ徳、  
其作用動作これ業、此の三、和合して存在し萬法一有となるを第四の大  
有性といひ、萬法各其特性を有して個々別々なるを第五の同異性といひ、  
此個々別々のもの相互に離すべからざる關係を有するを第六の和合性と  
いふ、前の三は共に存在して因果に支配せられ、後の三は此因果により  
て前の三を支配する主義にして常住不滅の物體なれど前の實句の中には  
空、時、方、我、意の五のみは常住不滅なるも、地水火風の四は其一部

有細分と  
無細分と

分は變易無常のものたるを免れず。蓋し空は虚空即ち空間、時は即ち時  
間にして共に無限、方も亦た空間中に東西南北の方位を示す因となるの  
みにして動作なく、眞に萬物活動の實體となるべきものは地水火風ある  
のみ、此地水火風に各有細分と無細分との二種あり、無細分とは細分す  
べからざる根底の原子にして之れを父母微といひ、此父母微合して子微  
となり子微合して孫微となるに至ては之れを有細分といひ、此有細分は  
生滅無常なるも、無細分は常住不滅なりと説く、而して我を以て形體な  
くして宇宙に遍滿せる實在物とし、意を以て寧ろ物質的のものとし其形  
芥子粒の如く二個の極微を合したる程の大きさにして我等が肉身中に宿  
り我に使はれて覺、樂、苦、欲、瞋、勤、勇等の作用を現するものとし  
て我の常住不變なるが如く之に従ふ意も亦肉身の死滅に關するとなし我  
と共に不滅なりと説くものにして奇態なる靈魂不滅論なり。(此派の哲學  
は後に惠月論師更に四句を加へて十句とし勝宗十句義論なるものあり)

數論派即ち僧伽哲學は加毘羅の唱出する所にしてウパニシャッドの哲

學にては宇宙の實在は平等唯一の梵なりとしたりしが、僧法哲學は更に一步を進めて如何にして其平等唯一なる梵より萬象差別の狀を出せしかを説明するものにして、此現象世界を開發する根元を以て精神的なる神我と物質的なる自性との二を立て自性の水、神我の風に動かされて二十三諦の波浪を生ずと説く、自性を第一とし神我を第二十五に置きて萬象の開發を見る、其順序は金七十論に、

自性より大を生じ、大より我慢を生じ、我より五唯を生じ、五唯より十六見を生ず。

とある如く、自性動いて第二の大を生ず、大は又覺若くは想と名く、唯識述記には自性相増すが故に大と名くとあり、これより我慢即ち我執を生ず、既に我あり、色、聲、香、味、觸なかるべからず、之れを五唯といふ、此五唯によりて五大、五知根、五作根、心平等根の十六見を生ず、五大とは地、水、火、風、空にして五知根とは眼、耳、鼻、舌、身、即ち色唯は火大を生じ、火大は眼根を成し、聲唯は空大を生じ、空大は耳

根を成し、香唯は地大を生じ、地大は鼻根を成し、味唯は水大を生じ、水大は舌根を成し、觸唯は風大を生じ、風大は身根を成す、五作根とは言語の作用としての舌、執持の作用なる手、歩行の作用たる足、戲樂の用たる男女根、除棄の用たる大遺根にして、心平等根は通常いふ所の心の義なり。

數論は自性と神我との二元を立て此二者の纏綿によりて中間の二十三諦を生ずるも、若し神我をして自性の束縛を免れしむるの修行を積みなば死後に於て生得定の非想非と想處天に入ると教え、此神我は以て永劫不滅のものとして説くと共に、吾人の肉體も亦現に見らるべき龜身の外に細身の存在して輪廻轉生すべきをいふ、細身とは心的知覺なる大と心的執着なる我慢と、色、聲、香、味、觸の五唯より成るものにして其體極めて微細にして見る能はざれど手足顔面腹背等の形に具はりて生死に關せず存續して、父母より受けたる龜身は死時腐敗したるも此細身は死後、現在の果を受けて、苦樂の境に轉生す、金七十論に曰く、

細身轉生

若し龜身退没する時、細身若し非法(惡)と相應すれば則ち四生を受く、一に四足、二に有翅、三に胸行、四に傍形、若し法善と相應すれば則ち四生を受く、一に梵、二に天、三に世主、四に人道なり。

と、これを僧法哲學の輪廻轉生の觀察とす。

瑜珈派は六派哲學中、最も後代に發達せしものにして佛教以後に於て完成したるものたり、開祖をバタンジャリといひ、靜思冥想を以て神と冥合するを以て目的とし、其行法に於ては諸種の儀式作法ありといへども、死生觀に於ては僧法哲學等と異なるものなきが如し。

以上に於て大略印度哲學の死生觀を觀察し了れり、これらの印度哲學を大成し死生問題に向て別に新見地を立るものを釋尊によりて唱道せられたる佛教なりとす。

### (三) 釋尊の死生觀

筆路は今や曠世の大聖釋迦牟尼が死生に關する思索を窺ふべきの時と

出家

はなれり。釋迦は管に印度に於ける諸哲學を綜合して新に死生解脱の大道を説きしのみならず、其教義は古今東西を通じ、萬人の渴仰措く能はざるの感想たり。釋迦は種族の名、牟尼は智者の義、釋迦種族中の智者たるを意味する尊稱にして實の名は薩婆悉多(Sarvathasiddha)西曆紀元前五百六十三年、中印度カピラハスト王ストダナの太子と生れ、母は摩耶、幼にして聰慧、父王之を愛すると甚しく三時の宮殿を築きて飾るに金剛、瑠璃、瑪瑙、大理を以てし庭には美花の芳香を送るあり室には花の如き宮女歌舞音樂を奏し歡樂の極を盡さしめ、年十七、印度隨一の美人と呼ばれたる耶輸陀羅姫を納れて王妃とし殆んど地上の天國の如き生活を營ましめしも、太子は獨り心を死生の問題に走せ、生老病死の世態を感じては出家求道の心止め難く、終に廿九歳十二月八日の夜(月日に就て異説あり)更闌け人定まるの時、飄然、城を出で、深林の中に入り、跋迦仙人を訪ひ、去て阿羅邏加蘭仙人を訪はんとて途、摩訶陀國の王舍城を過ぐ、國王ピンピサーラ、太子に謁して親しく出家の因を問ひ、若しカピラハ

スト、國小にして止るに足らずとしたまは、吾は我が摩訶陀羅國を擧げてこれを獻せんといひしかど、太子は、  
 我、が、志、は、生、老、病、死、の、四、苦、を、斷、じ、て、無、上、解、脫、を、得、る、に、あ、り、  
 豈、に、世、間、の、五、欲、を、得、ん、が、爲、に、家、を、出、で、ん、や。

といひて當時數論派の二大哲學者たる訶羅邏加蘭并に憍陀羅摩を訪はれしも皆な以て太子を服せしむるに足らず、こゝに於て無上菩提の道は他によりて求むべからず、唯だ自ら修して之れを證せんと、尼連禪河の西岸なる優婁頻羅といへる所の深林に入りて日に一麻一米を食し、専ら苦行を修し靜思を凝らすこと六年、顔色焦瘠、形容枯槁、終に昏迷して地に倒るゝに至る、時に太子思へらく、「道は慧解によりて成じ、慧解は根によりて成じ、根は飲食によりて補はる、食を斷つは道を得るの因にあらず」と、起て尼連禪河に浴し、牧女難陀に乳糜の供養を受け、體力復して後、佛陀伽耶に赴き、菩提樹の下なる金剛座上淨く軟き草を敷きて、結跏趺座し「我一切種智を得ずんば此座を去らじ」と端座默念し、力を盡く

修 道

諸行無常

して妄念妄想と争ひ、終に十二月八日の拂曉、蓮華の花の開くが如く無上眞理を覺得して、に正覺を成せしより爾來横説堅説五十年、諸行無常を説て死生の問題に無頓着なる人々に警告し、

死生、衆生を呑み、衰老、少年を飲み、病至り強健を滅す、世間知るものなし(正法念所經)。

常なるものは必ず盡き、高きものは皆な墮ち、合ふものは離れ、生るるものは死あり(法句經)。

水流るれば常に滿たず、火盛なれば久しく燃えず、日出で、須臾にしなく没し、月滿ちて已にして復た缺く、尊榮榮貴の常なきは復た之れに過ぐるものあり。(罪業報應經)。

人身の念々死に近づく事、猪羊を率ひて屠所に詣るが如し(同上)。

といひ、他の印度哲學并に波羅門教徒の立る所の「我」の存在を否定して諸法無我を説き、諸行既に無常にして變遷止るなくんば此「我」と目するものの肉體も精神も共に變遷極りなきものにして別に常一主宰の我なるもの

のあるべき理由なし、其目して我といふは五蘊の假和合のみ、五蘊とは肉體たる色(これは地、水、火、風の四)と感覺する所の受、思念する所の想、造作する所の行、了別する所の識の積集を指すものにして之れを離れて別に我あるとなし、然るに「我」といふ常一主宰のものありと執するを即蘊、我の見といひ、此身心を離れて別に常一主宰の我體ありと執するを離蘊我の見といひ共に迷妄の觀察たりとす、此點に於て佛教は無神無靈魂に類するが如きも佛教は我に代ふるに羯磨(Karma)即ち業の相續を以て輪廻の主體とし、我が今日此の如きの苦を受くるは前世の業因にして、前世に於て何が故に、かゝる業因を作りしかといふに、そは眞理を看破し得ざる無明(即ち惑)の所爲とし、此惑によりて業を作り業によりて苦を招き輪轉止るなきは吾人の常態なり、されば此無明の根本を斷じて造業の源を絶たば生死の苦を離れたる涅槃寂靜の境に入るべしとて四諦十二因縁の法を以て生死問題を解決するは釋迦の教旨なり。増一阿念經にいふ、

死生の解

佛、舍衛國の祇樹孤獨園に在し時、諸の比丘に告げたまはく、今當に

生死因縁の法を説くべし、善く之を思念し其行を修習せよ、比丘等、佛に白して言く、唯、世尊、謹んで教を受けん、佛告げたまはく、謂ゆる因縁の法とは無明は行を縁じ、行は識を縁じ、識は名色を縁じ、名色は六處を縁じ、六處は觸を縁じ、觸は受を縁じ、受は愛を縁じ、愛は取を縁じ、取は有を縁じ、有は生を縁じ、生は老病死を縁じ、(以上十二因縁)憂ひ悲み苦み惱むと計るべからず、是の如くにして此五陰(蘊)の身を成するなり、何者をか名けて無明と爲す、苦を知らず、集を知らず、滅を知らず、道を知らず(苦集滅道を)之を無明と名く、何者をか名けて行と爲す、身と口と意との三種の行爲之を行と名く、何者をか名けて識と爲す、眼耳鼻舌身意の六識を識と名く、何者か名けて名色と爲す、思想にて名を分別するを名と爲し、四大の如き名を付せらるゝものを色と爲す名と色と各異なるが故に名色といふ、何者をか名けて六處と爲す、眼耳鼻舌身意の六根は識の入る所なるが故に六處と名く、何者をか名けて觸と爲す、識は根によりて境を觸知す此三和合

するを觸と名く、何者をか名けて受と爲す、境に對して苦痛と悅樂とを感ずるを受と爲す、何者をか名けて愛と爲す、欲愛、有愛、無愛の三を起して身を受着するを愛と名く、何者をか名けて取と爲す、深く愛着して堅く取りて放れざるを取と名く、何者をか名けて有と爲す、欲界の生、色界の生、無色界の生を受くるを有と名く、何者をか名けて生と爲す、業の報を感じて五陰蘊の身を生ずるを生と名く、何者をか名けて老と爲す、衆生の身、齒落ち髮白く、氣力劣り、壽命日に衰ふ、之を老と名く、何者をか名けて死と爲す、一切衆生變易常なく五親相分れ五陰蘊の身命斷滅す、之を死と名く、比丘當に知るべし、之を生死因縁の法と名くるこ

四諦十二因縁のとに關してに更に詳説を要すべきことあれば、そは次節に譲りてこゝには楞伽王の間に對する釋迦の答辯を以て死後の状態に對する一斑を窺はしむるに止めん。

死後の觀

楞伽王、佛に問ふて曰く、世尊、衆生死して未だ生せざる間、識は何

處にありや、佛言く、王よ、種子の芽を生ずるに種子先に滅して後に芽生ずとせんや。芽生じて後に種子滅すとせんや、種子滅する時に芽生ずとせんや、楞伽王曰く種子滅する時即ち芽を生ず、佛言く生滅時を同ふして前後あることなし。即ち前識の滅せる時後識生ず。

と、佛教は常一主宰の「我」の存在を否定して前後相續の不斷に行はるゝを説く。

釋尊の説法八萬四千と稱し機に應じ時に隨ひ一意衆生濟度を旨とし其説く所千差萬別なりと雖、要するに諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜は其網格にして四諦十二因縁は死生觀の根底なり。後代諸種の佛教學説は皆な萌芽を之に發して爛熳の美を極む。

かくて釋尊は成道第四十五年病軀を以て拘尸那揭羅城の附近なる娑羅双樹の下に來り、頭を北にし面を西にし、右脇を下にし、兩足を伸べて安臥したまふ、從者阿難號泣していふ、

嗚乎世尊、涅槃したまは、我に師なし、我れ誰れに從てか道果を得

入觀

べき。

と、世尊、懇ろに慰めて曰く、

汝、憂ふること勿れ、我、常に汝等に告ぐ、諸法は無常なり、會ふ者は定んで離る、過去の佛の金剛身といへども、亦無常の爲めに變遷したまへり、我豈に之れに異なることを得んや。阿難よ、汝は佛に親近し供養し奉れり、此功徳を以て必らず大果を成せん。

と、時に拘尸那揭羅城に波羅門須跋陀羅なるものあり、齡百二十歳、佛の入滅したまはんとするを聞き、阿難に請ふて、

佛將に涅槃したまはんとすと聞く、我れに疑あり、願くは之を問はせたまへ。

と、阿難いふ、

佛將に涅槃に入りたまはんとす、乞ふ擾亂すること勿れ。

と、須跋陀羅、強いて曰く、

佛世遇ひ難し、正法聞き難し、我れに深疑あり、恐くは佛を擾すこと

なからん、願くは之れを許したまへ。

と、佛之を聞て彼を招ぎ、瀕死の病床に諒々法を説て彼が疑を解き、徐ろに阿難に告げたまはく、

汝等、我が滅後に於て師なしとて憂ふる勿れ、當に波羅提木叉佛の示されたる戒法を尊奉すべし、これ則ち汝等が大師なり。

と遺弟に對して其師とすべき教法を告げ、且つ、

汝等、法に於て疑わらば、今茲に之れを聞き後に悔を殘すことなかれ。といひ、最後に

汝等比丘、常に一心に出道を勤求すべし、一切世間動不動の法は皆な是れ敗壞不安の相なり、汝等且つ諸ることを止めよ、時將に過んとす、我滅度せんとす、是れ我が最後の教誨とする所なり。

と、語り終りて寂然として逝きたまひぬ。時にこれ西曆紀元前四百七十九年二月十五日の夜半なりき。其深幽大なる佛教の教理は此教主釋尊の人格によつて顯示せられ永く其教化を人類に垂れて死生透脱の大道を示



しぬ。

(四) 原始佛教の死生觀

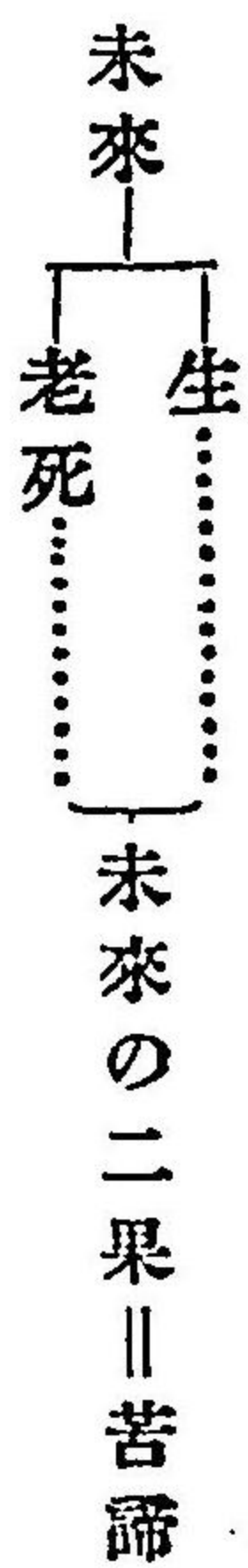
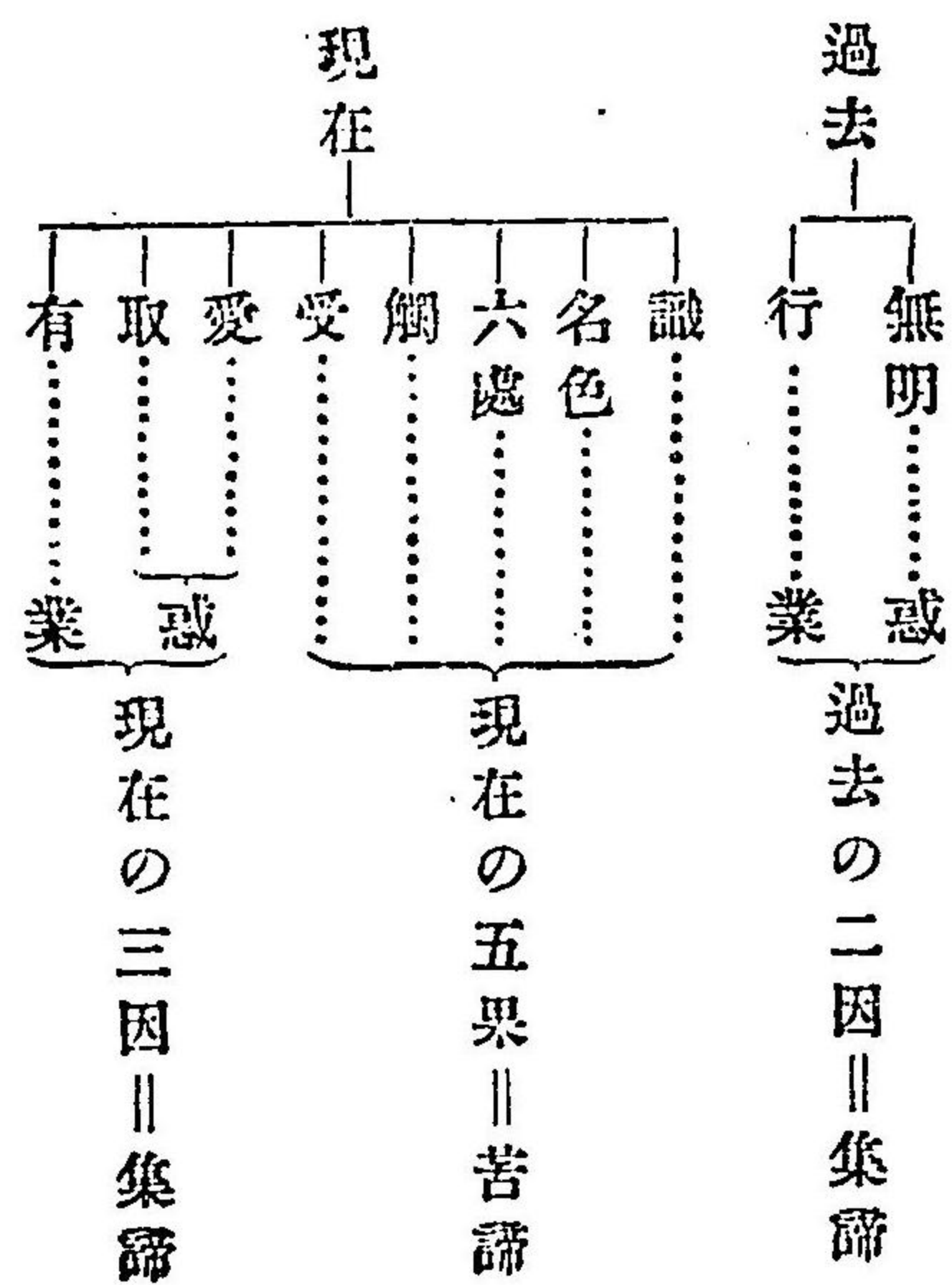
應病與藥、隨機說法の釋尊の教旨は滅後各其聽く所によりて派を分ち、等しく無我を認むるといへども、別に不可説的なる非即非離蘊我なるものあり無常にあらざれども無爲にあらす、常住にあらざれども有爲にあらすと説く賴子部の如きあり。五蘊を分ちて根邊の蘊と一味の蘊とし、一味の蘊は五蘊の中色蘊を除きたる細意識にしてこは能く前世より後世に至るべきも、細意識より後に生じたる五蘊(即ち根邊の五蘊)は死と共に滅すべきものなりと説く經量部の如きありて一樣に觀察し難しと雖、吾人が最も釋尊の教示を正統に傳へたるものとして見るべきは小乘有部に於ける死生觀にして世親菩薩の俱舍論によりて代表せらるゝものとす。

四者

- 一 本有 生より死に至る
- 二 死有 將に死せんとする一刹那
- 三 中有 死して未だ生れざる間
- 四 生有 將に生れんとする一刹那

とす、我が身は本五蘊の假和合、生より死に至るまで幾變遷を經、而して將に死せんとする一刹那、之を斷末魔といふ、末魔は梵語にして人身中にある一異支節なり、之れを斷ずるの際大苦痛を受けて死に至るといふ、死して未だ生れざる其間を中有といひ、別個の五蘊あり、されば微細にして見るべからず、香を以て名とす、其間四十九日かくて業力に従ひて母胎に宿る、これを羯羅藍(凝骨)といふ、それより額部(譯して陀といふ)を生じ、次に閉戸(軟肉)を生じ、次に健南(堅肉)を生じ、最後に鉢羅奢法(支節)を生じ、形體具はつて終に母胎を出づ、之れを十二因縁を以て解決せんか、無明は惑なり、行は業なり、即ち惑業を因として胎内に夜るの最初を識といひ、其未だ形體を完備せざる間を名色といひ、已に形體の備はれるを六處といふ(眼耳鼻舌身意)十月満ちて外界に觸るゝを觸

といふ、未だ愛欲の心なく、只外界の苦樂と辨知するのみを受といふ、これに就て愛欲の念を生せしを愛といふ、此愛と遂げんとするを取といふ、已に愛と取とあり、其結果を免るゝ能はず、之れを有といふ、かくの如き惑(愛取業有)によつて生れ、老死の苦を受て過去より現在、現在より未來に亘りて輾轉盡くることなし。之れを圖に示せば、

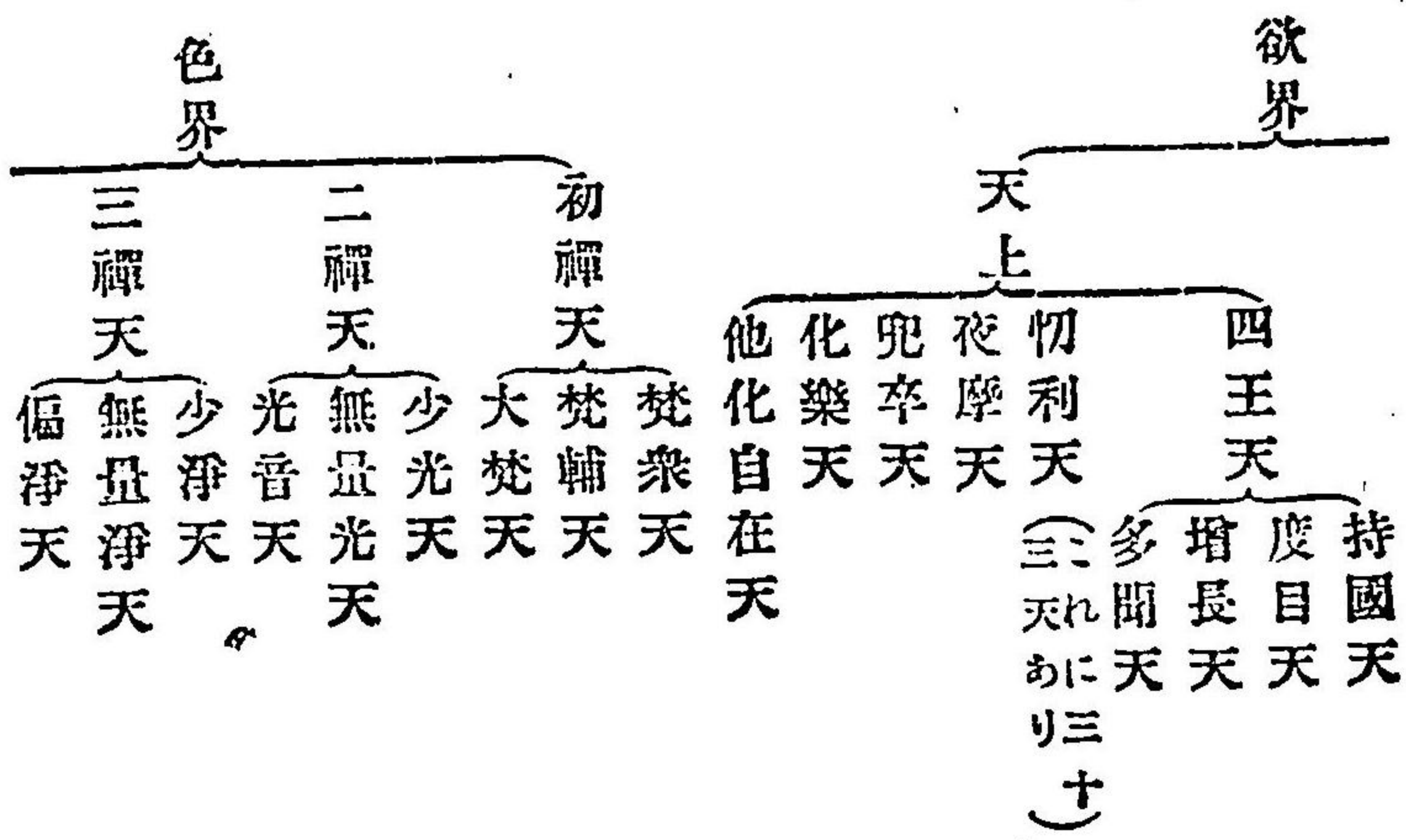


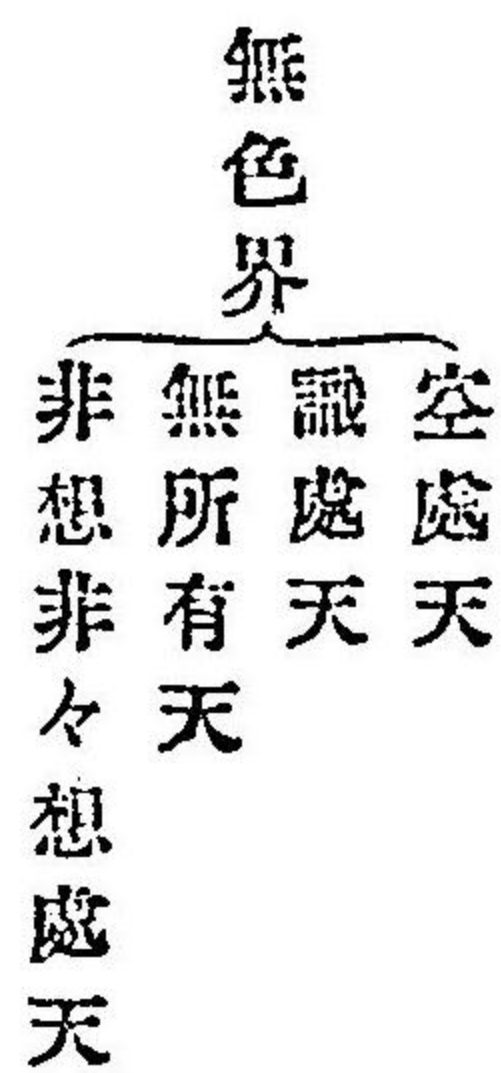
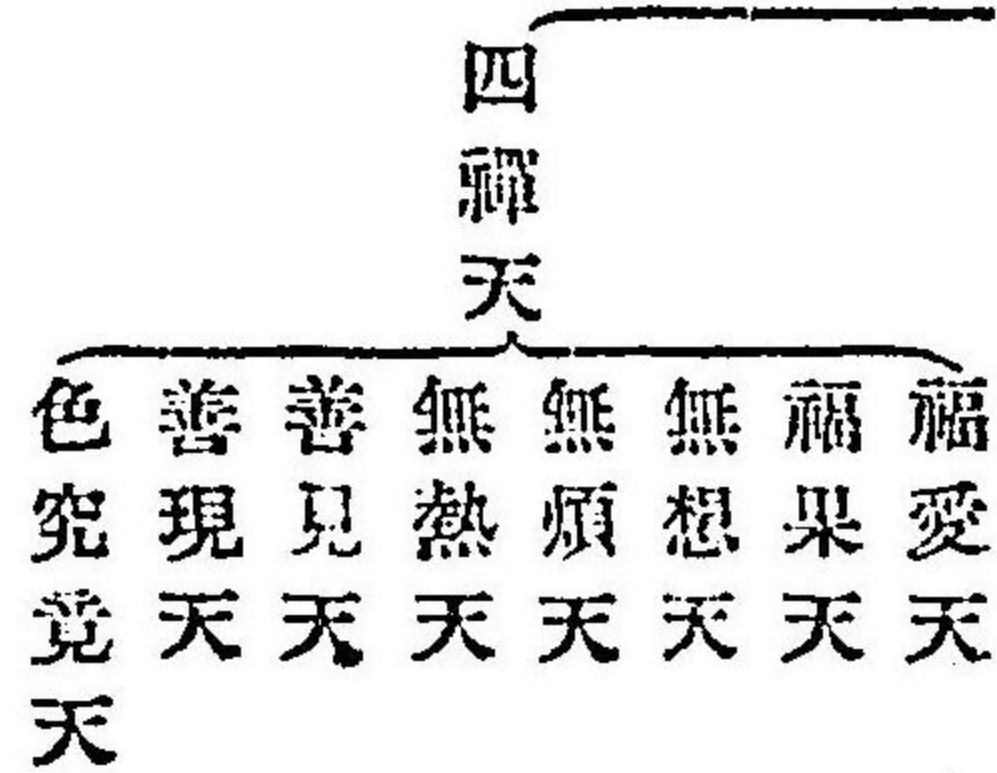
此の如く循環して惑によりて業を造り、業によりて苦を招き、苦によりて惑、惑によりて業、業によりて苦を受け、永く生死を免るゝことを得ず、過去の業因によりて未來の果を受け、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣に輪廻す、地獄は極惡の衆生の赴く所にして大地の底四百由旬の所にありと信せられ、地獄の中最も苦しきを無間地獄とす、常に無量の苦を受け、熱鐵を食ひ、惡臭を嗅ぎ、骨肉は挫かれ、山に推され石に打たれ、毒蛇に噛まれ獄卒に責められ、其壽亦長くして苦惱を受くると億萬年に達す、次ぎを極熱地獄、極寒地獄、大叫喚地獄、叫喚地獄、衆合地獄、黑繩地獄、等活地獄とし、之を八大地獄といひ、此八大地獄各に十六の近邊地獄ありて其數百二十八、之れに八大地獄を加へて百三十六、罪の輕重によりて赴く所異なる、鐵圍山下日月の光を見ざる所に餓鬼界あり、慳貪の念盛なる徒の趣く所とす、畜生界は辨意長者

三界

經に由れば戒を犯して窃かに偷盜し又は償を負て償はず、殺生して相争ひ瞋恚の心止むなきもの、趣く所とす、此三を三惡道といふ、次に阿修羅、猜忌の心を以て相争ふ境界にして須彌山の東西一千由旬の外、大海の下二萬一千由旬の所にありとす、恙し嫉妬、高慢の徒の趣く所たり。次ぎは人間界、苦樂相央ばするの境にして上には樂多くして苦少き天上界あり、下には四惡趣あり其中間に位する吾人の住所たり、天上界にも諸種の段階ありて、欲界、色界、無色界の別あり。欲界は他の五道と共に未だ欲情の全く失はれざるものにして色界は已に此欲なしといへども尙ほ肉體の繫縛を免れず、無色界に至りては此繫縛なしとす、三界の階級左の如し、

地獄  
餓鬼  
畜生  
修羅  
人間





天上界は佛教が波羅門教徒の理想とする所を綜合分類したるものにして彼の大梵天の如きも之れを初禪天に屬せしめ、數論派の理想としたる非想非々想處天をも無色界の最上位に置きたりと雖ども、是等の三界を以て、

八正道

三界安きことなし、猶ほ火宅の如し、衆苦充滿す、甚だ怖畏すべし(法華經)。

とし、未だ生死輪廻を免れざるものとし、之れを免るゝには灰身滅智の涅槃の境に到らざるべからず、涅槃(Nirvana)は寂滅の域にして永く生死の苦を離る之れを滅諦とし、之れに行くの方法として八正道を説く、

- 一 正見 宇宙の眞理に離れぬやうにして行くこと、四諦の道理を離れぬこと。
- 二 正思惟 宇宙の眞理を思惟分別すること。
- 三 正語 虚偽の言語を離るゝこと。
- 四 正業 正しき作業を爲して悪行を離るゝこと。
- 五 正命 正しき生活法を執ること。
- 六 正精進 正しく勉強すること。
- 七 正念 正しく思念すること。
- 八 正定 正しき禪定を修すること。

之れを道諦といふ、四諦の中、集は迷の因にして苦は迷の果、道は悟の因にして滅は悟の果たり、即ち滅道の二諦は生死解脱の方法にして苦集二諦は生死の輪廻の説明たり、原始佛教と目せらるゝ小乗教の死生に對する思素大要此の如し。こゝに一疑團の横はるあり、既に諸法無我と説く、如何してか輪廻すべきの問題これなり、前にもいふ如く、佛教は我の存在を否定して業即ち羯磨を以て輪轉相續するものとす。大莊嚴經此を説明していふ、

親交婆羅門、無我の説を聞き疑ふて曰く、若し無我ならば誰か後世に至らん、憍尸迦答へて言く、過去の煩惱諸業に従つて現在の身を得、現在に於て諸の業を造れば未來の身を得、譬へば種子の衆縁和合して芽を生ずるが如し、此種子の芽を生ずる縁を要し、芽を増長するは種子の滅するを要す、種子滅するが故に常ならず、芽生ずるが故に斷ならず、佛が受身を説き給ふも亦是の如し、又我無しと雖も業報失せざるなり。

無我と輪廻

婆羅門又言く、我無我の法を聞き我心垢を洗へり、然れども猶小疑あり、若し無我ならば先の所作の事如何にして記憶して忘れざるや、答へて曰く、念覺あるを以て心と相應して三世の事を憶念して忘失せず、又問ふ若し我無くんば過去は已に滅して現在の心生ず、生滅既に異なり、云何してか憶持して忘れざるや、答ふ、一切の受生は識を種子となす、母胎の田に入りて愛水潤漬して身樹生ずることを得、桃子の類に従ふて生ずるが如し、此身業を作れば能く後身を感ず、然れども此前身、後身を生じたるにわらず、業の因縁によりて則ち後身を受けたるなり、生滅異なりと雖相續して斷せず、憍尸迦此に於て説きて曰く、無明は行を縁じ行は識を縁じ、乃至生は老死を縁じて憂悲苦惱す、無明滅すれば即ち行滅し、行滅すれば識滅す、乃至老死滅するが故に憂悲苦惱も滅す。

と、是等の死生觀が如何に變遷し發達するかは請ふ之れを後章續述する所に見よ。

## (五) 佛教に於ける死生觀の變遷

阿輸迦王

佛教外護の帝王として有名なるもの前に阿輸迦王(Asoka)あり、後に迦膩色迦王(Kanishka)あり、阿輸迦王は佛滅後二百年代に出世して摩揭陀王國を支配し深く佛教を信じて教法弘通を以て任とし廣く傳道師を諸方に送り、且國內に勅して奉佛の思想を鼓吹し、其石刻の文には殺生を禁じ生物を憐み慈善の行爲を勸誘したり、王が死生觀をも窺ふべきは王弟毘多輸迦(Viasoka)を太子に定めたる時の一話なり、太子深く波羅門教を信じて佛教を喜ばず、曾て十二年間山中に修行したりし仙人が尙ほ鹿の雌雄相交るを見て慾火禁じ難しといふを聞き、飢食隱遁の仙者尙ほ且然り、况んや王城に接近し安樂に衣食する佛教沙門をやと、王、如何かして太子を化せんとし、一日太子の王意に背きしを奇貨とし、太子に告げて曰く、今より七日の後、當に汝を殺すべし、されど其日の到る迄は汝、我に代つて王位に居り歡樂意の如くせよと、太子即ち其意に隨ひて七日間

迦膩色迦王

妓樂飲食思ひのまゝを盡せしかども、我が命の旦夕に迫るを念ふて毫も樂しまず、快々としてありければ、王は太子に告げて、沙門は縱令衣食意の如くなるも尙ほ世の苦無常を感ずること汝の死を恐るゝが如きの故に又慾念を起すの機なしと諄々として佛理を説きければ、太子も亦大に感じて佛教に歸依したりといふ、此話以て阿輸迦王の信仰を見るべきにあらずや。

迦膩色迦王は西曆紀元一世紀の頃に出世したる北印度乾駄羅王國の主なり、王が佛教に對する施設は其多くを知る能はずと雖ども、三年間脇を席に着けざりしと云はるゝ脇尊者に歸依し之れを上首として五百人の僧侶を領内カシユミルに集めて佛典の結果を企て、東方摩揭陀王國を攻めて價金九萬を要求し、摩揭陀國の之れを支出し得べからざるを見るや馬鳴菩薩と佛鉢と一慈心雞とを得て和を構せりといふ事蹟の傳ふべきあるのみ。此傳説によりても王が佛教篤信の人なりしや知るべし。佛教は此の如く王者の保護を受けたること多かりしといへども、又迫害を受く

ること少からず、外には波羅門教あり、内には大乘教勃興し幽遠なる  
思索を以て原始的なる小乗教に對し、殊に迦膩色迦王に擁せられて北印  
度に赴きしと傳へらるゝ馬鳴、先づ「大乘起信論」を著はし次で龍樹、世親

無着等の輩出するに及んで大乘教は非常なる勢力を有するに至れり。

馬鳴菩薩 (Aśvaghosha) 初め波羅門教に歸依して佛教を信せず脇尊者の弟

子富那夜奢に至りて論戰を試みて曰く一切世間所有の言論、我能く毀壞

すること覆の艸を摧くか如くならん、此語若し誠實ならずんば當に舌を

斬りて其屈を謝すべしと、富那夜奢爲めに佛教の無我の理を説き、

「若し世諦に就て假名を我と爲すも、第一義諦は皆な悉く空寂なり、是

の如く推求するに我何ぞ得べけん。

と、云ふに至て馬鳴之れに服し、約によりて舌を斬らんとす、富那夜奢

之を止めて曰く、我法仁慈を旨とす、豈に汝をして舌を断たしめんや、

宜しく髮を断て我が弟子となるべしと。

かくて馬鳴は佛に歸して終に大乘教の唱首となり大乘起信論を著はし

馬鳴

龍樹

提婆

て外道并に小乗教を駁す。馬鳴以後、幾もなくして龍樹菩薩 (Nāgārjuna)

あり八宗の祖と稱せらる、其著大智度論、十二門論、中論の如きは大乘

教の網格を示して龍樹の主義を顯揚す、夙に諸種の學藝に通じ、友と相

語つて曰く、吾等既に諸種の學藝に於て其秘奥を究む、之れより以後、

情を恣にし欲を極め以て快樂を擅にすべしと身を潜めて王宮に入り宮女

を犯す、事現はれて諸友皆な殺され、龍樹獨り免るゝことを得たり、此

に於て深く道心を發し潛心經典を攻めて諸法實相の義を立つ、龍樹の門

に提婆 (Devanand) あり師説を祖述して頗る名ありき、提婆以爲らく樹は其本を

伐らざれば枝條傾かず、人主先づ化せずんば其道行はれずと、終に南天

竺の王を度し、王都の中に高座を設け、揚言して曰く、一切諸聖中佛最

第一なり、一切諸法の中佛法正に第一なり、一切救世の中佛僧第一なり、

八方の諸論士若し此意を破らざるものわらば首を斬て以て其屈を論すべ

しと、波羅門の徒、しばし論戰を挑めども皆な提婆の爲めに論破せら

る、一波羅門、其師の提婆の爲めに屈せらるゝを恨むものあり、提婆の

閑林にあるを見、刀を執りて之を刺す。提婆從容として曰く、我が弟子中未だ法忍を得ざるものあり、我が汝が爲めに殺さるゝを見れば必ず汝を捕へん、汝宜しく山上に逃るべしと、刺客去りて弟子之を見、敵を求めんとす、提婆之れに説くに一切諸法皆空にして受者なく害者なきの意を以てし泊然とし化す、これ實に其敎理を實現せしものなり。

無着と世親

西曆紀元五世紀の頃に當て健陀羅國に二人の兄弟あり、長を無着といひ、幼を世親といふ、共に婆饒槃豆(Vasubandhu)といふ、無着は初め小乗の空觀を修し後大乘に入る、無着大乘に入るも世親未だ之を信せず、兄深く之を悲み、病と稱して急に世親と呼ぶ、世親到て病源を問ふ、無着答へて曰く、我が心、重病あり汝に由て起る、思ふに汝常に大乘を信せず、却て之れを誹謗す、其惡業によりて汝必ず永く惡道に沈まん我今之れを思ふて愁苦禁じ難く、命將に終らんとすと、世親恐懼して大乘の敎義を説かんことを請ふ、無着此に於て大乘を説く、世親大に服し舌を斷て其罪を謝せんとす、無着之れを止めて曰く、何ぞ大乘を毀謗せるの舌

賴耶緣起

を以て大に大乘を説かざるやと、爾來兄弟共に大乘を顯揚す。印度の佛敎は前きに掲げたる龍樹提婆の敎系と無着世親の敎系との二大思潮を以て窺ふことを得べし馬鳴の敎系は此二者に先ちしといへども、印度に於ては未だ其精華を開く能はずして支那に入り且つ敎理説明の順序としても此二大敎系の後に屬せしむるを以て便なりとするが故に、こゝには先づ世親の唯識論によつて唱導せられたる賴耶緣起を先とし、次に龍樹の諸法皆空論を窺ひ、終りに馬鳴の眞如緣起論に入らむ。

先きにもいふ如く小乗有部の所談によれば羯磨即ち業のみ相續するも我が心身は共に生滅を免れざるものとし、雜阿含經に於ては、

諸の所有の色、若くは過去、若くは未來、若くは現在、若くは内、若くは外、若くは麤、若くは細、若くは好、若くは醜、若くは遠、若くは近、當さに觀すべし彼の一切は皆な是れ死の法なり。受と想と行と識と亦復た此の如し。

と説きて意識も亦死時に於て消散すべきをいふ。斯の如く資質すべき身



心共に消滅せば死後、業は如何にして相續するや、こゝに於て中有の五蘊を説き又は細意識をいふも未だ悉せるものにあらず、大乘唯識論に於ては此意識の外に末那、阿頼耶の二識を立て一切の心意識を八個に分つ、心とは集起の義にして一切萬物を引き起すの力あるもの阿頼耶これなり、意とは思慮の義にして恒に不斷に思慮する末那これなり、識とは了別の義にして外界の事物を見分け知り分くる眼、耳、鼻、舌、身、意の六識これなりとし、阿頼耶(Ara)は藏の義にて猶ほ土藏の一切を藏むるが如く諸種の種子を包容す、末那(Mana)は阿頼耶を對境としてこれ則ち我なりと執する細意識にして前六識と第八阿頼耶識とを關聯する者にして吾人が死後に於て其業を相續せしむるものは阿頼耶あるのみ、阿頼耶は實に業の寄寓所たり、吾人が日常意識並に行爲する所の善惡の作用は瞬時に滅して迹なしといへども其意識及び行爲の善惡が留め置きし活動の餘波は阿頼耶の中に保留せらる、之れを業種子といひ、前五識、及び末那等の作用が其結果を招くべき爲めに留りし餘勢を名言種子と名け、是等の種子

は阿頼耶の本體内に潜伏するといへども機至れば新らしき身體を構成するに至るものと見て、彼の業を以て物心以外にある不可知の存在とせずして心的作用の一種とし一切の業種子は此阿頼耶の内に收められ以て輪廻の原因たるべきものとせり。されば此派の主張に於ては阿頼耶を以て種子持続の本體とし此種子發して前七識の現行となり、前七識の現行は阿頼耶の種子となり、種子は現行を生じ、現行は種子に熏じ、輾轉極る所なしとす。

諸法皆空

龍樹の教系に於ては中觀論に於て因縁所生の法、我即ち是れ空と説くといひて一切萬物は悉く因と縁との和合によつて生ず、既に因と縁との和合に成るもの、素より其實體あるにあらず、此に於て凡て之れ空と説くが故に我が此身は、因縁所生にして空なるは勿論、此心も亦空なりと爲すが故に、唯識論にて云ふ如き阿頼耶識の存在を許さず、心も亦空なりと斷じ、現象差別を超越して不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不來、不去の八不を以て眞理を直觀せんとするが故に業も亦空なりとし

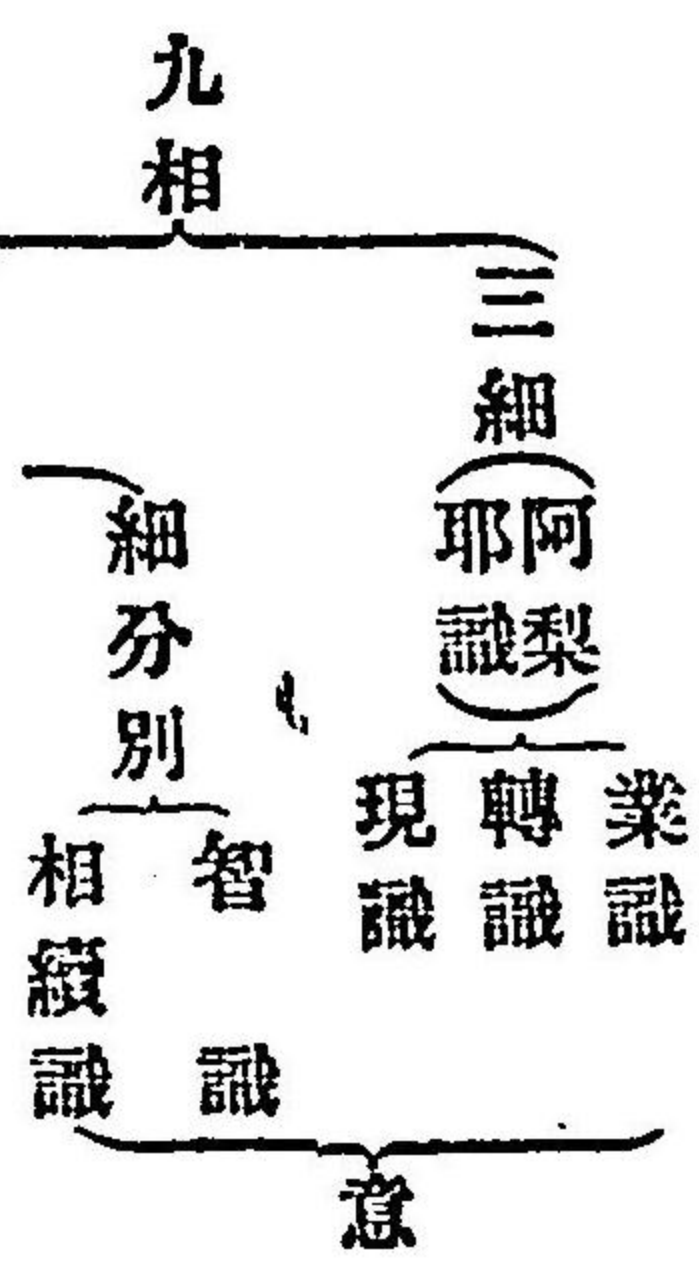
無宇宙論無靈魂論たらんとす、同じく中觀論に、  
已に去りしならば去といふことなし、未だ去らざれば去といふことなし、

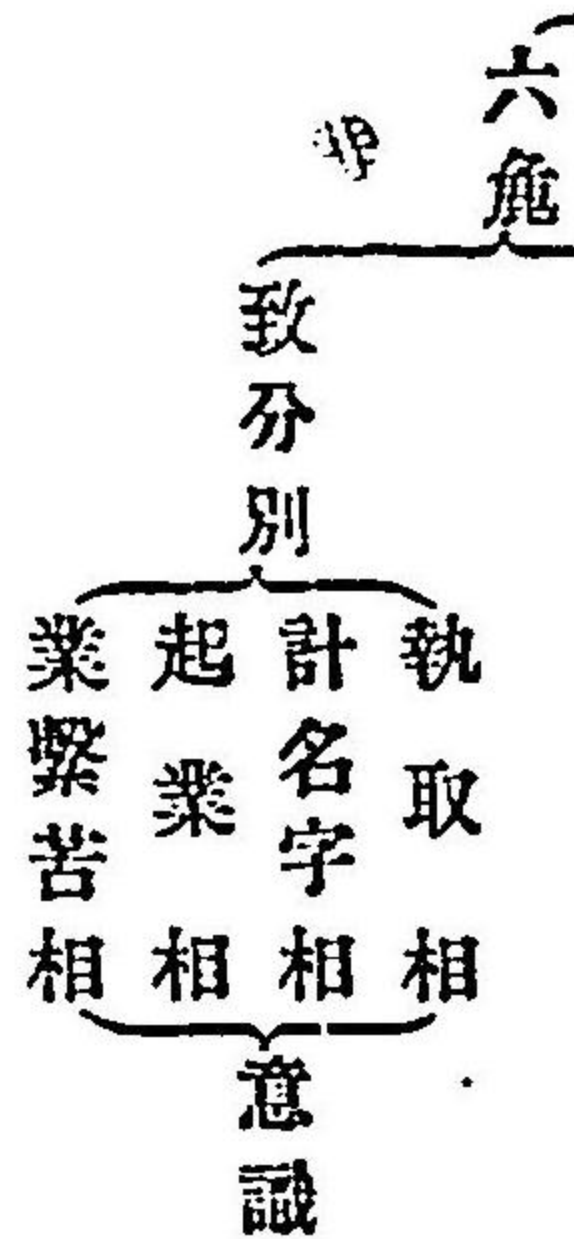
と此筆法を以て推せば既に死すれば死といふことなく、まだ死せずんば死といふことなしと見るべきか。

眞如緣起

眞如緣起論は馬鳴の著大乘起信論によりて窺ふことを得べし。該書の説相は之を二大部に分つ一は眞如門にして眞如絶對は言説思慮を超越したる空なりといへども(空眞如)其上には萬象差別歷々として具する(不空眞如)ものなりといひ、生滅門に於ては現象世界は妄想の所現にして空なれども其根底には眞如の實在するありとし、此眞如が無明の爲に動かされたるを業識といひ、蝸牛の未だ殻を出でざるに喩ふ、既に殻を出づれば左右の角を出す如く、主觀と客觀との作用を生ず、其主觀を轉識又能見識といひ、客觀を現識又境界識といふ、(以上を三細といふ)而して此主觀の妄念によりて客觀の妄境を生ず、既に妄境を生じ、此上に分別識知

する之を智識といひ、其分別を相續して永く傳ふるを相續識といひ、以上を總稱して意といひ此二識を細分別といひ、其妄相續を堅く執して離れざるを執取相識といひ、此執取によりて諸種の名字を付し迷ひに迷ふを計名字相といふ、かくて迷妄によりて身口意の業を作る、之を起業相といひ、これを意識と爲す此起業によつて苦果を受くるを業繋苦相といひ之れを愈分別といふ(前細の分別識を六處といふ)と説くものにして彼の十二因縁が業によりて變轉する次第を説く根源に遡て無明と業との關係を九相を以て説明したるものにして十二因縁の外的なるに對して之れは心的變化なり、之れを圖示せば左の如し。





即ち眞如縁起論に於て眞妄和合の業識を以て活動の本源とし迷へば生死に輪廻し悟れば解脱の域に入るとす、尙ほこれらの説に於て悉さいる所あるべしといへども、そは支那の死生觀を見るの章に於て説くべければこゝには生死の根原を此の如くに説明すといふに止らんとす。

かくて佛教は西暦七八百年代の頃に至りて印度古代哲學の復興と印度教の旺盛とマホメット教の傳來等とによりて漸次其勢力を失ひ、千二三百年代に至りては殆んど跡を印度全土に絶つに至れり。

(六) 印度教の概観

波羅門教の積弊を矯め新に宗教を組織せしもの佛教の外に禪那教(Jaina)

なるものあり、佛教に先ちて若提子 (Jatana) 唱導せられ佛教と其興廢を一にす、此教の説く所は大に其教理を佛教と等しくすといへども、其死生觀に於て異なる所は一切の萬物を有情と無情とに分ち有情は精神と肉體とより成り精神は肉體と分離して常住不變のものなるに肉體の爲めに繫縛せられし現在の苦境にあるも禁欲苦行の修行を積みて生々忘ることなくんば終に肉體を脱離したる精神状態に至るを得べしとして靈魂の實在をいふにあり。此點に於て禪那は又波羅門教に類せりといふべきか。

紀元後八世紀佛教の勢力漸く衰ふるに及びて禪那教も亦大に衰へ、之に反して久しく屈辱の下にありし波羅門教は漸く其頭を擡げて民間信仰を合せて梵天、グシユス、シバの三神を以て宇宙の創造、守護、破壊に配し共に梵天の顯現なりといへども三神各其神格を異にし、梵天のことは舊波羅門教に於て既に之を説けるが故に新に云ふの要なきも、グシユスに至ては世界守護の神なれば温和慈仁にして最も親近し易しとし古英雄ラーマの如きを以て其權化とし、シバは宇宙萬物を破壊するの威力を

有する恐るべき神となると共に再生の力を有する恩恵の神として崇拜せられたり、かくて舊波羅門教と其趣を異にせる新波羅門教は起りぬ。之れを印度教と呼ぶ、此教を確立せしもの先きにクマールラあり、後にシヤンカラあり、深く韋陀の思想を討究して其復興を計り、氣息奄々たりし佛教に打撃を與へ破邪顯正を以て一生を終りしが、シヤンカラの滅後、印度教は幾多の分派を生じ、其民間信仰は頗る亂雜に流れシバ崇拜派の中にはシバを以て死神として生類の死を喜び墓場を徘徊し、人の少しく不敬を加ふるあれば直に之を滅すると共に又死人を活かし盲者を明かならしむるの力ありと信じ、或は最高なる解脱は死を以て得べきものにあらずして此身體を永久不滅ならしめ以て大自在天と合一の悦樂を得るにありとし、シバの顯現たる水銀と雲母との混合液を身體に塗りて不死を得るにありとし、或はシバが再生の威力を生殖器に寓して男女抱合の像を祀り終にシバの妻たる女神を崇拜し、女性を以て萬物生々の力とし肉慾を恣にするを以て神に仕ふるの道とし終に神前に醜行を敢てして神秘

シバ派

グアイシュヌ派

の式となすものあり、或はカーリーなる黒面鬼様の女神を以て死の神とし、此の神を慰むるは血を以てせざるべからずとして人身犠牲を行ふものあり、其グアイシュヌを崇拜するものは前にもいふ如く人間を惡より救ひし英雄譚と混和し専心に此神を冥想するを以て神人合一の境に至る唯一の因にして信仰を以て爲す所の一行一證も亦解脱の功ありとし、臨終の一念信仰にあれば一切の罪惡を消滅せしめ、グアイシュヌの住むなる天上界に生ると信じ、其極自殺を行ふものあるに至り、此グアイシュヌ派より出で、専ら神の慈悲と人の信仰との要を説けるものをラーマージュヤ派とす、西曆千一百年代南印度に生れたるラーマージュヤに依て唱へらる、此派は宇宙を以て最上精神たる主宰と個人精神と無精神の物質とに分ち、此個人精神と無精神の物質とによりて成れる世界は差別生滅の狀態にあるものなれば絶對にして常樂なる主宰と全然其質と異にし人は常に輪廻生死を免れざれどグアイシュヌを信することによりて能く救はるゝを得といひ、宗教として頗る健全なるものありしが、後には女神崇拜の

風を生じ専念の信仰は男女慈愛の如き恍惚の境に至らざるべからずとさへするものあるなり、印度の宗教は一大改革を要するの時とはなれり。

此時に當りて回々教は印度に侵入して西暦千二百六年以來王朝を建て、千三百九十八年には韃靼の酋長帖木兒印度を侵し、其六世の孫バーベルに至りてモンゴル帝國を組織し、一千五百五十六年其孫アクバルに至りて愈、其根底を鞏固にしたり。之より先き印度教中に諸種の改革者出で、回々教に衝突し殊にナーナク(Nanak)によりて唱へられたるシク教の如きは軍隊的組織を以て王朝と相争ひしが、アクバル大帝立つに及びて回教的偏執の情を去り印度教を寛容すると共に又其弊習たる殉死犠牲等を矯め、當時新に來りし基督教に對しても同情を失はず、一切宗教の精粹は唯一神にありとし、理性と道徳とを以て信仰の大本とし頗る健全なるものなりしも尙ほ彼れは靈説の轉生、死後の生活に就ては堅く之れを信じたりしが如し。

アクバルの宗教は其死と共に衰へて回教は漸次恢復し來り印度教との

阿克バル

梵教會

反目を續け、新來の基督教も亦傳播に努め、諸種の宗教は悉く印度國內に集りしが千七百七十四年、ラーム、マフン、ロイ(Ram Mahan Roy)の生るに及びて革新の曙光は現れぬ。ロイは波羅門族の子にして夙に波羅門の經典を誦し、進でウパニシャッドの哲學的思辨を究め、パリー語によりて佛典を読み、亞刺比亞語によりてコーラン經を見、ヘブライ語にて舊約全書を學び、希臘語にて新約全書を繙きたりと傳へらる。彼れは極力偶像崇拜に反對し唯一神の主義に立ち、眞理は何れの宗教にも存し、其啓示は何れの國何れの人にも現はるべく、何れの聖典も亦此啓示にあらざるはなしとし、千八百三十年ブラハマ、サマシ(Brahma Samaj)即ち梵教會なるものを組織し、何れの宗教をも非難せず、唯一神を拜するものは凡て一致すべしと爲しぬ。彼れの主義は此の如しといへども、彼れは印度固有の信仰たる生死輪廻の觀念を棄て、却て基督教の末日審判の説を信じたりしが如し。

印度の葬

此の如き革新者を除外して印度教を遠觀すれば輪廻轉生の觀念は深く

脳裡に浸潤し肉體輕賤、精神貴重思想は上下を通じ、其の極現時の印度に於ては殆んど墳墓を築くことなく(唯だ夫死して妻の殉死したる時は其名譽を傳へん爲に三菱形の墓を築くことあり)主として火葬を用ひ、其遺骨を金屬の器に入れて恒河に投じ、王者の死する時は其遺骨の一部を碎きて細粉と爲し十二の波羅門僧は之れを食物に混じて吞下し以て王者の罪を自己に引受くると信じ、其他シバ教徒並に賤民の間には死屍を直に恒河に投ずる水葬及び土中に放棄する土葬行はるゝ如き、蓋し其感化ならずんばあらず。

## 第二章 上古支那に於ける死生觀

### (一) 古代の感想

思辨的冥想的なる印度の死生觀を一瞥して支那に入るの時、吾人は幽谷を出で、曠野に向ふが如く其思想の直截明晰なるを看取せずんばあらず。由來支那民族は現世的實際的にして幽邃なる思索に耽ることを好まず。宇宙創造の神話の如きも太初は混沌たる雞子の如く、清き者は上りて天となり、濁れるものは下りて地となり、こゝに天地剖判して中に盤古氏を生む。盤古氏は實に人類の始祖たり、此盤古氏死して其氣は風雲となり、其聲は雷霆となり、左眼は日となり、右眼は月となり、四肢五體は四極五嶽となり、血液は江河となり、筋脈は地里、肌肉は田土、頭髮は星辰、皮毛は竹木、齒骨は金石、精髓は珠玉、汗流は雨澤となるといひて盤古氏死後幽冥界の事を語らず、其哲學的思想に屬するものも亦皆な利用厚生を主義として河圖洛書の事の如きも此目的を離れず、伏羲

盤古氏

氏の天下に王たるや(西暦紀元前二千八百四十二年と稱す)龍馬、河に出づ、遂に其文に則りて八卦を畫し、禹の水を治むるの時、神龜、文を負て背に列ぬ、數あり九に至る、禹之により九疇を造ると、前者は河圖、後者は洛書にして此二者は支那民族の根本思想を組織するものたり、易の繫辭傳に曰く、

古、伏羲氏の天下に王たるや、仰では則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀て近く諸を身に取、遠く之れを物に取る、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の德を通す云々と、蓋し八卦は同書に

易に太極あり、之れ兩儀を生じ、兩儀、四象を生じ、四象八卦を生ずとある如く、混沌たる宇宙の本體太極は別れて陰陽となる、陰陽は之れを乾坤に比し男女に比し晝夜に比し一切の現象を以て之れの交錯し運動する變易の狀に過ぎずとするものにして此陰陽の兩儀別れて老陰老陽少陰少陽の四象となりて陰中更らに陰陽あり、陽中亦陰陽なき能はず、更

八卦

らに此四象を別ちて、

乾	☰	(天)	兌	☱	(澤)	離	☲	(火)
震	☳	(雷)	巽	☴	(風)	坎	☵	(水)
艮	☶	(山)	坤	☷	(地)			

の八卦として萬象中最も顯著なる天、澤、火、雷、風、水、山、地に配し、八卦各三爻を有するは天地人の三にしてこれを重ねて六爻とし其交錯によりて八八六十四卦を生じ、無窮に開發して萬物の數に至り、天地の變易、萬物の活動擧げて盡さざる所なしとし、

聖人卦を設けて象を觀じ、辭を繋ぎて吉凶を明す(同書)とし至誠感應卦を設けて吉凶禍福を豫知すと、吉凶禍福を豫知すといへども、要は積善の家に餘慶あり積不善の家に餘殃ありといふ如き倫理的現世的に因果を説くものにして死後に向て思索すると少し、九疇とは五

五行

行、五事、八政、五紀、皇極、三徳、稽疑、庶徵、福極にして五事以下悉く利用厚生之道に關す、唯だ五行は萬物運用の根本とする所のものにして木火土金水之れなり、木、火を生じ、火、土を生じ、土、金を生じ、金、水を生ず、水は冬、金は秋、土は季夏、火は夏、木は春なり、春は生を主どり、夏は長を主どり、季夏は養を主どり、秋は收を主どり、冬は藏を主どるとし、更に之れを舜倫道徳の上に推及すといへども死後の問題とは相渉ることなし。然らば支那民族は死後を斷滅として何の考ふる所もなかりしか。曰く否、彼等も亦他の民族の如く死後の靈魂を信じたりき。そは祭祀の思想によりて窺ひ得べきにあらずや。由來支那は多神崇拜の民族にして天神、地祇並に人鬼を祀る、天神にも種々あり其最も尊崇する所のものは昊天上帝にして、之を祀るものは王者に限るとし其他、日、月、星、辰、雨師風伯を祀り、地祇として社稷、五祀、五嶽、山林、川澤並に年穀の豊穰を祈る等諸種の儀式あり、人鬼の鬼は歸なり、人死するの時、其魂は天に歸し、其魄は地に復す、魂は陽にして魄は陰

魂魄の思想

なり、人生れて四肢五官の運用あるは魄なり、九竅百骸備はるの時、神識其内に寓す之れ魂なりとし、魂を以て純然たる無形物とし、魄を以て肉體と關聯して外界に運用する所のものとして或は魂は嘘吸出入するものなり、魄は耳目の聰明なりとし、人死するや屋に上りて北面して其天に歸する所の魂を呼ぶの風習あり、禮記に「望反諸幽、求諸鬼神之道也、北面求諸幽之義也」とある之れなり。されば彼等が靈魂不滅の信仰を有せしや疑ふべからず、既に靈魂不滅の思想ありとせば幽冥界に於ける狀況如何、この民族の想像は頗る簡單にして聖人君子の靈魂は死後天上に儼存し、祖先の靈魂は常に子孫を監視すとし、周の武王病ありし時、周公は其祖先たる太王、王季、文王の靈に告げて其平癒を祈りたる如き其一例なり、凡人の靈魂も亦永く滅することなく其祭祀に應じて來り響くるとし、悪人に至りては死して獸類となるの信仰ありしを見る堯の禹の父鯀を羽山に誅するや、其神化して黃熊となり羽淵に入りたりとし殷周の二代は之を祀りて厲なきを得たりと傳へられ、左氏傳の昭公七年の下に

鬼崇



は往年殺されし伯有の靈出で、厲を爲すといふに對し趙景子が「伯有猶能爲鬼乎」と問ふに對し子産は答へて曰く、

能くせん、人の生るや始て化するを魄といふ、既に魄を生ず、陽に魂といふ、物を用ひて精多ければ則ち魂魄強し、之を以て精爽有て神明に至る。匹夫匹婦も強死すれば其魂魄猶ほ能く人に憑依して以て淫厲となせり云々。

と、強死とは變死の義なり、變死なるもの厲を爲すとし且ついふ「鬼は歸する所あれば乃ち厲を爲さず」と其歸する所を爲して之れを視るに靈魂慰安の法なりしが如し。これらの思想は將來道教の發達佛教の傳來に從つて諸種の迷妄なる觀念を作るの基因とはなれりける。

### (二) 儒教の死生観

支那の思想には自ら二個の潮流あり、一は北方鄒魯の思想にして他は南方荆楚の思想なり、南方荆楚の思想を代表するものを老莊の哲學とし

北方鄒魯の思想を代表するものを孔孟の教説とす。孔孟の教説は漢人種が古代より傳承せる實踐的倫理的の思想にして老莊の哲學は理想的超越的色彩を帶ぶ、蓋し此二大思潮、一は儒教となり他は道教となつて茫茫三千載支那民族の思想を支配せり。就中、孔孟の教は此人種固有の性情に適し、殊に治國平天下の利用厚生主義なるが故に専ら歴代の帝王に則られ倫理大本を樹立し、仁義忠孝の道徳となつて東洋の天地に其美華を開きしものなれど、もとこれ現在のなるを以て死生に關する感想の如きは簡單にして殊に言ふべきもの少し。

孔子

孔子名は丘、字は仲尼、魯の人なり、周の靈王の二十一年十一月を以て生る、實に是西曆紀元前五百五十一年なり、其説く所は先王の道を祖述し仁を以て徳の大本とし、詩、書、禮、樂を以て徳に至るの要素とし、人格を以て人を率ゐ實踐躬行を旨とす、五十五歳にして魯の定公に仕へ、一年ならずして國政を整へ大司寇となりしが、哀公に至り其言ふ所用のられず、乃ち官を辭して列國を周遊して諸侯に説き五年の後、魯に歸り

書を叙し詩を刪し、易を序し、春秋を作り、七十三歳にして逝く、一代の風化は支那歴代を支配し、唐の玄宗は諡して文宣王といひ、宋の真宗は更に至聖の二字を加へ、至聖文宣王といふ。孔子自ら修行の順序を語りて、

吾、十有五にして學に志し、三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に從て距を踰へず。

と、孔子の教育は怪力亂神を語るを避け、死後の問題に向つては語ることを欲せず。子路の生死鬼神のことを問ふに對しては

未だ人に事ふる能はず、焉ぞ能く鬼に事へん。未だ生を知らず、焉ぞ死を知らん。

と答へ、子貢の死後、知ありや否やを問ふに對しては

吾、死者知あるを言はんと欲す、孝子順孫、生を妨げ以て死を送らんを恐る。知なしと言はんと欲す、不孝の子孫棄て、葬らざるを恐る。

死後の問

と答へて頗る曖昧に類すといへども、天命を信じ、道義を以て生命とし、道の爲めには死生を顧みざる大自覺を有したりしや疑ふべからず、されば桓魋の暴に遇ふや、泰然として、天、徳を予に生ず。桓魋其れ予を如何せんといひ、論語の中にも天命に就て語る所少からず。

天何言哉、四時行焉、百物生、天何言哉、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言、不知命、無以爲君子也。

死生有命、富貴在天。不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。

の如きこれなり。死生命ありと信じ、天を怨みず、人を咎めず、悠々自適、其行動、心の欲する所に從うて距を踰えざるの大悟境は孔子の到達したりし妙諦なり。門弟三千人、中、六藝に通ずるもの七十二人、其巨擘を顔回とす、孔子其徳を賞していふ、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在て人其憂に堪へず、回や其樂を改めず、賢なる哉回や、又いふ回や其心三月仁に違はずと、顔回は實に悠々自適の此妙諦を得、死

子思

生苦樂を超越して亦心を勞せざりしが如し。

孔子既に死生の事を度外にし性と天道とは得て聽くべからず。此に於て其流を酌むもの亦之れに論及するものなく、唯だ道に殉ずるを以て本分として立言するのみ。孔子の子に伯魚あり、伯魚の子、子思中庸を著はし、誠を以て天地生々の根本原理とし、「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」として天道と人道との相關を示し、

天命之を性といひ性に率ふ之を道と謂ひ道に修むる之を教といふ。と説きて、道を以て天に出づるとし、其本來の性に背かざるを以て道德の要義と説き是故に君子は其睹ざる所に戒慎し、其聞かざる所に恐懼すべきを説く、子思の門人に業を受けたるものに孟子あり、名は軻、字は子車一に子輿と稱す鄒の人なり。孔子の學風を祖述して性善の説を唱へ天下方さに戦國割據、盛んに合従を説くの時、獨り仁義道德を教て諸侯を遊説し天下を平治するの道此外にあるなしといひ、専ら經世利民の策を講じ死生のことに論及することなしといへども、自ら死生に超越

孟子

したる安立の地を得、

順を以て正となすは妾婦が道なり、若し夫れ天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふ、志を得れば民と之に由り、志を行ふことを得ざれば獨り其道を行ふ、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、此をこれ大丈夫といふ。と屹然動かす頗る豪傑の風あり、萬物皆な我に備る、身に反て誠なれば樂之により大なるはなしと。又いふ、

安立の地

其心を盡くす者は其性を知る、其性を知れば則ち天を知る、其性を存し其性を養ふは天に事ふる所以なり。歿壽武はず身を修めて以て之を俟つは命を立る所以なり。命に非る莫きなり、以て其正を受く、是故に命を知るものは巖牆の下に立たず、其道を盡くして死するものは正命なり、桎梏して死するものは正命にあらざるなり。

と正命とは天の命する所、身を修めて之を俟つを以て順て其正を受くる

ものとす。これ彼が安立の境たり、而して其死生を觀するや、  
 生も亦我が欲する所なり、義も亦我が欲する所なり、二者兼ぬるを得  
 べからず、生を捨て、義を取らん者なり、生も我が欲する所、欲する  
 所生より甚きものあり、故に苟も得るを爲さず、死も亦惡む所、惡む  
 所、死より甚しき者あり、故に患も避けざる所あり。  
 と、所論頗るストア派に類するものあり。

同じく孔子を説述し、しかも孟子の性善説に反して性惡説を唱へたる  
 ものを荀卿とす。荀卿名は况、趙の人なり、年十五始めて齊に遊學し、  
 齊に事へ、讒に遇うて去て楚に適く、楚の春申君、之れを蘭陵の令とな  
 す後退きて仲尼の意を述べ禮義の治を論じ巫咒を觀破す、其所論頗る孟  
 子と趣を異にす、彼れは國は禮によりて治り、禮に由らざれば亂る、此  
 外別に天命なるものあらむやとて、  
 天行常なり、堯の爲めに存せず、桀の爲めに亡びず、之に應ずるに治  
 を以てすれば則ち吉、之に應ずるに禮を以てすれば則ち凶、本を驅め

て用を節せば、天貧する能はず、備を養ふて勤く時は、天病する能は  
 ず、道を修めて貳はざれば則ち天禍する能はず。  
 といひ、

道は天の道にあらず、地の道にあらず、人の道とする所なり。

と喝破し、天命吉凶禍福に迷ふの愚を説いては、

星墜ち木鳴る、國人皆な恐れて曰く、是れ何ぞやと、曰く何も無きな  
 り、是れ天地の變、陰陽の化、物の罕に至るものなり、之れを怪とす  
 るは可なり、之れを畏るゝは非なり、夫れ日月の蝕する、風雨の時な  
 らざる、經星の黨りに見はるゝ、是れ世として常に之れあらざるはな  
 し、上明にして政平なれば則ち之れ並世にして起ると雖、傷むなきな  
 り、上闇にして政險ならば則ち是れ一至るものなしと雖、益なきなり。  
 と、彼れは極方迷信の勦絶を計りぬ、死後の生活の如きに至ては終に多  
 くを聞くことを得ず。鄒魯の學風概ね此の如し、去て荆楚の死生觀を窺  
 はざるべからず。

### (三) 道教の死生觀

南方荆楚の思想として見るべきものを老子列子並に莊子とす。此三者は鄒魯の學派の如く現實的にあらずして理想的に、常識的にあらずして哲學的に、社會的にあらずして超越的なり、其祖老子、姓は李、名は耳、字は伯陽、其耳漫にして輪なきを以て聃といふ、(聃は耳漫の義) 楚の苦縣の人、西曆紀元前五百六十年を以て生る、長じて周の守藏室の吏となり藏書を繕きて古聖の書を讀み、世勢の汚濁を厭ひ世を遁れて山に入らんとす、散關の令、尹喜其性學宏才を慕ひ抑留して書を遺さんことを請ふ、老子即ち道德經二卷五千餘言を遺し去つて其行く所を知らずと、爲人の飄逸なる此の如く其説も亦現實を超越して直に宇宙の根本を求む。物あり混成す、天地に先ちて生じ、寂たり寥たり、獨立して改めず、同行して殆からず、以て天下の母たるべし、吾其名を知らず、之を守して道といひ、強て名を爲して大といふ、大は逝といひ、逝は遠といひ、

老子

大道

ひ、遠は反といふ、故に道大、天大、地大、王亦た大、域中四大あり、而して王一到る、人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る、

といひて此自然に法る大道を以て宇宙の大體とし、之を形容して、道の物たる惟だ恍、惟だ惚、惚たり恍たり其中象あり、恍たり惚たり其中物あり、窈たり冥たり其中精あり、其精甚だ眞、其中信あり、古より今に及びて其名去らず、以て衆甫を問ふ、吾何を以て衆甫の然るを知るか、此れ道を以てなり。

といひて道を以て差別を絶したる無極絶對のものにして天地萬物の根原たりとし之れと第一原理として不生不滅の當體とす。

谷神死せず、是を玄牝といふ、玄牝の門、是を天地の根といふ、綿々として存するが如し、之を用て勤めず。

道法自然に順すべきと説て無爲恬淡を旨とし、一夫れ物の芸々皆な其根に歸す、根に歸するを靜といひ、靜を復命といひ、復命を常といひ、常を

谷神不死

知るを明といふと云ひて、隙を去り、静を守り、常に元氣をして、渾然内に充實せしむるを以て、深根固抵、長生久視の道とし、此の如くにして生を養ひ得たるものは、陸行して兕虎に遇はず、軍に入て甲兵を被ず、兕も其角を投ぐる所なく、虎も其爪を措く所なく、兵も其刃を容るゝ所なき、不死の域に至ることを得べしといふ。これ蓋し後世其の説を神秘にするの源か。

老子に次で虚無の説を唱へしものを列子とす、名は禦寇、鄭の人なり、壺丘子林といへる隠士に就て心游の理を授けられてより、黄老の道に入りて心神を練り、貧に安んじて道を樂む、鄭の太夫、子陽、其風を慕ひ王に請ふて策を其家に送らしむ、列子辭して其使者を還す、妻之を視て曰く、妾聞く有道の士の妻子は皆な逸樂を得るも吾等今飢食あり、故に君主過つて憂ありとして食を送れるなり、これ命にあらすやと、列子笑ふて曰く、君主、何ぞ眞に吾を知るものならんや、知らざる者に粟を受くるは後の累を残すものなりと、果せる哉、後、太夫子陽殺され、列子幸に累を免れしと、列子の死生観は一異彩あり、彼は死を以て悲むべきものとは

列子

善い哉死

なさざりき、曰く以て生ずべくして生ず、天福なり、以て死すべくして死す、天福なりとし、其死を説て、

精神は天の分、骨骸は地の分、天に屬するは清くして散じ、地に屬するものは濁りて而して聚まる、精神、形を離れて各々其眞に歸す、故に之を鬼といふ、鬼は歸なり、其眞宅に歸る。

とし、死を歎美しては大なる哉、死や、君子息ひ小人伏すといひ、「善いかな古の死あるや仁者は息ひ不仁者は伏す、死は徳の歸なり、古は死人を謂ひて歸人と爲す、夫れ死人を歸人と爲さば即ち生人は行人たり、行て而して歸るを知らざるものは家を失ふものなり」とし、死を以て人類安息の個所と思考し生を厭ひ死を希ふ。これ殆んど鄒魯の學風に於て見る可らざる所のものにして却て印度哲學に相似たるにあらずや。されば其修養の工夫として説く所のものも亦頗る印度禪定の風に類し虚を致し静を守り無心自在の境に至るにあり。列子、曾て關尹に問ふて曰く、至人は潜行して空せず、火を踏んで熱からず、萬物の上を行きて慄れず、請ふ

列子と關尹

問ふ、何を以て此に至ると、關尹答て其性を一にし其氣を養ひ其徳を合み以て萬物の造る所に通するにありとし、例を引て曰く、  
 夫れ醉者の車より墜つるや、疾むと雖、死せず、骨節人と同じくして犯害人と異なる、其神全ければなり、乗も亦知らざるなり、墜も亦死せざるなり、死生警懼其胸に入らず、是の故に逆ひて懼れず、彼れ全きを酒に得て、而して猶ほ是の如し、然るを死んや全きを天に得るをや。聖人は天を藏む、故に物之れを能く傷くることなきなり。  
 と、かくて彼れは神通自在の境に進むことを得べしと爲し終に神秘の域に入りぬ。

莊子

莊子は宋の蒙縣の人、名は周、老子に後るゝこと殆んど二百年、略ぼ孟子と同代の人たり、初め漆園の吏たりしが、幾もなくして之を辭し専ら黄老の道を究め、貧に處して晏然たり、嘗て魏王に謁して其弊衣を嗤はれ、之を憊れたりとせられしに、莊子笑つて之れ憊れたるにあらす、貧なるなり、士は道徳あつて行ふ能はざるを憊れたりといふ、弊衣何ぞ

死を悲ま

憊ると云はんやと終に出で、仕へず、虚静を旨とし仁義禮樂を罵倒し、死生に超絶す、其論立を盡くし妙を究む。而して其筆致飄逸、譬喩巧妙、言外に意を寓すること多し、死生を論するに於て亦這般の妙趣あり。  
 麗の姫は艾の封人の子なり、晋國の始て之を得るや、涕泣して襟を沾せり、其王所に至り王と筐牀を同うし芻豢を食ふに至て而して後、其泣きたるを悔ゆるなり、予惡んぞ、夫の死するもの、其始の生を斷めたることを悔いざるを知らんや。  
 と、これ死を悲むを以て家娘の他に嫁するに未だ其夫を知らざるが故に泣き其嫁して夫と同棲するに至て先きに泣きたるを悔ゆるに喩へて死の悲むに足らざるを諷し、或は  
 死○生○已○に○變○なし、而○も○死○ん○や○利○害○の○端○を○や。方○に○生○す○れば○方○に○死○す、方○に○死○す○れば○方○に○生○す、方○に○可○な○れば○方○に○不○可○な○り、方○に○不○可○な○れば○方○に○可○なり。

といひて生死の相對立すべきものなるを説き、

死生も亦大なり、而も之れと變ずることを得ざれ。と戒め、死生の理に於て考察すること多し。其窮るを薪たるに指す、火傳はるや其盡くるを知らざるなり」と養生主に説けるに明かに靈魂存続の思考なりとして後世佛者之を解て曰く、

指窮の喻

火の薪を傳ふるは猶ほ神の形を傳ふるが如し、火の異薪に傳るは猶ほ神の異形に傳ふるが如し、前薪、後薪にあらす、則ち指窮の術妙を知る、前形、後形にあらす、則ち情數の感深きを悟る、感へるものは形朽るを一生と見て便ち謂らく神情共に喪ふこと猶ほ火の一木に窮るを以て便ち終期とし都べて盡くるといふが如きか。

と、莊子が死生觀は頗る大乘佛教に類し、後世二者の混淆して異様なる死生觀を出すの本なり、されど其生を厭ふて死を喜び、これを以て人生の至樂とするに至ては佛教も未だ説かざる奇矯の言たり。莊子は巧なる譬喩を以て語て曰く、

死の樂

莊子、楚に之て空髑骸を見る、髡然として形あり、撒つに馬捶を以て

す、因て之に問ふて曰く、夫子、生を貪り理を失ふて而して此れとなるか、將た子に亡國の事、斧鉞の誅あつて而して此となれるか、將た子に不善の行あり父母妻子の醜を遺んことを愧て而して此れとなるか、將た子に凍餒の患あつて而して此れとなるか、將た子の春秋、故く此に及べるか、是に於て語り卒り、髑骸を援けて枕して臥す。夜半に髑骸夢に見れて曰く、子の談するものは、辯士諸子が言ふに似たり、皆な人生の累なり、死すれば則ち此れなし、子、死の説を聞んと欲するか、莊子曰く然り。髑骸曰く、死は上に君なく、下に臣なく、亦四時の事なし、從然として天地を以て春秋と爲す、南面王之樂と雖も過ぐることもなきなりと、莊子、信せずして曰く、吾、司命をして復た子の形を生じ、子が骨肉肌膚をつくり、子が父母妻子閭里の知識に反らしめん、子、之を欲するか、髑骸、深腹盛頰して曰く、吾安ぞ南面王之樂を棄て、復た人間の勞をなさんや。

と。莊子の死を見ると此の如し、其妻死するの日、莊子悲まらず箕踞して



盆を鼓て歌ふ、人あり之を咎む、莊子いふ、熟ら其本を原ぬるに妻の生命は本より有るものにあらず、生命なきのみならず、形骸も無かりしなり、否な唯だ形骸のなきのみならず、其形骸を造るべき氣もなかりしなり、芒芴の間に於て忽ち氣を生じ、氣變じて形となり、形變じて生じ、今又變じて死す、猶ほ四時の行はるゝが如し、何の悲むべきことかあらん。今や我が妻は偃然として廣大なる天地の室に長眠し安息せり、何ぞ哭するを要せんやと、これ彼れが死生に關する感想なりしなり。

#### (四) 春秋諸家の死生觀

儒教は支那五千年を一貫せる思潮の主流にして其伴となりて互に起伏せるものを道教とす。しかも此二大思潮の外に幾多の主義主張は周末春秋の時代に當り盛んに行はれぬ。揚子、墨子、鷓冠子、公孫龍子、商子、韓非子、孫子、吳子の如き其主要なるものたり。されど孫子と吳子とは兵法を談するものにして商子と韓非子とは刑名を以て國を治むるを説

春秋諸子

く、其淵源老莊に出づるといへども説く所は法律至上主義なり、公孫龍子は詭辯派を以て稱せらるゝものにして一種の論理家、鷓冠子は天に象りて以て政治を施かんとするものにして死生に關する感想の見るべきものは揚子並に墨子の二家あるのみ。

揚朱

揚子名は朱、字は子居、其傳を詳にせずといへども列子の中に揚朱の一篇あり、以て支那思想に一異彩を放つ、彼れは人生を以て厭ふべきものとし、世事苦多し、人生百歳の事を保つもの千中一もあることなし、設ひ之れあるも孩抱以て昏老に遠ぶ幾んど其半に居り、夜眠の弭む所、查覺の遺るゝ所、又幾んど其半に居り、痛癢、哀苦、又幾んど其半に居り何の時に快樂を得んと慨し、「萬物の異なる所のものは生なり、同じき所のものは死なり」といひ、

生くれば則ち堯舜、死すれば則ち腐骨、生くれば則ち桀紂、死すれば則ち腐骨一のみ。

現世主義

と、死後豈に聖凡の別あらんや。人は須らく自己の慾望を満足せしめて

快樂なる生涯を送るべし、何を苦むでか徳教禮儀の束縛を受けんやとは  
彼れの主張の要旨なり。されば

凡そ生は遇ひ難くして死は及び易し。遇ひ難きの生を以て及び易きの  
死を俟つ、孰れをか念ふべけんや、而して禮義を尊びて人に誇り、情  
性を矯めて以て名を招かんと欲す、吾之れを以て死するに若かずと爲  
す。

と、いひ、且つ

四聖は生れて一日の歡なく、死して萬世の名あり、名は固より實の取  
る所にあらず、之を稱すといへども知らず、之れを賞すといへども知  
らず、株塊と異なるなし。桀は累世の資、南面の尊に居り、智は以て群  
下を距ぐに足り、威は以て海内に震ふに足る、耳目の娛む所を恣にし、  
意慮の爲す所を究め、熙々然として以て死に至る。此れ天民の逸蕩な  
るものなり。紂も亦累世の資に藉り、南面の尊に居り、威行はれざる  
なく、志従はれざるなし、情を傾宮に肆にし、欲を長夜に縱にし、禮

儀を以て自ら苦めず、熙々然として以て誅に至る、此れ天民の放縱な  
るものなり、彼の二凶や、生れて縱欲の觀あり、死して愚暴の名を被  
る。實は固より名の與ふる所以にあらざるなり、之を毀るといへども、  
知らず、之を稱ふるといへども知らず、此れ株塊と奚を以て異らん。

と、聖愚善惡、畢竟同一株塊に歸す。寧ろ死後の名を思はずして生前の  
樂を望むべきのみと、彼れは現世主義、快樂主義を執り、死後の靈魂に  
就ては斷滅の見を有したりしが如し。

既に死す、豈に我わらんや、之を焚くも可なり。之を沈むるも可な  
り、之を瘞むるも亦可、之を露すも亦可なり云々。

と、かくて生前の快樂を求む、然らば彼れは長生を望むかといふに、  
世事苦樂、古、猶ほ今の如きなり、變易治亂、古、猶今の如きなり。  
既に之を聞き、既に之を見、既に之を更ゆ、百年猶ほ其多きを厭ふ、  
况んや久生の苦をや。

といひて之れを避け、已に然らば自殺を許すかといふに、孟孫陽の問に對して

然らず、既に生るれば則ち廢して之に任せて其欲する所を究め、以て死を俟つ、將に死せんとせば、則ち廢して之に任せて其之く所を究め以て盡くるに放る、廢せざるなく、任せざるなし、何ぞ遽に其間に遲速せんや

と答へて天命に任すべきを説きぬ。墨子の説は頗る其趣を異にす。

墨子名は翟、宋の太夫なり、經世利民を目的として兼愛の説を立て愛を以て人道の大義とし且つ天下の利を興すべきを説く、墨子の書七十一篇、今遺る者兼愛三篇、節用二篇、節葬一篇のみ。死生に關する感想は之を窺ふこと難しといへども、彼れは徒らに天命を説くを排して、富も命なり、貧も命なり、壽も命なり天も命なりとせば、百姓其業を勉めず、百官其事を事とせず、皆な以て命なりと爲し天下瘠乏し國家崩壞せんといひ、祖先の靈と天との存在を認容し、各個人の靈魂も亦實有なりとし、

鬼神の賞罰儼然なるを示し。

天下の衆をして皆な鬼神有無の別を疑惑せしむ、之を以て天下亂る。とし、神話傳説を論據として杜伯、不辜を以て周の宣王に殺され、後三年宣王諸侯を令して圃田に用ひし時、白馬素車に乗じ、朱衣冠を着け、朱矢を挟み、宣王を追ひ射しが如きの例を舉げ、唐虞三代の聖王皆な之れを祀りたまひしを證とし、既に之を祀る其對象なかるべからずと説きて有神有靈魂の論を立てぬ。

揚墨の二説は支那思想の正系たる儒道二教と相容る、能はざりしが故に終に盛行することなくして世は秦漢の時代に入れり。

### (五) 伯夷叔齊并に屈原の死生觀

孔孟の思想は所謂先王の道にして支那思想の中樞なれば孟子が生も我が欲する所、死も我が欲する所、二者兼ぬるを得ざれば生を捨て、死を取らんとしへるが如き崇高なる意氣は此民族が道義の根底を爲したるも

のにして伯夷叔齊の行動は實に此の思想の權化といふべきにあらざるや。伯夷叔齊は孤竹君の二子なり。父、叔齊を立てんと欲す、父卒するに及び叔齊之れを伯夷に譲る、伯夷曰く父の命なりと遂に逃れたり、叔齊も亦立つを育せずして逃れ、國人其中子を立つと、父母に孝に兄弟に友に遜讓の徳、實に儒教理想の人たり、周の武王木主を祀せて文王と稱し東して殷の紂王を討つに當り、伯夷叔齊、馬を叩いて諫めて曰く、父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ孝といふべきか、臣を以て君を弑す仁と謂ふべきかと、武王の左右之れを兵せんと欲す、太公の曰く、此れ義人なりと扶けて去らしむ。伯夷叔齊は此時既に生を捨て、義を唱へ、身を惜まらずして仁を説きしなり。幸に太公のあるあつて其命を完うしたりといへども、武王の殷の亂を平げて天下、周を宗とするに及んで、義として周の粟を食せず、首陽の山に隠れ薇を采て之れを食ひ、將に餓死せんとするや、歌を作て曰く、

登彼西山兮、采其薇兮、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏、忽焉沒

兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、  
 と終に首陽山に餓死す。これ殆んど他の民族に於て見るべからざる人生觀にあらざるや。孔子之れを賛していふ、仁を求めて仁を得たり、又何をか怨みんと。  
 由來支那思想には一面ストア的の剛健なる道義的觀念を以て死を輕んずる風あると共に他面には厭世の思潮の伏在するあり、伯夷叔齊の如き其適例といふべきか、周衰へて戰國亂離の世となるや英雄割據して支那武士道はこゝに發揮し彼の齊人魯仲連の趙に遊んで邯鄲に在るや、偶ま趙、秦を尊んで帝とせんとするを聞き、憤然として曰く、彼の秦は禮義を棄て、首功を上ぶの國なり、若し肆まゝに帝とならば、我、連、東海を踏んで死せんのみ、秦が民たるを願はざるなりと、氣骨稜々、天下の士を以て任ず、後、平原君、魯仲連を封せんとするや彼れ受けず、乃ち千金を以て壽せんとす、連笑て曰く、天下の士たるに貴ぶ所は人の爲に患難を排して取るなきにあり、若し取るあらば之れ商賈の事、爲すに忍

ひざるなりと、若し夫れ一諾の信を重んじて身を挺して秦王刺殺の大任を受け、風蕭々として易水寒し壯士一たび去て復た還らずと歌ひて咸陽に入り單身七首を持して秦王に見え、事成らずして斃れし荆軻の如き懦夫をして立たしむる美談は皆な以て當時の志士が死生に關する感想を見得べき事蹟にあらずや。是等の思想の主として儒教的なるに反し頗る厭世の悲調を帯びたるものを楚の屈原の行實とす。

屈原名は平、楚の同姓なり、楚の懷王の左徒と爲る、博聞強志、治亂に明かに辭令に嫻ふ、入りては王と國事を圖議して號令を發し、出で、は賓客に接して諸侯に應對す、王甚だ之を任用す、上官大夫、之と利を同うし、寵を争ふて心に其能を害す、適ま懷王の屈原に憲令を造らしむるや、屈原艸稿を屬して未だ定めず、上官大夫見て之を奪はんとす、屈原與へず、因りて之を王に讒す、王終に原を疎んず。屈原此に於て憂然措く能はず、王聽の聰ならざるは讒諛の明を蔽ひ、方正の容れられざるは邪曲の公を害するに由ると「離騷」を作つて悶を遣るも悲哀の情切に、楚

國を念ふて忘るゝ能はず、江濱に至りて澤畔に行吟し、竟に懷沙の賦を作り、石を懷て自ら汨羅に投ず、懷沙の末段に曰く、

浩々沅湘兮、分流汨兮、修路出蔽兮、道遠忽兮、曾吟恒悲兮、永歎慨兮、世既莫吾知兮、人心不可謂兮、懷情抱質、獨無匹兮、伯樂既沒兮、驥將焉程兮、民生有命、各有所錯兮、定心廣志、余何畏懼兮、傷爰哀永歎喟兮、世溷不吾知、心不可謂兮、知死不可讓、願勿愛兮、明以告君子、吾將以爲類兮。

別に漁父の辭あり、絶命の想を説明す。

屈原既放、遊於江潭、行吟澤畔、顔色憔悴、形容枯槁、漁父見而問之曰、子非三閭大夫與、何故至於斯、屈原曰舉世皆濁、我獨清、衆人皆醉、我獨醒、是以見放、漁父曰聖人不凝滯于物、而能與世推移、世人皆濁、何不泥其泥而揚其波、衆人醉、何不餽其糟、而歠其醢、何故深思高舉、自令放爲、屈原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣、安能以身之察々、受物之汶々者乎、寧赴湘流、葬於江魚之腹中、又安

柴玉

能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎、漁父莞爾而笑、鼓枻而去歌曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足、遂去不復與言。句々悲調を帶ぶ、彼れは實に煩悶死を決して身を汨羅に投じたりしなり。彼れの門に宋玉あり、字は子淵、同じく楚の人、曾て招魂の賦を作りて汨羅に投じたる屈原の魂魄山澤に散漫して厥の命將に落ちんとす、故に其魂を招くの意を述ぶ(或はいふ是れ屈原の自作ならんと)其辭幽悽哀悼、其談頗る怪奇、譬喩頗る玄妙、帝、巫陽に告て曰く、有あり下に在り、我之を輔けんと欲す、魂魄離散す、汝筮して之に與へよと、巫陽對て曰く掌夢上帝、其命從ひ難し、若し必ず筮して之に與へんとせば恐くは之が去るに後れん、復た巫陽を用う能はず、乃ち下に魂を招くの辭あり、

魂兮歸來、去君之恒幹、何爲乎四方些、捨君之樂處、而離彼不祥些。

魂兮歸來、東方不可以託些、長人千仞惟魂是索些、十日代出流金鑠石些、彼皆習之、魂往必釋些、歸來歸來、不可以託些。

魂兮歸來、南方不可以止些、雕題黑齒得人肉以祀、以其骨爲醢些、蝮

蛇蓀々、封狐千里些、雄虺九首、往來倏忽、吞人以益其心些、歸來歸來、不可以久淫些。

魂兮歸來、西方之害、流沙千里些、旋入雷淵、靡散而不可止些、幸得脫其外曠宇些、赤熒若象玄蠶、若壺些、五穀不生、藜菅是食些、其土爛人、求水無所得些、彷徨無所倚、廣大無所極些、歸來歸來、烈自遺賦些。

魂兮歸來、北方不可以止些、增冰峨峨、飛雪千里些、歸來歸來、不可以久些。

魂兮歸來、君無上天些、虎豹九關、啄害下人些、一夫九首、拔木九千些、豺狼從目、往來皓々些、懸人以娛、投之深淵些、致命於帝、然後得瞑些、歸來歸來、往恐危身些。

魂兮歸來、君無下此幽都些、土伯九約、其角鬻々些、敦背血拇、逐人鬻々些、參目虎首、其身若牛些、此皆甘人、歸來歸來、恐自遺災些。

と謳ひて終に魂や歸り來て我が修門に入れりといひて魂を待つつの狀を告

げたるもの、言辭怪奇、意を得るに難しといへども以て彼等が死後に對する感想の一斑を知るに足らんか。

### 第三章 中古支那に於ける死生觀

#### (一) 秦漢の死生觀

秦の始皇

秦の始皇、六國を亡ぼして天下を統一し、北の方、匈奴を征して萬里の長城を築き、南の方、百越を伐ちて安南に及び、威權赫々、内は學者の横議を憎みて博士所藏を除くの外、悉く天下の詩書を焚き、咸陽の諸生六十餘人を坑殺し、盛んに土木を起して壯大宏麗なる阿房宮を渭水の南に造り、東西二百間、南北四十丈、更に離宮を建つること七百、皆な華美人目を眩す、人生の快樂豈に之れに過ぎたるものあらんや、されど歡樂極りて哀情多し、始皇は此歡樂境裡にありても一念、死の運命の免れ難きを思ふに當りてや、衷心悶々の情に耐えざりしが如く、方士の言を信じて不死の靈藥を蓬萊に求めしめ、其の疾篤きに及びても死を云ふ

を惡みしの蹟は暴横始皇の如きも此人情の弱點あることを示せるにあら  
ずや、仙藥未だ來らずして始皇既に死す、始皇既に死したりといへども  
仙藥の説は此時代の信仰を支配したり。蓋し老子に長生久視の道あるこ  
とをいひしより老莊の哲學は支那民間信仰と合し、周末より漢初に入り  
て五行説も亦之れに相應じ其盛行を見るに至りぬ。

五行の盛

五行の説は其源遠く洪範に出るといへども其盛行するに至りしは此時  
代にして萬物を悉く木火土金水の五行に配し、氈、臭、腥、朽を五臭といひ、  
酸、苦、甘、辛、鹹を五味とし、角、徵、宮、商、羽を五聲といひ、青、赤、黃、白、黒を五色、  
東南、中、西北を五方、春夏、土用、秋冬を五事とし、終に其相生相尅を論じて  
人事の吉凶を斷するに至り、其の説は兩漢を通じて用ゐられ一代の鴻儒  
董仲舒の如きも其説全く此五行に基き、人類の源始を父母より祖父母に  
至り祖父母より曾祖父母に至り追究して止まざれば終に天に歸せざるを  
得ず、天は人類の祖先なり、萬物の源始なり、一切萬物は悉く天意によ  
りて支配せられ命は天の命なり之に従はざるを得ずとし、吾人の身體に

董仲舒

三百六十六の小節あるは一年三百六十六日に象り、十二大節あるは十二  
月に象り、五臟は五行に象り、四肢は四時に象り、目の開閉は晝夜に象  
り人の心に喜樂怒悲の四情あるは猶ほ天に春夏秋冬あるが如しとして天  
人其形相似たりと説き、人に貪仁の性あるも亦天に陰陽あるが如しとい  
ひ、天人感應を信じ、人惡しければ天之を戒め、惡政に日蝕ある等のこ  
とを説き、其倫理に於ても從來の仁義禮智の外に信を加へて五行に配當  
す。死後の考察に就ては多く之れを揣摩し難しといへども魂は天に歸す  
と思惟したりしや疑なきが如し。

淮南子

之れより先き漢の高祖の子淮南王長の子に姓は劉、名は安なるものわ  
り、好んで書を読み其封を襲で淮南に王たるや、諸儒方士を招致して道  
徳を談じ書二十一篇を著はす、號して鴻烈といふ、鴻は大にして烈は明、  
大に道を明にするの意なり、世に謂ふ所淮南子なるもの之れなり、其説  
雜駁なりといへども旨とする所は荆楚の學風にあり、其精神訓にいふ、  
夫れ夏后氏の璣なる者、匣置して之を藏す、寶の至なり、夫れ精神の



實とすべきや直に夏后氏の璣のみにあらず、是故に聖人無を以て有に  
 應じ、必ず其理を究め、虚を以て實を受け、必ず其節を究む、恬愉虚  
 静、以て其命を終ふ、是故に甚だ疏んずる所なくして、甚だ親む所なく  
 徳を抱て和を煬べ、以て天に順ず、道と際たり、徳と隣たり、福の爲  
 めに始めず、禍の爲めに先んぜず、魄魂其宅に處り、精神其根を守る  
 死生己れに變なし、故に至神と曰ふ、所謂真人は性、道に合す、故に  
 有にして無の若く實にして虚の若く、其一に處して其二を知らず其内  
 を治めて其外を識らず、明白太素、無爲にして撲に復し、體本と神と  
 抱き以て天地の樊に遊び、茫然として塵垢の外に徜徉し、無事の業に  
 逍遙し、浩々蕩々、機械の巧、心に載するにあらず、是故に死生亦大  
 而して變となさず云々。

といひ、性に由て絶對に到達し得べしとし、  
 其寝、夢みず、其智萌さず、其魄抑へず、其魂騰らず、反復終始して  
 其端緒を知らず、太宵の宅に甘瞑して昭々の字に覺視し、無委曲の隅

韓嬰

に休息し、無形埒に游傲し居て容なく、處て所なく、其動形なく、其  
 静、體なく、存して亡するが如く、生て死するが如し云々。

といふ、蓋しこれ道家者流長生不死をいふの淵源か、是等と同時代に韓  
 嬰あり、文帝に事へて常山王の太傅に至り武帝の時、董仲舒と帝の前に  
 論じて名あり、其著韓詩外傳あり世に行はる、中に曰く、

人死するを鬼といふ、鬼は歸なり、精氣は天に歸し、肉は土に歸し、  
 血は水に歸し、脉は澤に歸し、聲は雷に歸し、動は則ち風に歸し、眠  
 は白月に歸し、骨は木に歸し、筋は山に歸し、齒は石に歸し、膏は露  
 に歸し、髮は革に歸し、呼吸の氣、復た人に歸す。

と、呼吸の氣、復た人に歸すの思想は輪廻轉生の思想と混和すべき傾向  
 を有せりとも見るべし。

此時代に於ける支那思想は頗る羸弱の弊に陥り五行説の流行は殆んど  
 絶頂に達し、英邁漢武帝の如きも老莊神仙の説に感溺し、其跡頗る秦の  
 始皇に類するものあり、想ふに武帝は漢室中興の祖にして内治外政大に

見るべきものあり、國威も爲に入紘に振ひしかど、晩年方子季少君が蓬萊の仙者得て見るべしといへるを信じ、方士を遣して不死の靈藥を求めしめ、自ら四方に巡遊して神仙を求め、又方士公孫卿の神仙樓居を好むといひしに迷ひて大に宮室を營み、高さ二十丈大さ七圍銅を以て鑄なたるの美露臺を作り上に仙人掌あり雲表の露を受け、之れに玉屑を和して飲めば長生すべしと信じ、其他蓬萊、方丈、瀛州の三神山を作り、數ば奇物を得て祥瑞と爲す等、全く迷信の渦中に陥りしが如き最も著名のものたり、これらの迷妄の信と共に織緯の説勢ひを得、前漢哀帝の時より儒家の經に對して緯と稱し先秦雜家の書を敷衍し五經に對して易緯書緯詩緯禮緯春秋緯等成り天文曆數に合して吉凶を豫言するに至り、王莽之れを信じ、後漢光武の如き英主も亦之れを用ふ、其迷妄、今日より見れば笑ふべきもの少からず、これらの思想を攻撃して頗る健全の觀あるものを王充とす、王充著す所論衡あり、立論高く世表に出で天人感應の妄を駁し、吉凶禍福の豫定を攻撃し、死後の鬼を以て人の思念の現れたる

王充

ものにして其實あるなしといひ、天地萬物は一元氣によりて初めらる、此氣を受けて或は人となり或は禽獸となる、其人に貧富貴賤の別あるは皆な氣の厚薄によるものにして既に其氣を受けて其形を現はす、これ器形既に成る、小大すべからず人體已に定る、減増すべからず、氣を用て性たり、性成て命定る、體氣は形骸と相抱き、生死は期節と相須つて形變化すべからず、命は減加すべからずといひて不死長生の理由なきを説けり、されど一般の思潮は依然五行織緯を脱すること能はず、老莊の思想はますます盛なるの傾向なり。

### (二) 三國六朝の死生觀

五行織緯の學は迷妄の信を鼓吹して思想羸弱に流れ、清節の士は世を山林に遯れて獨り自ら高うし漢室は日に衰へて群雄諸方に割據し、鉅鹿の張角の如きは妖術を以て民を誑惑し、符水を以て病を治すと稱し弟子を四方に出して勢を張ること十有餘年、其徒數十萬、皆な黃巾を着け漢

室の衰ふるに乗じて亂を山東に起す、これ實に將に倒れんとする漢室の絶命を速にしたるものにして其後、世は蜀、魏、吳の三國に分立し干戈相交ること五十餘年終に晉の武帝の爲めに統一せらる、此三國時代の代表者として吾人はこゝに諸葛孔明を擧げんとす。

諸葛孔明

初め蜀の劉備の王室の胄なるの故を以て微賤より起りて興復を計らんとし、未だ志を得ずして士を求むるや、三び孔明を其の艸廬に訪ひ、言ひて曰く、漢室傾頽姦臣命を竊ひ、孤、自ら揣らず大義を天下に唱へんと欲す、抑も如何の策に出づべきと、孔明、策を畫して曰く將軍既に帝室の胄、信義四海に著るれば百姓孰か敢て箝食壺漿して以て將軍を迎へひらんと、これより險を履み力を竭して劉備を助け終に皇帝の位に即かしむ帝、孔明を以て丞相として國事を委ね信任最も篤し、帝の病むで崩せんとするや、孔明をして太子禪を輔けしめ、且ついふ、嗣子輔くべくんば之れを輔けよ、不可ならば君自ら之れを取れと孔明涕泣していふ、臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を効じ、之に繼ぐに死を以てせんと、帝即

出師表

ち太子禪に告げて、惡の小なるを以て之を爲すことなかれ、善の小なるを以て爲さざるることなかれ、惟れ賢惟れ徳以て人を服す。汝、丞相と事に従ひ、之に事ふるごと父の如くせよと、帝崩するの後、孔明、禪を助けて漢室の興復を以て己が任とし、其出で、漢中に屯して中原を圖らんとするに當り、表を上りて志を告ぐ、句々忠誠、言々人を動かす、前出師表なるもの之れなり、かくて大軍を率て魏を伐ち關中響應す、偶々參軍馬騁、孔明の節度と違ひ敗績す、孔明乃ち漢中に還り更に兵を出して魏を伐たんとし表を上りて志をいふ、後出師表これなり、其末段に、  
臣鞠躬盡力、死而後已、至於成敗利鈍、非臣之明所能逆觀也。  
の數句は實に孔明が死生觀を言明せるものにして孔孟教義の權化とも見るべきか、孟子の所謂富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざるものたり。かくて群を抜き將を斬ること數回、魏將司馬懿、其威名を憚り山に登り營を掘り肯て戦はず、孔明乃ち民を息め士を休すること三年、復た大衆を悉くし進んで五丈原に據り、懿と渭水の南

に對し、兵を分ちて屯田し久駐の基と爲し、數々戰を挑むも敵、畏れて出でず、しかも高士も病魔に克つ能はず、秋風五丈原に荒みて後事を處分し從容精整、終に軍に卒す、實にこれ鞠躬盡力死して後已むものなり。

孔明の死生觀は羸弱の痕跡を認むる能はずといへども、當時一般の思想界は老莊の神仙說に陥りて迷妄の思想少からず、三國六朝を通じて談は高遠に入り詞は華麗に流れ、厭世の思潮は脈々として時代の中樞となり、殊に漢末に於ける佛教の渡來は此思潮を激し、終に竹林七賢の如き清談家を見るに至りぬ。彼等は酒を呑んで悶を遣り玄を談じて鬱を散せし憂世の士なりしやも知るべからずといへども其行動は頗る超絶的非人情的にして、其徒の一人たる阮藉は戸を閉ぢて書を讀み、累月出でず。或は山水に登臨して歸るを忘れ、酒を飲んでは狂態百出、甚しきは酣醉六十日に亘るといひ、其母の訃音に接するも碁を圍みて止めず、終りて酒を飲むと二斗、泣いて血を吐くこと數升なりしといひ、劉伶は鹿車に乗り一壺の酒を携へ、從者をして鋤を擔ふて從はしめて曰く、死せば我

七賢人

抱朴子

を埋めよと、嵇康の如きは曾て潁川の貴公子鐘會康を訪ふに當り康、禮せず、會良久うして去る、康之に謂て曰く何の聞く所にして來り、何の見る所にして去ると、會いふ、聞く所を聞て來り、見る所を見て去ると、會これより康を憾み讖して獄に繋ぎ東市に刑せんとす、康自若として琴を索めて影を見、彈じて曰く廣陵散、今に於て絶ふと彈じ畢りて斬らる、七賢とは阮藉、劉伶、嵇康の外、山濤、三戎、阮咸、向秀を指す皆な虛無を主義とし脱俗を旨とするもの、如是の清談者流は僅に世を山林に通るのみ、されど之れ未だ以て眞に超越の境にあらず、寧ろ此形骸を脱して羽化登仙せんには如かず、此思想を代表するものを抱朴子とす。

抱朴子、姓を葛洪、字を稚川と稱す、生れて性鈍く、口訥、形も亦醜なり、自ら貧賤に安んじ、富貴は天なり、之れを得るも樂みにあらず、之れを失ふも悲むに足らず、寧ろ性を養ふて神仙を求むるに若かずと深山に入りて神仙を研究し博聞深洽、洵に一代の奇士たり、其の著抱朴子、分ちて内外の二篇とし、内篇には神仙符籙の事を論じ、外篇には時政の